お認めになつて熱心に双眼鏡を向けさせられたりした其中に小さく見えてゐた十五キロ選手が直き近くの南狐森に現はれて山の背を滑降するのを

非常に興深く御覽なされて

『ヤッ滑降したね、倒れた！倒れた。それ二番目があの松の間に見え出した』

と仰せられ扈從の人たちが却つて殿下から説明を承はると云ふ有樣。選手が續々と姿を現はし、南狐森で盛んに轉倒してゐるのを御覽になつて其御喜び一方でなく、前方へスキーのまゝ走られて

『これは面白い。こゝの急斜面で多く轉ぶか少く轉ぶかで勝敗がきまるんだね、おや向ふのゝがあんな處から制動して、バカに用心してゐる』

と興ぜられ、それから北狐森を滑降遊ばされ、途中兎の跡を御覽になり

『これは何んと云ふ動物だらう』

と御たづねになり『兎でございます』とお答へ申しあげると

『どつちが前肢だらう』

と重ねて御下問遊ばされた。南狐森の急斜面を御登りになり、設けられてある御休憩所にも入らせられず直ちに

練習を始められ、數回ステムクリスチャニヤを試みられつゝ

『中川君、ステムクリスチャニヤが問題になつてゐるんだが——あの要領はどうなんだらう。ストップするとき山脚をレフトしてはいけないと云ふんだが、どうも難かしい』

と重ねて數回試みられ、其御研究の深さにはお供の人々は恐入つて了つた。軈て會場へお歸りになることになつたが、殿下には御自ら先頭にたゝれて南狐森の背を北へ向けてコースをとられた。此處は非常に難所で選手も必ず數回轉倒する處で、先刻殿下が選手の轉ぶのを御興じになられた場所なのだから扈從の役人たちは全く降參して了ひ殿下に續くものは數名に過ぎなかつた。

午前十一時に會場へ御歸着遊ばされ御晝食をとられ午後一時に再びスロープ御登行を仰せ出された。殿下には終日手袋を用ひたまはず頗る御元氣で、狐森電話通信所あたりにさしかゝられた時、三十基選手が續々と

滑降し來るに會せられたので、暫しお御足を留めさせられ選手一人々々を興深く御眺めになり、更に上方のジャンプ臺をさして進まれた。脚下に擴るスロープを振返られては

『こゝを直滑降したら面白いだらうね』

と仰せになり、四方の山々を指されつゝジャンプ臺に御到着になつた。殿下はジャンピングについても深い御知識を有せられシャンツイの構造等について外國の例などを左右の人々に御話あり

『どこかいゝスロープはないかな、ウンと急な所が……』

と仰せられ堅雪になつてコンデッションの惡い前平山下のスロープを洵に御見事な直滑降で一氣に下られた。そして御休憩もなく北狐森に御登りになり北向に處女雪の斜面のあるを認められて雪煙を立てゝ御滑降なされた。此處のスロープがお氣に召されてか廻轉滑降など數回試みられ、又彼方此方と山々を指さゝれては御物語あられられ殿下が如何に雪に御憧憬なされてゐるかゞ拜察された、斯くて午前御通過なされた南狐森の難所を再び確實なテクニックを用ひられて御滑降になり午後三時會場に御歸りになられたが、スタート附近にスキーを御穿きのまゝ左右の人々と色々談笑遊ばされ

白い象牙のパイプで煙草を燻しながら阿闍羅山の風景等を御撮影のためリュクサックからカメラを取出され自ら御撮りになり、その中にインターカレヂ三〇基米の最初のゴールインたる早大岩崎選手がゴール附近に姿を現すやカメラを之に向けて撮影された。此頃より寒氣次第に募り、身を切る樣な阿闍羅颪に觀衆はそろ〳〵歸り始めたが殿下には續々と來るインターカレヂのゴールインを御興深く御覽ぜられた後御座所下の隨行員席にスキーの儘おいでになり御茶を召上り阿闍羅餅を御摘みになつて

『これはうまい』

と仰せられ非常にお氣に召された樣であつた。午後四時を過ぎた頃にインターカレヂの勝敗の見込がついたので、殿下はその結果を御聽きになつた上、午後四時二十分御歸館を仰せ出されたが、實に豫定よりも一時間二十分も長く會場にお止まりになつた譯で如何にスポーツに御熱心なるかは之に依つても窺ひ知ることが出來る。

翌十五日は午前六時半に御起床遊ばされ御朝食後午前八時、吉村知事の案内で藏館村に在る明治大帝御遺跡「お茶の水」並に國寶大日如來に御成りになつたが、お茶の水に於ては感慨深げに四邊の景色を眺められ、大日如來に於ては工藤住職が「もと此の本尊は阿闍羅山上の國分寺にあつたのを建長年間に此處に移した」旨御説明申上げた際「國分寺か」と仰せになつて本尊に對し脫帽拜禮の上つく〴〵之を眺められた。それより大鰐小學校に立ちよられ校内に入らせられず玄關にて御自らスキーを穿きになり

『中川君、ワックスを塗つて呉れたか』

と中川新氏を顧られ「塗つておきました」と答へるや輕くうなづかれジャンプ臺に向つて御出發なされた。途中、雪ふりしきる杉林や林檎園をお通りになり、いと御元氣にて午前九時二十分、大會役員のお出迎を受けさせられジャンプ臺に御到着になつた殿下には

シヤンツエの下で木原博士、鈴木信三、泉菊次郎、緒方温光氏等をお相手に色々とジャンプのことに關して語られ河本博士が下から登つて來て挨拶をすると

『もう先きに來られたのかと思つてゐた』

と仰せになる。大會幹部の諸氏が交る〴〵御挨拶して「昨夜はよくお眠りになられましたか」と申上げると「有難う」と微笑まれた。そして

『スキーで來たかい、それともスキーを擔いで來たかい』

とあたりの方々にお冗談をお言ひになつたり其のお氣輕な御樣子は正にスポーツの宮樣である。審判臺側の御坐席に上られジャンプ競技を興深く御覽あらせられ、終つて雪ふりしきる露天のテーブルで御辨當をとらせられて御用係がお勸め申したお茶一服を召しあがつて直ちに當日の御日程である阿闍羅山御踏破のお仕度にとりかゝられた御愛用の山岳スキーにアザラシの皮をつけられてから、お手早に上衣を脫がれ

鮮麗な色彩のセーターをも脫がせられてワイシャツ一つの上にスキー服の襟を立てゝ召された。スキーをお穿きにならうとしたが、靴の底に雪が澤山附着してゐるのを御覽になり、手袋も召されぬお手をもて、直き〳〵にいと無雜作に雪を掻きとられた。午後零時三十分、お附きの人八名を隨へられ直ちに前平山の急坂を御登攀なされた。折柄、千代紙を千切つた樣な綿雪が降り始め幾千の群衆が肅として見送る間に御一行はコースを電光形にとつて遠く遠く頂上へ御姿が消えて行つた。殿下には七

尺二寸もあるスキーを穿かれて少しもお疲れの模樣もなくお附きの人々は只々驚嘆するばかりである。前平山の急坂は雪がコツコツに凍つて實に困難で、殊に殿下は長大なスキーを用ひられたため方向がとり難かつたのであるが、先頭者が全精力で頑張つてゐても、いつも追ひつかれるのであつた頂上まで約二時間を要し、頂上で一寸休憩して直ちに御下降の途につかれた。殿下には前平山の

急坂御滑降　遊ばされたいとの御希望を述べられたのであるが、とても急坂であるのに雪がクラストしてゐるので萬一の危險を慮り御願ひして夏街道にコースをとつた。夏街道は狹いのに殿下のスキーが大きいので、お附の人々は恐縮したが而かも精力絶倫を誇る油川少佐も殿下の御後に從つては全く問題にならなかつた程、殿下は御强かつた。午後三時二十分無事會場へ御歸りなされ少しも御疲れの御氣色もなく、扈從の人々が急いで休憩してゐるのに殿下はスキーも脱り給はずゴールの傍に立たせられて、インターカレヂ十五基米の各校成績や豫選大會の選手が今何處を走つてゐるか等と御質問になられたり

『山の雪はよかつたよ、弘前が見えたり東京が見えたりしてれアハハ、、、』

と御冗談を仰せられ

『雪のため眺望は利かなかつたが雪質は昨日よりはよかつた』

と御詔らひになり二千二百尺の山を今しがた御踏破された御樣子とも見えず。その中に全日本東北豫選々手の五所川原倶樂部三橋君がゴールインするや

『オールジャパンか。伸々元氣だ、俺いものだ……インターカレヂに比べては體力も經驗も低いのだからタイムは劣るかも知れぬが元氣だね』

と仰せらる。かくして隨行員席でお茶を召上られつゝ神宮豫選、東北豫選を御覽になり午後四時四千五分御旅館へ御歸還になつた

十六日は朝　八時十五分に御宿を御出發なされ羽黑神社の坂を登られ神社上でスキーをお穿きになつたが前日の如く手袋を召されず御手にてスキー靴の底の雪を落されお元氣にてトツ〳〵と御登行遊され牡丹森を經て午前八時五十五分にジヤムプ臺に御成りになつた。お着きになるやシヤンツエ直下のランデングスロープを御覽になつて

『此處を滑つて見やうか』

と仰せになり木原博士が先づ直滑降すると續いて殿下にもシヤンツエ下から三十度の急斜面を滑降遊ばされ、一流の選手でもよくなし得ない處を勇しくも御滑降遊されたが其御英姿に數千の觀衆は固唾を呑んだ。其途中殿下にはスピートの爲め御帽子を飛ばされたが見事に二百米の下まで御降りになつた時、一齊に拍手と歡呼の聲が起り山を搖がした。殿下の後から續いた中川新氏が殿下の御帽子を拾はんとしたが拾ふことの出來なかつた程の急斜面である。殿下には御疲れの御樣子もなく中川氏と御一緒に再びランデングスロープを御登りになり乍ら種〻スキーの技術について專門的の事を打語らせられ、シヤンツエ下に御着きの時、木原博士が「如何でした」とお問ひ申せば

『面白いよ、傾斜角度が四段位になつてゐるらしいが滑つてゐるとスピートがあるのでちつともそれが分らないれ』

と仰せになり元氣よく御笑ひになる。斯くて午前九時三十分からインターカレヂのジヤンプ競技が開始されるや御坐席から興深く御覽になり、

屢々カメラ　を向けさせられるなど御氣嫌一入うるはしく拜された。午前十時二十分頃お附きの方から『もう豫定の時間が參りました』と申しあげても

『もう一人飛ぶのを見ても列車には大丈夫だ、スキーで行くと直きだよ』

と仰せられ仲々お心殘りの御樣子で、十時半にスキーを穿かせられたがそれでも尙五分間ばかりスキーの儘で競技を御覽ぜられ十時三十五分いよ〳〵シヤンツエ下を御立ちになれられた。牡丹森から大鰐小學校へ成らせられ小學校前のスロープで中川氏を相手に制動廻轉について色々と御話あり御自ら型を示されたりして笑ひ興ぜられ、午前十一時に二分前となるや殿下御自ら

『停車場へ行かうか』

と仰せになり、沿道兩側に堵列して奉送する群衆にお懇ろなる會釋を賜ひつゝ停車場に御着になり御手づからスキーを脱がせられ、ホームに進まれた。この時奉送の爆竹は勇しく響き渡り、午前十一時五分奉送の人々の唱和する萬歲の聲に會釋を賜ひつゝ我がスポーツの宮には雪の大鰐を御出發になつた。殿下にはインターカレヂ優勝校へ御賜盃の御沙汰があり青森縣スキー聯盟を始め御側に奉仕した係りの人々へそれ〴〵御下賜金の御沙汰があつた。

スケート

スケートは最近頓みに普及し大正十五年に八戸に始めてスケート協會が組織された。八戸は郊外に勘太郎堤、御前堤、館越堤等の理想的な天然リンクを持ち全國屈指の氷質との折紙を付けられ同町は全國に紹介すべく努力を拂つてゐるのである。

昭和二年には縣内大會を開き三年四月東京に催された全國を統一した氷上聯盟に加入したが之は全國大會候補地に指定を條件として加入したもので將來を期待するに充分である。青森市も又人口リンクの設計をなし浦町に之を實現したが活躍は寧ろ三年冬季にあると期待される。八戸協會對八中のアイスホツケー戰は二年二月十四日御前堤に開催し四對一で八戸協會が勝つた。

武道

柔道劍道は盛大を極め兩道共に高段者が少くない中等學校では柔道八戸中學强く東北關東に連年優勝し劍道は東奥義塾、弘前中學、八戸中學、青森中學等群雄割據の樣である。一般は警察界を中心に劍道隆盛を極め、近時亦劍道と相伴つて柔道が興り青年團、各團體に駸々として普及してゐるが然し柔道の見るべきものは青森明道塾、八戸柔道會を除いては殆んどない。昭和三年五月武德會及講道館有段者は合併して柔道有段者會が新に組織され二段を限度として詮衡せしめる事が出來る事になつてゐる二年八月有信館長中山博道氏八戸中學へ來校して教授された事は此の年の一收獲であらう。

柔道

武德會支部四回大會　六月十八日より二日間青森中學校に開催戰績次の如し、

△中等校　青森師範、五所川原農學校、青森中學、青森商業、弘前中學、(優勝校)青森師範

△地方團體　歩兵五聯隊、弘前公園柔道部、大湊要港部、蓬田武道會、明道塾、警察部(優勝)歩兵五聯隊

北日本柔道大會　弘高主催北日本大會、於弘高道場、仙臺一中優勝、一回戰仙臺(青

師）秋商（青商）勝ち二回戰、仙臺（大中）

青中（秋商）決勝戰仙臺一中優勝

仙臺　青中
○須藤　×森山
分伊藤　分工藤
○佐藤　×佐藤
○郡山　×西塚
○于　×樫山
×○土井　分里見　分中村　×里見
×中村分○○清藤　分小田　分高田
×鈴木　高橋　分坪田
分岸田　○○杉山　永井　分小堀
×○山崎　北林　×海老名　○○北林
×中島　小堀×○笠原　×○○杉山

明道塾大勝　青森市明道塾は三年六月十七日函館へ遠征左の戰績で全勝した。

函中　明道塾　商船　明道塾
黑島（分）高田　鈴木（分）清藤
×古守　×○佐藤分○川村　×里見
×○○澤越　×里見分○大場　分佐藤
金澤（分）○清藤×○岩田　×坪田
×由利　×○坪田　×濱谷　分小堀
×○住田　×小堀　×鈴木　×原
綱（分）○杉山×加賀谷　○○○北林
○○○高田
玉村（分）原　×館田
×松村　○北林　×相原　杉山
商業　明道　師範　明道
×○○風間　×高田　中嶋（分）佐藤
×木村　×原　橋本（分）原
×横山○○○佐藤　分山本　×清藤

劍道

武德會支部第四回大會　六月十八日から二日間青森演武場及青森中學校に開催した。

△警察之部　七戸、八戸、青森、弘前、田名部、三本木、黑石、警察部、五所川原、鰺ヶ澤、（優勝）青森警察署

△中等校　弘前、八戸、青森、三中學、青森師範、東奥義塾、青森商業、五所川原農學校、（優勝校）八戸中學

△地方團體　野邊地、板柳尙武會、輜重隊、八大隊、步兵五聯隊、木造武道、青森刑務所、青森演武場、青森憲兵隊、縣廳、大湊要港部、青森林友會、（優勝）者青森演武場

青森市鄉軍武術大會　五月十九日から造道練兵場で擧行。

△軍刀術　全勝（東）增田精次郎三勝一敗（東）八木橋幸一（鐵）藤田淺次郎（東）後藤晃（北）岡本直四郎

△銃劍術　全勝（東）古木安太郎（南）姉帶操（東）黑瀧峰八（東）工藏軍八

△射擊　四〇點（東）木立美名古（鐵）小田桐由太郎（鐵）及川吉太郎

八師管鄉軍四縣對抗武道大會　第八師團在鄉軍人第二回大會は六月三日午前八時半から盛岡市武德殿、女師講堂、工兵隊練兵場で行れた。參加は本縣及秋田、山形、盛岡四團體である。

△銃劍術　青森七八〇點、黑澤峰八、加賀谷伊三郎、高橋三藏、堀內富太郎、齋藤與吉、高橋虎、久保岩藏、北山佐右衞門、工藤小三郎、土田貞三、川村由太郎、伊丸岡宗八、吉田源吉、山田三郎

△劍術　青森三二二點、工藤邦雄、田澤安太郎、高木仁衞

△射擊　山形三三七點、青森三二八點吉田常太郎、福士要逸、奥本庄助、坂本榮造

明治神宮銃劍術優勝　十一月一、二兩日の明治神宮體育大會銃劍術大會に本縣伊丸岡宗八氏優勝

△二回戰——完森（釧路）△三回戰——齋藤（山形）△四回戰——谷口（熊本）○五回戰——星（福島）△決勝戰——谷口（福岡）

北日本中等校大會　弘前高等學校主催北日本中等大會は十一月十八日弘高講堂で開催弘前中學優勝。

青師函館遠征　二月十一日函館へ遠征の青森師範學校軍函館中學を敗つて歸る。

青師　函中
×○○渡邊　×中村
×○○木村　×藤野
×○○大谷　×○成田
×○○工藤　×○岡部
○○○木村（祐）　×廣井
蓼內　×○中勢
青山　×大辻
清藤　×○小沼
一渡　×中村
須藤　×近江

護國館大會　二月十一日弘前護國館に大會開催した。

分工古川　中護檜田
護古川嶋　○中護石
◎中齋藤川　◎工古川　栗林　○中小山川
◎工櫻庭　中大川　◎工神田　◎護三上
○◎義柳谷　◎義清藤　◎義長谷川　◎義福島

◎義五森桑田　◎義五小田桐福山
○護楠美福原　○司小澤尾　○司高橋赤城
○大米　○砲井出高橋
○砲佐奈良藤　◎三太田戸　◎騎高橋
○義一戸
○騎石熊谷　◎騎工藤尾
○砲工笹尾
◎輜岡谷
○三奈須川佐藤　○三鈴木平田
◎護平田
○弘遠末　◎三山皆川光田
分義長谷川見村　◎輜義三戸澤
分五森高田　◎輜小林原　◎護柴田　◎弘林
◎弘佐々木畑野藤　◎護佐須藤　◎砲陰山藤
◎五結城伊藤
○砲森兒玉　◎五內山平田　○護
分護岩神淵　○護兒玉野崎　模護山屋橋
模護增田大金澤　模護小館池田　模護弘中澁谷
模護齋藤三須角藤　模護笹森

◇弘—弘高、大—大鰐警察署、五—五所川原、中—弘中、義—東奥義塾、工—弘工、五—五聯隊

弓道

青森市を中心として盛衰の運命を辿つて來た本縣の弓道は、現在も矢張青森市を中心に動きつゝある情況である。即ち東京の弓道館を大本として傳はつて來た本縣の弓道は現在大平範士一派の射覺院青森支部と、佐藤信敬氏の獨立大射道教支部との二派に分れ、此の他に大日本武德會青森支部が存在して居るけれども、事實は之等の二派によつて力を左右せられる樣な狀況にあり、縣下の弓道界にも亦此の如き事實を見出し得るのである。

中等學校、小學校等の學校弓道は日增し隆盛の狀態にあり、西郡、北郡、三戸、上北、弘前等の郡市にも各所に弓道場があつて、現在縣下で弓道に勵む人は相當の數に上つて居る。

弘高優勝　東北帝大全國高專大會、七月二十日仙臺武德殿參加八校優勝弘前高校三三四點二

相撲

本縣出身力士

幕内

一ノ矢藤太郎　南津輕郡光田寺村前田屋敷に生れ、明治十六年四月入幕、同二十二年五月大關に昇る。其後引退して郷里に歸り青森市濱町に居住してゐたが先年物故した。

綾浪德次郎　南津輕郡光田寺村前田屋敷に生れ、明治十八年五月入幕、同二十三年五月關脇に昇進す。同二十五年一月場所を最後に土俵を退いたが既に故人となつた。

北海大太郎　南津輕郡石川町に生れ、明治二十二年五月入幕、同二十八年五月前頭筆頭に進んだが既に故人となる。

千歳川受吉　西津輕郡森田村大字相野に生れ、明治二十年一月入幕、同二十六年五月小結に昇進す。後土俵を退いて立田山と稱し年寄となつて死亡す。

源氏山頼五郎　北津輕郡内潟村今泉に生れ初め今泉又市と稱し、明治二十二年一月入幕同二十九年一月源氏山頼五郎と改め、小結に昇進、同年五月關脇となる、其の後常陸山との爭ひより角界を退き既に故人となる。

綾浪源逸　南津輕郡野澤村大字銀に生れ最初雲龍と名乘り、明治四十二年入幕、同四十五年關脇に昇る。其の後湊川を襲名して檢査役の職に在つたが昭和二年逝去す。

雲龍辰五郎　西津輕郡車力村大字富萢に生れ、明治四十三年一月入幕、大正四年引退して年寄となつたが先年死去す。

十三浦金之助　北津輕郡中里村に生れ、明治四十四年五月十日入幕したが、大正元年頃死亡した。

櫻川五郎藏　南津輕郡山形村に生れ、明治四十五年五月入幕、大正三年五月從來の慶次郎を五郎藏と改名し、同五年土俵を退いたが先年物故した。

外ノ海傳助　西津輕郡出身にして明治二十四年五月入幕、同二十七年五月前頭筆頭に進み、同三十五年引退す。

頂キ專之助　西津輕郡森田村大字山田に生れ、最初岩木野龜吉と稱し、明治三十一年一月入幕、同年五月頂キ專之助と改め、同三十八年一月土俵を退いて郷里に歸つてゐたが、其の後消息は不明である。

立汐祐次郎　西津輕郡柴田村福原に生れ明治四十五年五月入幕、大正五年引退し現に臺灣に於て會社に勤めてゐる。

小野ケ崎金作　南津輕郡黑石町に生れ、明治四十五年五月入幕、大正三年三月前頭五枚に進む。同五年病氣の故を以て土俵を退き、其の後朝鮮及び滿洲方面に於て實業に從事してゐる。

大ノ高純市　南津輕郡十二里村大字俵升に生れ、大正六年五月入幕、同九年引退す。

清水川米作　北津輕郡三奴村大字鶴ケ岡に生れ、大正十三年一月入幕、同十五年小結に昇進し大いに將來を囑せられたるも故ありて昭和二年引退す。最近再び土俵に復歸するとの噂がある。

浪ノ音健藏　明治十五年南津輕郡五郷村鎌田家に生れ、同三十九年一月入幕同四十年五月關脇に昇進す。引退して現に年寄となり振分と稱す。

千年川金之助　明治十七年西津輕郡稻垣村豐川小島家に生れ、同四十年一月入幕、同四十四年五月佐兵衞を金之助と改め小結に昇進す。引退して年寄となり現に立田山と稱す。

八甲山純司　明治十八年東津輕郡横内村清藤家に生れ、同四十四年一月入幕、大正五年五月前頭四枚に進む。現に高島を名乘り年寄の職にある。

綾川五郎次　明治十六年南津輕郡六郷村大字上十川に生れ、本姓を村上要作と呼ぶ。大正二年一月入幕、同五年一月關脇に昇進す。現に引退して年寄となり千賀之浦と號す。

鬼龍山石松　三戸郡倉石村大字中市出身にして、明治三十二年一月入幕、現在久米川と稱し年寄の地位に在り。

大ノ里萬助　南津輕郡藤崎町天内家に生れ大正七年五月入幕、同十三年五月大關に昇進す。本年三十七歳にして現に西方張出大關の地位を占む。

外ケ濱彌太郎　南津輕郡石川町大字小金崎齋藤家に生れ、大正十三年一月入幕、同十四年五月前頭筆頭に昇進す。本年三十二歳現に西方前頭七枚に居る。

鏡岩善四郎　三戸郡猿邊村大字蛇沼佐々木家に生る。本年二十七歳にして此の夏場所初めて西方前頭に張出さる。

綾錦由之丞　南津輕郡猿賀村齋藤家に生れ大正十一年一月入幕、同十三年前頭筆頭に進みたるも、現に東方十兩筆頭に落つ。本年三十七歳。

其の他　北津輕郡三好村大字藻川出身に柏戸利助あり、嘉永元年二月十七日大關に昇り、後伊勢海太夫と改めて年寄をつとむ。

猶南津輕郡山形村板留に生れたる岩木野がある、明治二十七年幕下十兩となり、同三十一年一月入幕して後土俵を退く。

十兩

大岬傳左衞門　北津輕郡三好村大字鶴ケ岡に生れ、大正六年頃十兩に入つたが、同十年土俵を退き先年死亡した。

桂川力藏　東津輕郡野内村大字久栗坂に生れ、大正四年幕下十兩に入り、同六年頃土俵を退く。

浪泉藤市　南津輕郡大杉村大字大釋迦に生れ、明治四十五年幕下十兩に入り、同八年土俵を退く。

駒木川藏太郎　南津輕郡藏館村大字駒木に生れ大正八年十兩に昇り、翌年土俵引退。

藤ノ里榮藏　本姓を天内と稱し、南津輕郡藤崎町に生る。本年二十八歳にして現に十兩九枚にゐる。

立汐唯五郎　西津輕郡越水村大字下福原に生れ本姓を長谷川と名乘る。本年二十六歳にして現在十兩十枚に居る。

浪ノ音藤美　南津輕郡大光寺村奈良岡家に生れ、本年二十六歳十兩十枚にゐる。

綾櫻由太郎　本姓を清藤と稱し、西津輕郡鰺ケ澤町に生る。今年三十一歳にして曾て十兩に入つたが現在二段筆頭に在り、次の場所には十兩に復活を期待されてゐる。

岩木川末作　本姓を福井と稱し、南津輕郡藤崎町に生れ、昭和元年十兩に入り、今年二十八歳、現在二段十一枚にゐる。

汐ケ濱義夫　西津輕郡越水村下福原長谷川家に生れ、今年二十九歳、先年十兩に入つたが現在二段十六枚にゐる。

陸奥錦幸策　南津輕郡六郷村上十川に生れ大正十三年幕下十兩に昇つたが、現在は二段二十六枚に在る。

陸奥ノ花巖　青森市蜆貝町に生れ、姓は小島を名乘る。大正十三年十兩に入つたが現に三段五枚にゐる。

其の他、古くは北國、荒駒、陸奥里、荒角等があつた。

二段以下現在力士

鷹城山多作	二段七枚
綾ノ浪俊一郎	二段八枚
鷹ノ國修一郎	二段十四枚
綾ノ龍一枚	二段十五枚
若響角太郎	二段十五枚
綾若永木	三段十二枚
武ノ里武三	三段十四枚
花ノ里源逸	三段二十四枚
平賀川虎太郎	三段三十枚
朝風信市	三段三十三枚
鳴海潟六男	三段三十四枚
綾昇傳三	序二段五枚
汐木山熊太郎	序二段十一枚
荒汐兵助	序二段十七枚
工藤直市	序二段二十三枚
五大力常作	序二段二十六枚

以下之れを省略す。

出身力士最近四場所星取表（十兩以上）

	場所	地位	星取表
大の里	二年春	大關	○●○○●●○●●○○
	二年夏	張出大關	●●○●○○●○●○○
	三年春	同	○●○○●●やややや や
	三年夏	同	○○●○○●●●●○○
外ヶ濱	二年春	前頭四枚	○○○○○●○●●●●
	二年夏	前頭二枚	●●●●○○●●○●●
	三年春	前頭七枚	○●○●○●○○●○●
	三年夏	同	●○○○●●●●○○○
清水川	二年春	前頭筆頭	●●●●●●○●○●○
	二年夏	前頭七枚	やややややややややや や
	三年春	同十二枚	やややややややややや や
	三年夏	—	———————————
鏡岩	三年春	十兩五枚	○●○○●●●●○○○
	三年夏	張出前頭	○●●●○○○●○●○
綾錦	二年春	張出前頭	●●●○●●●○○○●
	二年夏	前頭五枚	○●●●や○●●●●●
	三年春	前頭十枚	●●●●●●●●●●○
	三年夏	十兩一枚	●●○●●●○●○●●
藤ノ里	三年夏	十兩九枚	●○○○○○●●○●○
立汐	二年夏	十兩五枚	やや●や○や○や●●○
	三年春	十兩八枚	○●●●○●●○○●○
	三年夏	十兩十枚	●●●●●●や●●●や
浪ノ音	三年夏	十兩十枚	●○●●●●●●○●●
汐ヶ濱	二年春	十兩四枚	や○や●や○や●や●●
	二年夏	十兩十二枚	や○や○や●や●や●や

昭和三年夏場所星取表

勝星（東一九八 西一一二）（○は勝●は負）

東方	初日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日	十一日
横綱 宮城山	○外濱	○雷峰	○新海	●若葉	○玉錦	○錦城	○大里	○山錦	●常嶽	●荒熊	●常花
大關 豊國	○錦城	○若葉	○常嶽	●山錦	○外濱	○新海	○玉錦	○雷峰	●常花	○若常	●大里
關脇 清瀬川	○常嶽	○錦城	●外濱	●大里	○常岩	●天龍	●若葉	●新海	や玉錦	や	や
小結 眞鶴	●雷峰	●外濱	○大里	○常嶽	○新海	●常花	○常岩	●若葉	○天龍	●玉錦	○山錦
前頭 錦洋	○若常	○桂川	●常岩	○常花	○雷峰	○外濱	○玉碇	○大里	○荒熊	○天龍	●玉錦
同 劍嶽	●荒熊	●常岩	●常花	●錦城	や	や	○雷峰	○若常	○大里	●常嶽	●新海
同 吉野山	●玉錦	○若常	○錦城	●常岩	●大里	○常嶽	●常花	○荒熊	○白岩	●雷峰	●天龍
同 三杉磯	●若葉	●大里	○荒熊	○若常	●常花	●山錦	●錦城	●天龍	●雷峰	●外濱	●太郎
同 朝響	●大里	●常花	●太郎	○鏡岩	●山錦	●荒熊	●新海	○常嶽	●玉碇	●若葉	○開月
同 朝光	●常花	●大里	●玉錦	○玉碇	○開月	○大里	●鏡岩	○常岩	●若常	●新海	○常嶽
同 大蛇山	●常岩	●玉碇	●天龍	●玉錦	○常嶽	●若葉	○若常	●錦城	●太郎	○鏡岩	●白岩
同 阿久津川	●玉碇	●山錦	○開月	●天龍	●荒熊	●若常	●常嶽	○白岩	●鏡岩	●常島	●外濱
同 星甲	○開月	●玉錦	○山錦	○雷峰	○錦城	○常岩	○天龍	○玉碇	○新海	●常花	○若葉
同 男女川	●山錦	●新海	○若常	●外濱	●玉碇	○白岩	○開月	○鏡岩	○錦城	○太郎	○常島
同 池田川	●天龍	○太郎	○鏡岩	●白岩	●若常	○開月	●常島	○岩木	●和歌	●玉碇	●荒熊
同 晴の海	○新海	●大島	○若葉	○開月	●白岩	○岩木	●太郎	○和歌	●常島	●錦城	○玉碇
同 幡瀬川	○白岩	○鏡岩	○玉碇	○荒熊	○太郎	○雷峰	○外濱	●玉錦	や山錦	や	や
同 寶川	○太郎	○荒熊	○白岩	○大島	●天龍	○玉碇	○岩木	○外濱	○若葉	●山錦	●雷峰
同 一の濱	●鏡岩	●開月	●古賀	○信夫	●岩木	●太郎	●荒熊	や	や	や	や

や ○錦城 ●若常 ○瀬戸 ●鏡岩 ○和歌
や ●藤里 ●鳥峰 ○浪音 ○綾鬼 ●荒山 ●乙女
や ●大里 ●十岩 ○荒熊 ●綾鬼 ○白岩 ○乙女
や ●外濱 ○乙女 ●信夫 ●乙女 ●池田 ●開月 ○立汐
や ●常花 ●信夫 ●大島 ●綾錦 ●寶川 ●常幷 ○瀬戸
や ●山錦 ●大島 ●古賀 ●晴海 ●信夫 ●藤里 ●羽後 ○錦華 ●高潮 ●高浪 ○瀬戸
や ●玉錦 ●鏡岩 ●乙女 ●綾鬼 ●池田 ●開月 ○乙女 ●古賀 ●荒浪 ●信夫 ○大島 ○開月 ●荒浪 ○綾鬼 ●荒山 ●乙女
や ●若葉 ○新海 ●雷峰 ○桂川 ●古賀 ●大矢 ●千岩 ●和歌 ●常幷 ●雷光 ○立汐 ○千岩 ●晴海 ●和歌 ○大矢 ○乙女 ●瀬戸 ○雷光
や ●雷峰 ○常嶽 ○瀬戸 ●白岩 ○晴海 ●雷光 ○若汐 ●瀬花 ●常島 ○信夫 ●若汐 ○乙女 ●常幷 ○乙女 ●千岩 ○荒山 ●和歌 ○立汐 ●若潮 ●千岩 ●大矢
横綱 西の海 大關 能代潟 前頭 綾錦 同 大島 同 岩木山 同 鳥ヶ峰 同 東關 同 綾鬼 同 和歌島 同 荒山 同 藤の里 同 浪の音 同 常昇

七七四

十一日 ○宮城 や ○錦洋 や ●眞鶴 ○劍嶽 ●朝光 ●星甲 や ○寶川
十日 ○星甲 や ○眞鶴 ○清瀬 や ○幡瀬 ●星甲 ○宮城 ●寶川 ○三杉
九日 ○豐國 や ○清瀬 や ○幡瀬 ●宮城 ○清瀬 ●朝響 ○眞鶴 ●豐國
八日 ○能代 や ○幡瀬 や ●宮城 ○能代 ●豐國 ○能代 ○三杉 ●豐國 ○清瀬 ○大蛇 ●幡瀬
七日 ○吉野 ●眞鶴 ●星甲 ○能代 ○三杉 ●吉野 ○阿久 ●錦洋 ●朝響 ○大矢 ●星甲 ○眞鶴 ●劍嶽
六日 ○眞鶴 ●星甲 ○能代 ●豐國 ●吉野 ○大蛇 ●幡瀬 ○三杉 ○清瀬 ●錦洋 ○能代 ○大矢 ●清瀬 ●大蛇 ○能代 ●星甲 ○宮城 ●眞鶴 ●能代 ○宮城 ●豐國 ●錦洋 ○眞鶴
五日 ○三杉 ●清瀬 ○吉野 ○大蛇 ○朝響 ○豐國 ●星甲 ○朝光 ○錦洋 ○劍嶽 ○朝光 ●眞鶴 ●大蛇 ○宮城 ●星甲 ○能代 ●錦洋 ○男女 ●劍嶽 ○三杉 ●幡瀬 ○池田 ○宮城 ●岩木 ○吉野 ●朝光 ○男女 ○阿久 ●晴海 ○大蛇 ○幡瀬 ○朝響 ●阿久 ○岩木 ●常島 ○晴海 ○一濱 ●朝光 ○綾錦 ●大島 ○古賀 ●男女 ●池田 ●寶川 ○清瀬 ●星甲 ○大矢 ○常昇 ●千岩 ●常昇 ○大島 ○浪音 ●綾鬼 ●常島 ○信夫 ●武藏 ●常昇 ○綾櫻 ●和歌 ○大島 ●藤里 ○綾鬼 ●信夫 ○大和 ●瀬花 ●鳥峰 ○若汐 ●綾鬼 ●瀬戸 ●高浪 ○鳥峰 ●綾浪 ○雷光

○阿久 ●能代 ○綾錦 ○池田 ○大蛇 ●晴清 ○吉野 ●朝響 ○三杉 ○豐國 ○能代 ●大島 ○大矢 ○男女 ○雷光 ○常昇 ●千岩 ●信夫 ○常昇 ○雷光
○三杉 ○晴海 ●豐國 ○宮城 ●岩木 ●池田 ○朝響 ●男女 ○能代 ●大蛇 ○藤里 ●瀬戸 ●常昇 ○古賀 ○阿久 ○立汐 ●鳥峰 ●綾鬼 ●瀬花 ○綾錦
○能代 ●男女 ●劍嶽 ●吉野 ●錦洋 ●朝光 ●男女 ○劍嶽 ●三杉 ●幡瀬 ○朝光 ●吉野 ●錦洋 ○阿久 ○一濱 ○荒熊 ○晴海 ○開月 ○浪音 ○荒山 ○大矢 ○大島 ●若汐 ○千岩 ●鳥峰 ○浪音 ○荒山 ●綾錦 ●若汐 ○鳥峰 ○若汐 ○池田 ●綾鬼 ●荒山 ○浪音 ○綾錦 ●信夫 ○乙女 ●一濱 ●綾鬼 ●東關 ○鏡岩 ●東關 ●朝響 ○古賀 ●朝光 ●晴海 ●岩木 ○清瀬 ●眞鶴 ○朝響 ●池田 ○一濱 ●岩木 ●綾錦 ●綾鬼 ●東關 ○鳥峰 ●雷光 ○東關 ○綾鬼 ○藤里 ○雷光 ○乙女 ○立汐 ○綾錦 ○瀬戸 ●鳥峰 ●和歌 ○綾鬼 ○大島 ●藤里 ○綾櫻 ●花甲 ●常昇 ●藤里 ○千岩 ○常昇 ●荒山 ○浪音
○男女 ○劍嶽 ●三杉 ●幡瀬 ○池田 ○晴海 ●朝光 ○阿久 ○男女 ●岩木 ○清瀬 ●瀬戸 ●綾錦 ●一濱 ●瀬花 ○荒山 ○立汐 ●和歌 ●藤里 ○綾鬼 ○大島 ●若汐 ●綾浪 ○荒山 ●大矢 ○浪音
○清瀬 ●吉野 ●男女 ●三杉 ●寶川 ○綾錦 ●鳥峰 ○瀬戸 ●東關 ●綾鬼 ●綾錦 ●東關 ○瀬戸 ●岩木 ○綾錦 ●信夫 ●岩木 ○東關 ●綾鬼 ○雷光 ○乙女 ○立汐 ●藤里 ●和歌 ○東關 ○藤里 ○灘花 ●常昇 ●藤里 ○荒山 ●荒浪 ○浪音
○眞鶴 ●清瀬 ●吉野 ●寶川 ○劍嶽 ●幡瀬 ○綾錦 ●雷光 ○立汐 ●岩木 ○綾錦 ○一濱 ○三杉 ○朝響 ●池田 ●寶川 ●星甲 ○朝響 ○一濱 ○綾錦 ●綾鬼 ●東關 ○灘花 ○千岩 ○常昇 ●和歌 ○大島 ○雷光 ●大矢 ○浪音
●宮城 ●豐國 ●錦洋 ●寶川 ○劍嶽 ●幡瀬 ○綾錦 ●阿久 ○大蛇 ○朝光 ○池田 ●星甲 ●寶川 ○朝響 ○大矢 ○晴海 ○浪音 ○大島 ●荒山 ○立汐 ●常昇 ●千岩 ○綾浪 ●武藏 ●綾鬼 ●荒浪 ○鳥峰 ●綾浪 ○荒山 ●大矢 ○浪音

前頭 外ケ濱 同 錦城山 同 若常陸 同 荒熊 同 白岩 同 玉碇 同 天龍 同 開月 同 太郎山 大關 大の里 前頭 鏡岩 同 古賀浦 同 瀬戸山 同 信夫山 同 常陸島 同 灘の花 同 乙女川 同 若汐 同 雷光山 同 大矢崎 同 立潮 同 千ケ岩

四十八手名稱

向反、居反、掛反、寄反、傳反、撞木反、一寸反、擬寶珠枕、腕反、鴨の入首、クジキ反、衣かつき、合掌捻、肩すかし、外無双、内無双、突き落し、逆捻り、くじき、引落、出捻、卷落し、頭捻、片手わく、上手投、下手投、引投、上矢倉、下矢倉、首投、からみ投、握投、寄投、出投、手拔の腹投、八柄投、二足掛、一本掛、内掛、外掛、手斧掛、泥障掛、呼掛、渡掛、クグリ掛、掛もたれ、水掛、傳掛。

趣味及娯樂

演藝年表

（明治二十九年以降年表）

明治二十九年

五月　澤村源之助、源之丞、市川國五郎市川國之丞、市川百之助（今の河合武雄）等青森中村座に來る。『先代萩』『切られお富』『毛谷村』を演ず。

明治三十二年

一月　尾上菊十郎、坂東照世、尾上菊次郎、岩井松之助、尾上幸藏等中村座に來る。

七月　市川八百藏（今の中車）大谷馬十中村富十郎、市川幡谷、中村歌仙、中村吉三郎、市川八百三郎、市川百々世、嵐璃宗等中村座（長谷川氏興行）に『近江源氏』『毛谷村』『太十』『碇知盛』『新皿屋敷』を公演。

明治三十四年

八月　尾上榮三郎（今の梅幸）尾上菊三郎、尾上幸藏、尾上菊十郎、尾上松助、市川八百藏（今の中車）等、青森の中村座に來る。『先代萩』『切られお富』『大藏卿』『志渡寺』を上演。

明治三十五年

六月　中村富十郎、中村舛太郎（今の團右衞門）中村座に來る。

六月　伊井容峰、福島清一座青森へ來て『鹽原多助』を演ず。

明治三十五年より明治四十年までの記錄不明にして採錄不能につきこゝに省く。

明治四十年

一月　市川東猿、中村君三郎（後の亡、八右衞門）市川美壽之丞（今の壽美藏）中村座に來る『曾我通し』『稻川』をだす。この興行中、一月三日中村座燒く、燒死者六名。

明治四十一年

九月　澤村訥子、守田勘彌、坂東粂三郎中村駒助（今の大谷友右衞門）中村國五郎澤村潟五郎、中村芝翫（今の歌右衞門）青森座（長谷氏興行）に來る『中將姫』『稻川』『文覺』『高田の馬場』『蠶の餞別』『大藏卿』『乘合船』をだす。

明治四十二年

川上晉次郎、貞奴一座青森に來る。

明治四十三年

九月　片岡市藏、松本虎藏、松本高麗三郎、市川錦吾、中村成次郎、市川門之助、市川高麗藏（今の松本幸四郎）青森にて『先代萩』『かさね』『大森彦七』『六歌仙』『曾我』『高時』『鳴戸』『二人袴』『忠臣藏』『勸進帳』『うつぼ』を上演。

明治四十四年

八月　市川猿之助、市川市十郎、市川門之助、市川段四郎の一座青森市旭座に興行。

明治四十五年

市川右團次、市川しやち丸、市川莚女の一座旭座に興行。

大正二年

八月（十六日より青森市歌舞伎座開場式）中村芝若、中村竹三郎、中村芝賞、中村芝琴、中村翫太郎、中村翫右衞門、中村歌門中村歌十郎、中村芝鶴、中村歌右衞門、中村兒太郎（今の福助）一座來る。『太功記』『先代萩』『玉菊燈籠』『酒屋』『近江源氏』『稻川』を上演。

大正三年

一月　中村竹三郎、市川鯉三郎、岩井粂三郎、青森歌舞伎座に來る。

八月　片岡市藏、市川莚女、市川八百藏（今の中車）歌舞伎座に來る。

大正四年

四月　川上貞奴、福井茂兵衞一座歌舞伎座に來る。『里見八犬傳』『道成寺』を上演。

八月　坂東彦三郎、中村時藏、市川松蔦市川左團次、一座歌舞伎座に來る。『修善寺物語』『熊谷陣屋』を上演。

大正五年

八月　中村歌右衞門、福助、市川八百藏坂東秀調、片岡市藏、中村歌十郎、市川吉三郎、中村歌女之丞、片岡明藏、市川傳之丞、坂東かつみ、一座歌舞伎座に『春日局』『都歌舞伎』『鎌三』『曾我』『鳴戸』『太功記』を上演。

七月　松井須磨子一座青森歌舞伎座に公演。

十一月　八戸錦座の舞臺開きに中村吉右衞門一座來る。

大正六年

八月　市川市藏、市川魁車、市川長三郎中村芝雀、（七雀右衞門）中村雁次郎一座歌舞伎座に來る『近江源氏』『八百屋お七』『三つ面』『宮城野部屋』を上演。

大正七年

五月　澤村宗之助、澤村宗十郎一座歌舞伎座に來る『酒井の太鼓』をやる。

七月　中村東藏（今の大谷友右衞門）市川男女藏、尾上伊三郎、尾上菊三郎、中村翫助、尾上菊次郎、尾上菊五郎、の一座歌舞伎座に來る『酒井の太鼓』『梅の由兵衞』『乘合船』を上演。

七月　尾上梅幸、澤村宗之助、尾上幸藏松本錦吾、松本幸四郎一座歌舞伎座にて『大森彦七』『羅生門』『毛剃』をやる。

大正八年

四月　曾我廼家五九郎青森歌舞伎座に來る。

八月　松本幸四郎、尾上紋次郎、岩井粂三郎の一座弘前座の舞臺開きに來る。

九月　川上貞奴、福島清、大東鬼城一座歌舞伎座にて『トスカ』を上演。

九月　竹本綾之助弘前座に來る。

大正九年

二月　歌劇岩間櫻子一座青森歌舞伎座及び弘前座に來る。

八月　片岡市藏、坂東秀調、坂東かつみ市川中車一座青森歌舞伎座に來る。

十一月　大谷友右衞門、岩井粂三郎、市川男女藏の一座、青森歌舞伎座、弘前座、五所川原の旭座に來る（旭座は舞臺開き）

十二月　永田錦心來る。

大正十年

一月　石井漠、澤モリノ一座弘前座に來る。

九月　市川宗五郎、尾上紋三郎一座青森歌舞伎座に來る。『酒屋』『石切梶原』『腕切小萬』等上演。

二月　中村吉十郎、市川八左衞門一座歌舞伎座に來る。

七月　尾上松鶴、市川幡谷一座弘前座に來る。

八月　永田錦心弘前座に來る。

八月　河合武雄、梅島昇、小織桂一郎一座弘前座に來る。

十月　伊太利歌劇團弘前に來る。

大正十一年

三月　石井漠、澤モリノ弘前に來る。

八月　石井漠、石井小浪弘前座に來る。

八月　市川莚若、市川右團次、嵐巖笑、

淺尾大吉一座歌舞伎座に來る。『夏祭』『壽し屋』『法界坊』をやる。
十一月　澤村源之助、市川宗五郎一座、弘前座に來る。
十一月　吉田奈良丸弘前、青森へ來る。

大正十二年

二月　清水金太郎、清水靜子一座弘前座に來る。
三月　澤村四郎五郎一座弘前座に來る。
六月　石井漠、石井小浪、青森、弘前へ來る。
八月　市川猿之助、八百藏、小太夫、片岡市藏、坂東秀調、市川中車、青森歌舞伎座にて『あやつり三番叟』『渡海屋』『幡隨院長兵衛』『連獅子』等を上演。

大正十三年

四月　市川左團次、松蔦、壽美藏、芝鶴鶴藏一行弘前座に來る『河內山』『修善寺物語』『京の友禪』等を公演。
六月　市川海老十郎一座弘前座へ來る。
七月　曾我廼家五九郎一座青森、弘前へ來る。
八月　澤村訥子、澤村源十郎一座青森、弘前へ來る。
十二月　澤村傳二郎、市川百之助一座青森、弘前へ來て『鼠小僧』を上演す。

大正十四年

十一月　高田雅夫、原せい子、一行青森遊樂座及び弘前市弘前座に舞踊を演ず。

大正十五年

七月　五月信子、高橋義信一行、青森歌舞伎座及び弘前座にて『嬰兒殺し』『カルメン』『高橋お傳』を上演。
七月　澤田正二郎一座青森遊樂座に『戀愛病患者』『月形半平太』を上演。
九月　石井漠、石井小浪弘前座に來る。
十月　澤村紀久八一座青森、弘前に來り『俠艷錄』を演ず。

昭和二年

五月　守田勘彌、中村芝鶴、市川しうか一座青森歌舞伎座及弘前座にて『大藏卿』『辻合邦』『連獅子』を上演。
九月　諸口十九、筑波雪子一座、青森歌舞伎座及び弘前座に來る。
八月　築地小劇場、友田恭助、薄田研二田村秋子、三浦養平、杉村春子、島田敬一の一行青森歌舞伎座に來り『愛慾』『熊』を上演。
八月　プロレタリヤ藝術聯盟演劇部が歌舞伎座に公演、上演を禁止さる。
十月　澤村傳二郎、松本高麗三郎一座が青森、弘前に來り『玄冶店』『扇屋熊谷』『どんどろのお弓』を演ず。
十一月　築地小劇場、友田恭助一行青森歌舞伎座に來り『海戰』『狼』を上演。

昭和三年

二月　市川九藏、岩井粂三郎一座青森歌舞伎座及び弘前座にて『先代萩』『本藏下屋敷』『御所五郎藏』『鳴戸』『揚屋』を上演。
六月　竹本小土佐一行青森遊樂座及び弘前座に來る。
八月　築地小劇場、東屋三郎、汐見洋、山本安英、丸山定夫、青山杉作、岸輝子、東山千榮子、南健眞一行青森歌舞伎座に來り『伯父ヴーニャ』『三和尙』を公演。

備考　この演藝年表は明治時代當時の興行主が現在縣內に居ないため、不明の點等あり、完全したるものに非ざることを特に附記す。

音樂

(イ) 邦樂界

本縣に於ける邦樂即ち歌舞音曲に在りては其の經路が雜然として之れを辿ることは出來ないが、古老の言に依れば當地は昔から常盤津、義太夫、踊が最も盛んで琴曲、尺八は之に次ぎ然も當時の練習方法に於ても今日の如き浮薄平凡なものでなく、師匠の權威と稽古振りにも嚴然たるものがあり、從つて弟子も亦眞劍に藝道に勵んだため素人の身で優に一家をなし得る者が多かつたと言傳へられてゐる。而して青森大火當時に於ける知名の師を擧ぐれば

義太夫——鶴澤清幸、竹本鬼堂、鶴澤美昇、鶴澤花若、鶴澤松千代。
琴曲——小野貞子、松谷多美賀、桝谷佐津喜、大石夫人。
尺八——津島孤松、伊藤某、小杉山某。
長唄——杵屋六之助、鶴壽、八住小八、杵屋榮三郎。
常盤津——常盤津文字瀧。
踊——西川仲司。
鳴物——住田松次郎。

等にして、其の他知名の藝人の此の地に留まつた者も相當あつたが、割合に振はず、半歲を出でずして他に轉ずる者が多く、其の他前年迄長唄師匠杵屋勝喜太ありて踊、鳴物等を併せて稽古し、青勝會を組織して屢々演奏會を開催したことは青森市藝界にとつて近來の壯擧とも云ふべきであつて、更に最近の狀況を一瞥して見よう。

尺八——本縣に於ける竹界は概ね琴古流に屬し、八戸中學校教諭森庸三斯界の恩人として崇められ、青森市に於ては同氏の後を襲へる爭韻會の佐藤又一及び松風會の牛耳を握れる工藤稜風あり、弘前市に亦江雲會支部長增田彌市あり、其の他竹友會等として各地に散在するものゝ外青森市に元老津島孤松あり、弘前市に綾戸某ありて俱に僅かに錦風流（一名御家流）の餘命を繫ぎ、都山流に至りては殆ど其の影を認めない位である。此の間爭韻會主催の大會に當りて大正十二年河瀨順輔師夫妻、同十四年宮城道雄師の來青あり、昨昭和二年六月十二日松風會の大會を青森市公會堂に開催するや仙臺より檢校遠藤操琴之れに臨みて多くの新曲を紹介し、本縣竹界に大なる印象と暗示とを與へて歸つて行つた。又一方他地方に於ては一段と縣出身の名手多く現在押しも押されもせぬ重鎭として活躍中の人々に京都江雲會の頭領井上重美を初め橫須賀に築館竹稜あり、名古屋に齊藤忠司あり、東京に八戸彥作あり、若手の錚々としては東京に神久雄あり、金澤に橫內忠藏等ありて大いに名聲を高めつゝあるが、猶東都に於て當時日本一の稱を擅にせる弘前出身のやまと新聞記者故荒谷六郎（舊姓平田）のあつたことも確かに本縣の誇りの一つであらう。

琴——次ぎに箏界に於ける名取りとしては先づ青森市に於ては

山田流
對馬　光賀（てい子）
館山多代賀（千代子）
郡場多榮賀（はま子）
伊藤小夜賀（さよ子）
坂井千多賀（千代子）

生田流
津幡　春子
小野　貞子
菊賴　金鈴（小林）
小山內　某

に指を屈し、其の外

山田流
鷲尾喜佐子（弘前市）
三上　光代（五所川原）

を押すを得べく、更に縣外に在つて大いに名聲を博し鄕土の爲めに氣を吐いてゐるも

のに東京の荒谷きえ子及び盛岡の小平千代子等あり、其の他夫々の師匠又は名取を擧ぐれば次ぎの如きものであらう。

長唄——
杵屋新吉郎（前田露紅—新右衞門名取）
杵屋歌園（藤原その—歌司名取）
杵屋六綱（横田さだ子—六三郎派）

義太夫——
鶴澤椽玉、鶴澤榮三、竹本播榮、竹本綱春

舞踊——西川仲司
常盤津——常盤津文字瀧
琵琶——三浦湘水

（ロ）洋樂界

青森市に於ける洋樂界

古いことは記錄にないので否として知るに由ないが、明治三十八年釜萢善作先生が師範學校教諭として來任されて以來門を叩いて敎を乞ふ者が多く、然も先生は或は同校講堂に演奏會を催し或は斯道研究者のために講座を設けて其の敎授と普及に盡瘁せられたるを以て、漸次洋樂の進歩發達を見るに至つたが、當時の大衆は未だ寧ろ和曲を喜ぶ時代で、民間に於て之れが指導に當る者も僅かに前田露紅あるに過ぎなかつた。唯一のまとまつた音樂團體であつたが、先越えて明治四十三年縣立病院官舍の落成式を機とし釜萢先生を中心とせる中島完一、秋元良助、笹森建基、五十嵐富士男の一派に、新に近藤縣立病院長の紹介に依り三原新二（内科部長）及び加藤若翰の二名を加へて一の絃樂團を組織し、之にアオモリ、ミュージカル、ソサイテイ（AMS）と命名した。其の後更に松見榮太郎、高橋大助を加へ山内あさ、西館いせ、武田達夫等を迎へて時には近藤家に集まり時には釜萢、秋元宅に寄つて練習し、弘前、黒石、野邊地、淺蟲又は地元其の他のものと合併して演奏會を開きたる外、東京其の他の音樂家と交渉往復をなして益々隆昌の域に向つた然るに大正七年三原去り、同九年中島死し更らに同十年八月二十五日釜萢先生の逝去に相遇してより大なる打擊を受けて其の後離合改廢等行はれ、或は青森好樂會と稱し或は青森フイルハモニー會、青森音樂協會、青森音樂同好會、青森綠葉樹社、青森樂友會等と呼んで今日に至つたものである。

而して青森合唱團は釜萢先生の指導を仰ぎ小學校唱歌敎材を中心として各小學校を輪番に會場に充て、常に練習に勵んでゐた縣生の歿後秋元良助を中心に其の遺志を繼承して辛うじて練習を續けてゐた。然るに翌十一年四月先生の後任として兒玉順二の來青と共に氏を中心とする敎員の集まり「森の音コーラス會」が生れ、夫れと殆ど同時に釜萢門下の俊才清野健は新町小學校に在りて同校の卒業生を以て「歌ふ集ひ」合唱團を創立し、此所に青森樂界は三派に別れて各自技を練りたるも結局上に指導する人物なく、或は有るも默して多くを云はず、或は實なき名を得んとするものあり、加へて大正十三年四月兒玉轉任し、清野上京して「森の音」「歌ふ集ひ」は夫々解散し、更に同年秋秋元の上京によつて歴史ある「青森合唱團」も亦練習中止の止むなきに至つて青森樂界は未曾有の凋落を來した。此所に於て翌十四年八月青森合唱團の殘有者は相會して前記青森樂友會を創立して漸次活動を開始し、縣樂界の向上進展に努力してゐる。

其の他青森市に於ける音樂團としては鈴木志郎を中心とせる活動寫眞樂士連の陸奥音樂團あり、青樂法學院にオーレスト樂團あり、山本兵三の率ゆる山本ハーモニカバンドあり、アポロ音樂團にピアノ、ヴアイオリン、マンドリン部あり、其の外前田露紅は青森和洋音樂社を設立してピアノ、ヴアイオリン、マンドリン、三絃、長唄を敎授する傍らオーケストラ、レツドバンドを組織し、猶近くは協成女學校には百名に近きハーモニカバンドが生れ夫々地方樂壇の爲めに盡力してゐる。

地方に於ける洋樂界

地方に於ける音樂界は一般に休息の狀態に置かれ沈滯を極めてゐるが、現在の主なる團體を示せば次ぎの通りである。

音樂會年表

（大正以後）

年月日	會場	名稱	主催又は後援
二、一〇、一	青森高等小學校	弘田龍太郎一行音樂會	東京音樂學校々友會
五、八、一四	赤十字社支部	大和田愛羅（小松耕輔）東條哲三郎時演奏會	A、M、S
六、七、二二	淺蟲小學校	臨時演奏會	A、M、S
六、八、五	赤十字社支部	萩原正彦（館山甲午）演奏會	A、M、S
六、八、一八	縣立病院官舍	小演奏會	A、M、S
六、九、二四	弘前高等女學校	第一回音樂演奏會	弘前音樂研究會
弘前	マンドリナータデヒロサキ	代表者　木村　紘三	
野邊地	マネンテトリオ	代表者　中村　久衞	
八戸	ハーモニカバンド	代表者　太田　良作	
同	學生音樂同好會	代表者　西塚　俊一	
同	八戸音樂同好會	代表者	
三戸	三戸樂友會	代表者　松尾　十衞	
同	三戸水曜會音樂部	代表者　志賀　精一	
三戸	三戸ハンモニカバンド	代表者　福田　悌一	
同	ゆりかごの會	代表者	

縣出身音樂家

本縣出身の音樂家としては過去に聲樂家原信子あり、現在に於ける名手としてはオルガニスト楠美恩三郎、小笠原良造、ピアニスト阿保寛の外寶塚歌劇團に金健二のある外三本木町に菅原陸奥人あり、同氏は河合まるめろと稱し野口雨情作歌「枯すすき」及び荒澤基作歌「鮫が浦邊」の作曲家として有名である。

七、一四	青森歌舞伎座	
七、三、三	赤十字社支部	
七、八、一五	女子師範學校	
七、九、一五	黒石高等小學校	
九、九、一八	弘前公會堂	
九、九、一九	男子師範學校	
一〇、七、一三	赤十字社支部	
一〇、七、二八	男子師範學校	
一〇、七、三〇	弘前高等女學校	
一〇、八、一三	三戸町	
一〇、八、二九	赤十字支部	
一〇、一〇、一一	弘前座	
一〇、一〇、一三	青森歌舞伎座	
一〇、一二、一三	青森新町小學校	
一〇、一二、一四	青森歌舞伎座	
一一、一一、一七	五所川原 女子師範學校	
一一、五、二四	青森歌舞伎座	
一一、七、二九	青森新町小學校	
一一、八、七	青森公會堂	
一一、八、一五	三戸町	
一一、一〇、二一	青森公會堂	
一一、一〇、二一	東奥義塾	
一一、一一、八	青森歌舞伎座	
一二、二、一八	黒石高等小學校	
一二、三、四	青森市永樂座	
一二、四、二二	青森公會堂	
一二、七、一四	青森歌舞伎座	
一二、八、九	青森橋本小學校	
一二、八、一八	三戸町	
一二、一〇、一〇	青森新町小學校	
一二、一〇、二八 三一	青森歌舞伎座	
一二、一一、二三 二四	弘前公會堂 女師及新町小學校	
一三、一、四	三戸町	
一三、二、八	青森歌舞伎座	
一三、六、二五	女子師範學校	
一三、八、一一	三戸町	
一三、八、二九	三戸町	
一三、九、六		
一三、九、一九	女子師範學校	

早大マンドリン音樂演奏會	
澤氏告別演奏會	
トリオと歌	
音樂演奏會	
音樂大演奏會	
青森音樂研究會大演奏會	
東北學院校舍再建資金募集音樂演奏會	
館山甲午獨奏會	
音樂演奏會	
ピアノ購入基金募集音樂會	
窪兼雅ジェームスダン音樂演奏會	
音樂舞踊大演奏會	
釜萢先生追悼音樂演奏會	
コバルスキーマンドリン獨奏會	
中田羽後獨唱會	
田中英太郎 伊藤愛雄 慈善音樂會	
阿部英	
阿保寛獨演會	
マンドリンの夕	
ピアノ購入基金募集音樂會	
公演	
青森好樂會	
A、M、S	
縣、市、東郡教育會	
黒石音樂會	
弘前音樂研究會	
青森音樂研究會	
青森フィルハモニー會	
弘前音樂研究會	
三戸樂友會	
青森好樂會	
パストラル詩社	
アニマ、マンドリン倶樂部	
三戸樂友會	
歌ふつどひ	
米獨專門音樂家洋樂大會	
鯖戸英郎 サルコリー ハーレス夫人	大演奏會
第三回音樂會	
兒童劇大會	
和洋音樂演奏大會	
明大ハーモニカ大會	
アニマ、マンドリン倶樂部演奏會	
ピアノ購入基金募集音樂會	
清野健獨彈會	
慈善音樂大演奏會	
故釜萢先生記念碑建立音樂大演奏會	
ピアノ披露演奏會	
ミハイルウェックスラー ザルコウスカ夫人	演奏會
立教大學グリークラフ音樂會	
獨唱獨奏會	
音樂の夕べ	
慈善音樂演奏會	
武岡鶴代 平井保三 多忠亮 榊原直	トリオと歌の夕
今泉支店	
ふたば會	
沖館小學校保護者會	
露の會	
明大青森縣人會	
今泉書店	
三戸樂友會	
青森小中學校聯合會	
青森音樂同好會	
三戸樂友會	
青森フィルハモニー會	
聖公會青年會	
水曜會音樂部	
三戸樂友會	
八戸東奥盲人學校	
青森綠葉樹社	

一三、一〇、二六	青森歌舞伎座	ウイクスラー音樂演奏會
一四、四、一七	女子師範學校	西洋人大音樂會
一四、四、二五〜二六	青森歌舞伎座	和洋音樂演奏會
一四、六、二一	青森橋本小學校	慈善音樂演奏會
一四、七、二七	弘前公會堂	窪兼雅大演奏會
一四、八、二〇	八戸高等女學校	大音樂會
一四、八、二一	三戸町	音樂の夕
一四、八、二七	女子師範學校	音樂大演奏會
一四、八、—	青森歌舞伎座	童謠舞踊大音樂會
一四、九、五	五所川原小學校	音樂大演奏會
一五、四、二四〜二五	青森歌舞伎座	創立五年記念和洋音樂演奏會
一五、六、二七	八戸	早川美奈子獨唱會
一五、七、一七	青森公會堂	義捐音樂演奏會
一五、七、二五	青森歌舞伎座	明治大學ハーモニカ演奏會
一五、八、一四	女子師範學校	伊藤義雄、木村京二、小野登、樋口はま　新人紹介大演奏會
一五、八、一七	三戸町	福井直秋、多忠亮、内田榮一、吉原規　演奏會
一五、八、二五	三戸	音樂演奏會
一五、一〇、—	女子師範學校	田谷力三、松平里子、獨唱會
一五、一一、五	女子師範學校	子供の夕
二、五、一四	女子師範學校	子供の夕
二、七、二	女子師範學校	永井郁子邦譯歌詞獨唱會
二、八、一七	三戸町	音樂演奏會
二、八、二〇	女子師範學校	青森縣處女大會音樂演奏會
二、八、二五	三戸町	第一回發表會
二、九、—	八戸高等女學校	立松房子獨唱會
二、九、二三	弘前朝陽小學校、女子師範學校	故釜萢先生七周年記念演奏會
二、九、一四	青森歌舞伎座	ボリス、ラス氏演奏會
二、九、一七	女子師範學校	藤・原義江獨唱會
二、一二、二九	女子師範學校	ジャイブリ氏主演慈善音樂會
三、一、一、—	三戸町	青師生徒演奏會
三、一、七	三戸町	第二回發表會
三、三、一八	八戸高等女學校	八戸市民音樂會
三、六、二	女子師範學校	子供の夕
三、六、一九	八戸高等女學校	永井郁子獨唱會
三、七、六	野邊地町	マンドリンとレコードの夕
	青森樂友會	マネンテトリオ
	三戸樂友會	青森縣教育會
	青森樂友會	三戸出身青師生徒
	松友會	ゆりかごの會
	青森演奏會	愛國處女會
	青森縣教育會	東奥日報社
	青森縣教育會	松友會

映畫

本縣映畫界は逐年觀客數の增加を見てゐるが、昭和二年及び昭和三年度に於て青森弘前兩市に上映された主なる映畫は次の通りである（昭和二年度は主として青森に上映されたもののみ採錄）

昭和二年

一月

『ロイドの人氣者』『ゴールド、ラッシュ』『シーホース』『夜の紐育』『消え行く灯』『お坊ちやん』

二月

『活動のマートン』『驛馬車』『雀』『禁斷の樂園』『お轉婆スーザン』『劍難女難』『深夜の太陽』『練獄の花』

三月

『滅び行く民族』『熱砂の舞』『ステラダラス』『ある乞食の話』『夢想の樂園』『焰の女』

四月

『當り狂言』『我れ世に誇る』『子の心親知らず』『娘十八運動狂』『俄か海賊』『毒蛇』『魔風戀風』『姫君と給仕』『龍卷』『受難華』

五月

『蹴球王』『シーホーク』『奔流戀を乘せて』

六月

『彼をめぐる五人の女』『修羅八荒』『大久保

彦左衞門』

七月

『われ若し王者なりせば』『椿姫(日本物)』

八月

『邪痕魔垣』『ウキンダミヤ夫人の扇』『あるじ』『ボー、ジェスト』『大帝の密使』『新珠』

十月

『エムデン』『ダーク、エンゼル』『復活』『ジーグフリード』『眞珠夫人』

十一月

『ヴアリエテ』『戰艦くろがね』『悲戀舞曲』『荒み行く女性』『慈悲心鳥』『父歸る』『尊王攘夷』『鳴門秘帖』『笑ふな金平』

十二月

『お轉婆キキー』『おしやれ娘』『砂繪呪縛』『肉體の道』『アンニー可愛いや』

昭和三年

一月

『久遠の像』『下郎』『人形の家(日本物)』『紅白亂舞』『田吾作ロイド一番槍』『萬花地獄』『炎の空』『ドンフアン』『金神山』『榮光』『感傷の秋』『島原美少年錄』『照る日雲る日』『最後の人』

二月

『村の人氣者』『霧の裏町』『チヤング』『深紅の文字』『砲煙彈雨』『忠治御用篇』『美代吉殺し』『ムツソリーニ』『槍供養』『彌次喜多海軍の卷』『玉を拋つ』『屍は語らず』『秋草燈籠』『彌次喜多尊王の卷』『巴里の女性』『西部成金』『海の勇者』『忠臣藏(マキノ)』

三月

『ガウチヨウ』『護國の鬼』『九官鳥』『ビッグパレート』『憧れの水兵』『決死隊』『娘新舊兩面鏡』『結婚二重奏』『暗黑街』『近代女房改造』『彌次喜多韋駄天の卷』『荒鷲』『サルベーションハンターズ』『噫無情』『辨天小僧』

四月

『彌次喜多伏見鳥羽の卷』『クオウバヂス』『猫とカナリヤ』『天國の人』『娘十八泳げや泳げ』『本蟲打王』『支那の鸚鵡』『第七天國』『男裝女劍客』『愛の凱歌』

五月

『江戸三國志』『無鐵砲時代』『斑蛇』『美人國二人行脚』『南海のアロマ』『譽の四勇士』『陽氣な巴里つ子』『風雲城史』『近代武者修業』『帝國ホテル』

六月

『赤い鳩』『彌次喜多空中の卷』『女の一生』『續水戸黃門』『血煙高田の馬場』『亂暴ロージー』『ソレルとその子』『青春の小徑』『決鬪商賣』

七月

『サーカス』『モダン十誡』『イット』『坏滅の愛』『ヴオルガの船唄』『飛脚カンター』『惡魔の踊子』『大岡政談』『村の花嫁』

謠曲

舊津輕藩と喜多流

喜多流の始祖は龜丸と云つて、應永元年足利義滿が能を行つた時の奉行仁木左京太夫義長の九代の遠孫に當る羽柴家の槍術の士喜多喜左衞門の子と生れ、七歲の時豐太閤の前で羽衣をつとめて滿座をあつと云はせてから七太夫と命名された。太閤の寵を一身にうけて名を六平太とも云ひ、左京又は長能とも稱したが、後世英林と號し槍術、半弓、柳生流の劍法の達人だけに從來の能型から一歩出て喜多流を起して武家式樂と唱へられたものである。

然るに德川の世となり秀忠將軍の時大和に居つた始祖は藤堂高虎、柳生宗矩の薦めに依り能樂で仕へることとなり、夫れから喜多流は天下に普及せられたものである。

元來津輕藩は德川家とは政治的に密接な關係に在り、德川家の城を模する位であつたから趣味的にも當然一致しなければならなかつた。從つて謠曲も喜多流を學び終に宗家の分れ喜多種左衞門や喜多文十郎等の樂師を抱へるやうになつた。津輕家の御舊記に據るも代々の藩主が熱心に奬勵されたもので、近くは寛德院殿承昭伯の如きも山姥の御嘯子等殊に見事なものであつたと言はれてゐる。

最近に於ては紀喜眞逝き、八戸岩三郎去つて昔から練り上げられた眞の謠手といふものは無く、新制度に依る敎授としても高屋元之丞の亡くなつた今日僅かに柏城朝寛が踏留つてゐるに過ぎないが、夫れでも津輕地方全般には之れ等の人の手で育てられた數は隨分多く、今も猶旺んに行はれてゐる

現在各流の主なる人々

實生流

青森市　梅原稔、澁谷七重
弘前市　神忍
野邊地町　鈴木逸太、吉田富藏
八戸町　女鹿左纖

觀世流

青森市　伊東武次郎、八木圭助
喜多流

青森市　津幡實、工藤規
弘前市　柏城露堂
黑石町　唐牛文吾

金剛流

青森市　小林吉郎
岩木村　石田武雄

菊花

本縣の菊花は古來から長野縣東京府の菊花と共に全國に麗名を馳せ殊に舊南部藩の居城八戸は縣下菊界の先輩である。八戸に次いでは弘前、尾上、青森、黑石、野邊地、五所川原等各地に菊栽培の會があり名だる菊花も少くない、每年十月下旬菊花滿開の頃各地に品評會、觀賞會を開いてゐるが大正四年先帝陛下本縣大演習の砌弘前市八戸町から名花を台覽に供した、畏くも陛下には金光殿、千代の光、龍立波、舞獅子、金寶冠、紫雲殿、譽の凱旋、波上の月、松上の鶴を御嘉納あらせられた。

八戸　菊花では由緒正しい土地であるが最近では會合が減多に無く栽培家は自宅に引籠つて良花を培つてゐる。從來は千代美會、佳友會があり夫々中秋の頃觀賞會を開いてゐた、明治四十一年宮內省技師市川之雄氏來八して良花を集め畏き邊りへ献上した事あり爾後雲上の大官より賞美に預つた事は一再でない、栽培家及名花を擧げれば左の如し

△晩節園（園主鈴木信實氏）神垣、曠古の賀、山彦

△南部丹頂園（園主南部秀壽氏）吾妻八景、呼聲、高雄山、初秋の午後、曉の富士、譽の錦、實生簇雪、五十鈴川

△女鹿不忘園（園主女鹿左纖氏）曉天の鶴、北海の譽、山家の壽、高雄山、春光、月の海原

△岩泉家　實生曉の富士、曉天の鶴

△橋本香月園（園主橋本八右衞門氏）實生や號、四十八號、曉の富士、大觀、風心

弘前　津輕藩當時から菊花は奬勵されてゐた同市で最古參者の栽培家は永泉寺の花田月松師でその外頗る多い大正四年先帝陛下行幸の砌菊花展覽會を開き數種天覽にも供した。

△木村開雲堂　富士曉、尾上の里、金色堂、波上の月、立田暮

△中谷熊次郎　波上の月、日本の司、浪

の晉、立田暮、實生の八重（懸涯）
△萬歳寺（澤田秀學師）天の美祿、行啓
陸奥
△發花園（園主小田桐氏）立田暮、小夜嵐、寒香、金色堂、波上の月、紫雲、北斗星、曙、天津空、天龍、天が下、紫雲殿
△丹頂堂（堂主松本氏）華嚴の瀧、金寶冠、蜃氣樓、金色堂、竹林の雲
△東雲堂　瑞穗の國、紫雲殿、陸奥の山瀧の立浪、花吹雪
△甘榮堂（堂主菊池氏）昇仙堂、花の關松上雪、波上の月
△日榮堂　高根山、蜃氣樓、谷風
△福島菓子店　天津空、白鳳、鳳輦、谷風、寒香
△永泉寺　鳳輦、天津空、都錦、重陽、園の雪、豎無の鎧、大江山
尾上　南郡尾上村は本縣菊界に八戸と相對して名聲を擧げてゐる。殊に大正十三年縣下大會に三浦醫師出品の「尾上の里」は一躍して特選に入り菊通を驚かした。
△黃色　尾上の里、北海の譽、山家の月華嚴の瀧、黃金の瀧、長生殿、黃金壽
△白色　曉の富士、曉天の鶴、竹林の雪太平樂、水超々、平和の波
△錦物　金光殿、千代の光、錦江
△色もの　傾園、遠山の霞、花姿、吾妻八景
△清香會　會長三浦久和男氏、會員　西谷壽德、西谷嘉三郎、正井理一郎、工藤德太郎、福士禮助、田邊文四郎、西谷金藏、黑瀧秀次郎、西谷貞藏、清藤粂吉、内山久二郎十二氏
青森　大正四年市内の菊花同好者は其の栽培並に實生を奬勵する延年會を發會し行事を決定して毎年展覽會を開いてゐるが會員數も最も多く名花も少くない。
△福士伊三郎氏　高嶺の雪、太平樂
△村本　磯吉氏　曉天の鶴、羽衣
△羽守　利助氏　曉天の鶴
△窪　田　氏　實生八龍
△長谷川有造氏（延年會長）外ヶ濱、曉の富士、瑞雲、高嶺の雪
△鹿内　健作氏　水超々、曉天の鶴、天地の秋、大御代
△鈴木善太郎氏、錦江、水超々、太平樂曉の富士、瑞雲
△增田　倉吉氏　曉天の富士、太平の波大御代
△柴田　一奇氏　曉の富士
黑石　同地には秋香會なる愛菊家連の團體がある。會長は前代議士加藤宇兵衞氏で毎秋菊花の會を催してゐる。
△木村良吉氏　紫雲殿
△松枝定勝氏　曉天の鶴、懸涯、曉星
△來迎寺（小鹿愍隨氏）西王母、玉華
△佐藤清十郎氏　夏菊、立田の暮、五所櫻、天龍
△工藤龍彦氏　曉の富士
野邊地　古くから知名の家庭に栽培されてゐたが最近頓に衰えて來た、同町の栽培家約三十名を數へる事が出來る。
△泉山萬次郎氏　西王母、波上の月、松風、黃金の松、紫勳
△西村勘次郎氏　松風、黃金閣、花都、金光殿、雲龍、西王母
△黑岡山藏氏　太平樂、華嚴の瀧
△棒繁藏氏（野邊地中學校長）實生、春光、曉天の鶴
△飯田廿五郎氏　行啓の錦、立田の暮
△菊池富三郎氏　西王母、紫雲龍、波上の月、黃金閣、緋の衣、初潮
△鶯床屋　秋田菊、懸涯
鰺ヶ澤　菊花同好會あり毎年十一月菊花品評會を開催してゐる會員約二十六名。
板柳　菊花同好會あり毎秋龍淵寺に品評會を開催してゐる。
大湊　最近著しく發達し四十餘名の栽培家があり瑞香會を組織してゐる。
△會長工藤專太郎△顧問野村和三郎△理事村井利助、中村清太郎、工藤源藏。

花と茶の道

本縣に於ける花は明治四十年頃までは殆ど男子の一手に收められてゐたものであつたが、漸次婦人の間に移り最近大方男子の影を失ふに至つたのである。然も生活環境の都會化せられると共に一方に於て自然に對する憧れと親しみとより、青森弘前の兩市及び八戸町を初め野邊地、七戸、三本木其の他各地に於て遠州流池の坊共に年々歳々隆盛に赴き、藤崎其の他の地方に於ては小原流の盛花等も亦盛んに行はれて居り、各社とも夫々春秋二回位の大會を催しつつあるが、現在の主なる教師を擧ぐれば左記の人々を數へることが出來る。

遠州流
青森　田中久三郎（千秋庵一豐）
同　竹浪あい子（千富庵一昌）
同　中村初五郎（千古庵一片）
同　伊香節太郎（千弘庵一節）
同　村田卯三郎（觀松齋一誠）
同　山内せい子（陸松齋一豐）
同　小木つや子（吟松齋一芝）
同　中島くに子（向陽庵一幹）
八戸　米田宇兵衞（貞宇齋一宙）
同　奥寺　貞子（貞塊齋一傳）
弘前　櫻庭　政晴（庭松齋一東）
同　米谷又五郎（濤松齋一如）
池の坊
青森　佐野　梅子（如月軒梅峯）
弘前　桐原　光三（拈笑庵鶯月）
同　平川　常城（靜芳庵華月）
同　小林　道詢（眞月堂道詢）
同　三上　道睿（止靜房道睿）
三本木　伊藤しげ子（烟霞亭芳翠）
七戸　大伴つる子（淡如庵鶴水）
茶の方面は其の性質上花程市井の間に擴まつてはゐないが、各社に於て時々大會等を催して夫々研鑽に努めて居り
遠州流
村田卯三郎（青森）中島　くに（青森）
山本　某（青森）米田宇兵衞（八戸）
綾壁　贊（八戸）櫻庭　政晴（弘前）
千家流
桐原　クニ（弘前）
石州流
奥寺　貞子（八戸）
等が其の道の重なる顏振れである。

囲碁

本縣に於ける囲碁は將棋の夫れと比較して振るはない狀態に在り、現在本縣在住有段者は

三段　田村　强
初段　長谷川　寛　初段　宮崎　圭三
の三名に過ぎず、寧ろ縣外に於て活躍せる人の中に左に揭ぐるが如き豪者を擧げることが出來る。
五段　都谷森逸郎（弘前出身大阪現住）
三段　中里　滿藏（八戸出身小樽現住）
二段　都谷森良次（弘前出身岡山現住）
二段　關　東（弘前出身大連現住）
初段　菅原　一（三本木出身小樽現住）
右の外縣下に於ける囲碁界の主なる人百名に就いて囲碁の番附を作つて見れば次の如くである。

横綱	青森	吉田 嘉藏	前頭
大關	弘前	永井 邦彦	前頭
關脇	浪岡	神 基一	前頭
小結	弘前	小枝良太郎	前頭
前頭	八戸	奥秋 確	前頭
前頭	藤崎	竹島米右衛門	同
前頭	弘前	榊 榮太郎	同
前頭	八戸	佐々木潤造	同
前頭	富木館	石澤定四郎	同
前頭	小中野	八木澤幸三郎	同

東

前頭	金木	一戸 木人	同
前頭	七和	楠美和右衛門	同
前頭	金木	傍島 正守	同
前頭	赤石	奥口 侑	同
前頭	八戸	小笠原幸次郎	同
同	中郷	齋藤 多七	同
同	青森	三上貞三郎	同
同	青森	小山内晴祥	同
同	八戸	安藤善太郎	同
同	青森	神 惟精	同

同	青森	葛西喜代太郎	同
同	青森	砂子田善吉	同
同	大鰐	村上 清八	同
同	藤崎	竹内市太郎	同
同	女鹿澤	佐藤 默堂	同
同	豐田	福士文敏	同
同	田名部	熊谷乙次郎	同
同	八戸	金坂 篤	同
同	十二里	三上紋十郎	同
同	鶴田	澁谷九郎一	同

同	豐田	田中豐太郎	同
同	五所川原	平山哲次郎	同
同	弘前	古川 文彌	同
同	青森	五十嵐樹次郎	同
同	青森	成田 榮司	同
同	小湊	逢坂 良一	同
同	八戸	中田 量寂	同
同	弘前	竹内 繁雄	同
同	十三	永井惣兵衛	同
同	川内	佐藤 正助	同

圍碁番附

横綱	野邊地	松本 榮藏	前頭
大關	碇ヶ關	對馬 完吉	前頭
關脇	黒石	高橋猪太郎	前頭
小結	弘前	釜淹 英二	前頭
前頭	青森	奥口 佶	同
前頭	青森	中里 忠香	同
前頭	藤崎	藤本藤太郎	同
前頭	八戸	坂下 末吉	同
前頭	青森	藤田 四郎	同

西

行司	小枝芳太郎	長谷川有造	前頭
	瀧澤 市助	佐藤武三郎	前頭
	窪田庄太郎	三浦千代次郎	前頭
	山田 俊八	伊藤又兵衛	前頭

檢査役	平山爲之助	青森	同
	前田忠八郎	八戸	同
	相馬 貞一	青森	同
	楠美 芳幹	湊	同
		弘前	同
		中野	同
		吉田 安志	同
		弘前	同
		小和田武司	同
		田名部	同
		山中藤一郎	同
		東通	同
		新谷 好	同
		宮川常次郎	同
		大湊	同
		祐川 昌平	同

	岩淵 清江	關野 眞平	同
	山形富士男	泉山岩次郎	同
	田中藤三郎	本間 泰信	同
	長尾 健字	中野 梓	同

取締	女鹿 左纐	東通	同
	郡場 一	五所川原	同
	工藤 末吉	坂本 紋作	同
	永島德次郎	中里紋次郎	同
		石川 工藤吉次	同
		青森 坂本助吉	同
		小湊 十川其日郎	同
		川内 工藤正輔	同
		弘前 谷山謙一	同
		小中野 長谷愛七	同
		弘前 奈良東	同

將棋

本縣の棋界は當初萎微として振るはなかつたが、明治四十年頃杉野岩太郎等の擡頭に依つて此所に發達の芽を吹さ、其の後名人關根金次郎、八段土居市太郎、同花田長太郎、同勝浦松之助、同井上義雄及び七段宮松關三郎等の來縣に刺戟せられて俄然勃興を見、遂に今日の如く日本に於ても東京、大阪、名古屋に次ぐ程の隆昌を來したが、現在に於ける本縣在住及び本縣出身の有段者は次ぎの如くである。（各段いろは順）

△六段

八戸　加藤柳江、東京　平野信助。

△五段

青森　杉野岩太郎。

△四段

青森　伊藤友太郎、筒井　武田彌一郎、八戸　坂下末次郎、汽船乘組　三條目岩松。

△三段

青森　石井萬之助、八戸　戸田吉次郎、八戸　苫米地萬吉、湊　大久保萬吉、青森　川村東平、八戸　瀧澤治平衞、三戸　中村準次郎、北海道　中島松郎、北海道　佐藤兼一。

△二段

田名部　石平男、中澤　石澤寅之助、青森　長谷川嘉一、鰺ヶ澤　原喜太郎、深浦　花松善司、八戸　川口龍保、三戸　米田起六、小中野　田中石藏、新和　成田健四郎、大館　福井常次郎、八戸　小泉德治、三本木　佐藤運。

△初段

三戸　石井幸吉、青森　石川千代松、青森　岩谷良次、弘前　今井慶次郎、青森　五十嵐樹次郎、青森　星出常吉、青森　大柳慶吉、木造　大鷹虎之助、八戸　大里德藏、金木　太田市太郎、中平内　奥崎甚吉、青森　岡井高治、青森　金澤末五郎、青森　葛西傳次郎、三戸　米田越六、三戸　田島瀧三郎　八戸　田村金太郎、弘前　武田定雄、小中野　武尾憲四郎、青森　竹内伊三郎、八戸　瀧澤德十郎、八戸　立原政吉、八戸　塚原耐三、八戸　槻館市太郎、青森　鶴岡勝三郎、小中野　室岡元治、三戸　栗谷川清、五所川原　山上善一、常盤　松井富五郎、青森　藤林兼吉、青森　小館善三郎、三戸　小向勇治、小中野　阿部治郎吉、八戸　荒谷仙松、八戸　淺野吉三郎、三戸　淺井連次郎、八戸　赤澤末次郎、青森　佐藤親行、青森　木村邑吉、深浦　菊池源七、深浦　岸本勝藏、弘前　三浦豐五郎、八戸　三浦榮次郎、深浦　宮本喜代、八戸　下斗米齊三郎、三戸　森田瀧三郎、鰺ヶ澤　杉野利正、青森　須藤久次郎。

△賓位

南部敦浪末次郎

備考——格位を其段位に含む。

寫眞

本縣に於ける寫眞界は記錄の徵すべきものがないので詳細を知るを得ないが遠く明治の初年に始まつたものらしく、當時は所謂ガラス寫で柴田一奇、田井晨善等が出寫を主としてゐた時代であつた。其の後明治七八年頃に至つて田井晨善は弘前に、柴田一奇は青森に店を開いて營業したのが其の最初である。次いで同十一、二年頃中西寫眞館を青森に、同十四、五年頃矢川寫眞館を弘前に開業し、更に同十七年頃田井晨善の門弟神忍が上京して大いに寫眞術を研究して歸つてから縣下の寫眞界の進歩發達に好

影響を與へ其の後幾多の變遷を經て現在に至つたもので、大正四年弘前に開業せる高橋寫眞館に於て現象紙を使用するやうになつてから、漸次鷄卵紙日光紙が廢れて今日では全く其の跡を絶つに至つた。

此の間素人寫眞も漸次普及せられ、最近長足の進歩と發達とを見、此の間青森に小島平八郎の北陽會あり、弘前に高橋謙吉の率ゆる團體あり、三戸に亦アマチュアコダツク倶樂部あり、其の他各地に大小の會を組織して斯道の發達に大なる貢献を齎らしたものであるが、現在は些か下火の氣味である。因に大正十五年十月二十三、四の兩日青森公會堂三階廣間に開催せられたる東奥日報一萬二千號記念寫眞展覽會の成績は次ぎの如くである。

第一部——秋山氏選　出品五十點

特選一席　對岸風景　小島平八郎
特選二席　馬肥て天高し　石橋兵次郎
特選三席　仲秋　成田三子智
入選一席　支那服の女　中村修治
入選二席　習作　三國精一
入選三席　杜のやしろ　石橋兵次郎
入選四席　夕照　高橋月耕
入選五席　雪晴れの朝　内藤周幸
入選六席　傘干し　福士一
入選七席　ある日の午後　成田三子智
入選八席　蔭のもつれ　小島平八郎
入選九席　港　小島平八郎
入選十席　途上スケツチ　高橋月耕

第二部——白陽氏選　出品三十四點

特選一席　帆　小島平八郎
特選二席　冬の濱　淡谷良一
特選三席　ポプラの家　石橋兵次郎
入選一席　海岸小景　小島平八郎
入選二席　白砂と岩　石橋兵次郎
入選三席　晩秋　澁谷七重
入選四席　習作　郡司方得
入選五席　田舍家　福士一
入選六席　ボートレース　中村修治
入選七席　朝なぎ　木村基一
入選八席　風景　澁谷七重
入選九席　夢見つつ　竹内久助
入選十席　もやこむる朝　小島平八郎

ラヂオ

今やラヂオの波は本州北端の本縣を包んでゐる。どこの町へ行つても、村に行つてもアンテナを見ない處がない迄になつた。

本縣に於けるラヂオの發達は矢張り青森市を中心にして起つた。東京放送局が開始される前年頃、中學生や自動車運轉手等二三のアマチュアがあつて、礦石セットで青函間の無線電信の音響を聞いたのが始まりで其後、無線電信と無線電話との波長の違ふことを研究して青森函館間の鐵道の無線電話を聞くことに成功し之を以て非常な歡びとしたものである。此頃、東京放送局開設が計畫され東京電氣試驗所で假放送されてゐたが、當時上京した小島佐一郎氏が二球式ラヂオ器を始めて購求歸縣し之を用ひて見たが青函間の無電も一向入らない、恰も沖館電線電信所長川村氏がラヂオに精通してゐるので川村氏を數回訪問しコイルを卷き代へて波長を合せ特に函館に尺八や薩摩琵琶等を放送して貰つて青森商業學校卒業生歡迎會席上之を一同に聽取させた處非常な好成績で驚嘆之を久しうした、之が本縣に於ける音樂聽取の始めである。

此頃からファンも追々殖え次いで東京放送局の開始と共に部分品等の要求も追々多くなり、小島氏は青森常備消防の田村氏と三球式を造つて東京の聽取を研究し蚊の鳴く樣な東京の聲を聞き始めた。ファンも追

追東京放送を聽くことに努力するに至つたが之は相當經費を要するのでファンの數も十人位に減ずるに至つたが、之も一時的現象で漸次其數を增し最近仙臺放送局の開設と共に益々ラヂオ熱を高めてゐる。ラヂオ設備數を調査するに最初大正十四年五月二十一日の認可數は二百九十九名で其後取消したものも出來て昭和三年五月四日現在で二百四十四名である。然し之は正式屆出のもので之以外相當の數に上るであらう。

金魚

津輕地方に於ける金魚は菊花と共に古い歴史を有し舊藩時代からの名物の一つお國自慢の一つとして數へられたものである。其の移入された年代は明らかでないが、移入先の京都であつたことは事實らしく、當時は交通頗る不便のため最初移入されて以來永く他の種類を全く移入しなかつたことは津輕金魚俗に云ふ地金魚を獨特のものにした所以であらう。尤も津輕金魚は「秋金」と稱し最近までは東京に少しく分布されてゐたが、大正十二年の震災で殆ど全滅したので現在に於ては眞に津輕獨特のものとなつてしまつたので、弘前市の飼育者は之れが增殖を計り東京其の他へ移出しようと力ゐる。津輕金魚の特色は背鰭は無く尾が長くて軟い所にあり如何にも金魚らしい美しさを見せてゐる。

其の後明治三十年以降「流金、和金、出目金」等が移入せられ、更に最近に至りて「蘭鱗、和蘭、獅々頭」等色々な種類が移入されて來た。之れ等金魚飼育者の團體としては弘前の高橋寫眞館に事務所を置く觀魚會の其の他あり年々展覽會等を開催してゐる。

小鳥

縣下飼鳥界の起源は中々古いので其年代は想像する事も出來ないが、只傳統的の飼養法を踏襲し個々の趣味を滿足せしむるに過ぎなかつたので少しも進歩する所が無かつた。

多くは鶯眞鶸等を山野に捕へて籠に入れ其鳴聲や色彩等を樂しむ有樣で然かも夏季の換羽中には大部分が斃死し翌年に持ち越すものは數ふるに過ぎなかつたが、夫れは管理宜しきを得なかつたのである。其他此地方では山雀、黒鶫、雲雀、駒鳥が永年飼養されて居たが最も廣く、最も深く行き渡つて居たものは鶯と鳴鶉の二つであつた。

鶯は大昔より飼養され現今尙多數の同好者を有して居るが津輕口と稱して其の鳴聲の曲節が地方特有のものであるので縣下秋田の北部及北海道全部に行き渡つて居るだけである、東京邊の鳴き方と全々違ふので其方面へは更に向かない、明治四十三四年の頃青森、弘前に鶯同好者の會が出來每年啼合會を開いて居るが飼養者の多數が趣味本意でなく、利益を主として居る爲め常に紛糾を起し度々離合集散があり近年青森にも弘前にも各二の會が出來る樣になつた。今以て互に反目を續けて居る樣な有樣である。

鳴鶉は明治廿年の頃大分流行し本種又は野河と稱する鳴き鶉を土佐邊りから輸入し其滋味のある妙音を賞したのであつたが未だ全く繁殖する事が出來なかつた同四十二三年頃から籠中で産卵させ夫れをチヤボに抱卵せしめ雛になつてから假母器に收容して哺育するといふ所謂集引を始めたので趣味が一層深くなり大分同好者を騷がせた。

續いて大正五年頃よりは日本全國に大流行

を見る樣になり津輕銘鶏の名は一躍して天下に賞を入るゝ樣になつた、その後東京各地へ大分輸出せられたが玆に遺憾なのは奸商の惡策であつた、小鳥屋と共謀して只眼前の利慾に走り將來に着眼しなかつた爲流石全國に名聲を擧げたる鳴鶏も槿花一朝の夢で忽ち暴落に暴落を重ね數ケ月にして是を顧みるものさへ無い樣な始末であつた。近來青森鳥の會が主唱して鳴鶏に足輪制度を實行し奸商の惡策を防ぐ事に盡力する事になつたから數年ならずして其名譽を恢復する事が出來るだらう。

洋鳥　カナリヤ等は近年全國的流行につれて大部盛になつたが青森鳥の會でなるべく打算的の飼育をせぬ樣に常に警告を怠らなかつたから本年の鳥價暴落に際しても影響を蒙る事少く却て同好者を增した關西方面では全く正反對の行き方をして居る、此方面の同好者は割合智識階級の人が多く學術的研究とを加味して熱心に飼養して居るから盛んに發展する事だらう。細カナリヤローラーカナリヤ等は二三年前から東京方面同好者間に認めらるゝ樣になり青森に其名鳥ありと云はるゝ位になつた。

又雲雀鶯等の庭籠、巣引も略成功の有樣であり又洋種間の種々の雜種も作出されて居るから飼鳥會及鳥學會に貢献する所少くないと觀察せられる。

青森鳥の會では保護鳥捕獲願。飼養屆等の手續を敎へ其節の便宜を計り又會員に警告して亂獲せぬ樣に勉めて居る、目下會員數百五十名鳥類愛護の宣傳を第一主旨とし飼養管理法の研究、飼料の研究等を專念にやつて居るから益々堅實な發展をなして居る。

競馬

馬と言へば直ぐ青森縣を聯想させる程全國的に有名であるが、其中心をなすものは南部地方である。南部馬の起源は實に古いもので既に千餘年の歷史を有し、今より約五百年前初めて外國種を蒙古韃靼の地より數百頭田名部に輸入し、爾來南部藩に於ける馬政は其の用意周到を極め遂に南部馬の名聲を宇内に冠たらしめたのである、然るに維新後藩政の廢せらるゝや一時產馬に關する制度も止み特に保護奬勵等のこともなかつたが、明治十二年南部三郡の產馬維持共會創立せられ產馬奬勵に盡す所あつて以來、各地に組合を設けて優良種產出に工夫計畫すると共に、對外的には博覽會、共進會、馬市等の方法に依つて馬匹の品質向上に努力して今日に至つたもので、又一面に於ては競馬等に依つて馬匹調練の普及を圖つてゐる。

抑も青森縣競馬會は明治卅九年野邊地に於て開催せられたのに始まり、其の後一時中絕の姿となつてゐたが之れを復活して第二回を明治四十三年に、第三回を翌四十四年に共に同地に開き越えて大正元年春季を鮫に、秋季を野邊地に開催し爾來每年二回宛開催することとなつた。而して明治四十四年以來馬政局及び縣より賞金の補助を得現在農林省並に帝國競馬協會より賞金、補助助成を得て居り、昭和三年七月金木に於て開催されたのは實に第三十七回である。

大平競馬場沿革

明治三十四年三月野邊地町野村治三郎が上北郡甲地村字大平、字大撫澤、字湯ノ澤地内に總面積八百五十町歩の牧場を開き、同三十六年產馬改良のため獨力を以て場内に競馬場を建設した、越えて三十九年第一回青森縣競馬會を催し、馬券を始めて發賣し觀衆亦二萬餘人、立錐の餘地なき好成績を得た。然るに同競馬場は距離半哩なるため不完全を免れなかつたので、其の後公許の出願を爲すに當りて一哩に延長し、又之れに接續して高低馬場及び運動場を設け更に馬四十五頭を收容し得る萬能厩舍其の他附屬建物一切を造設した。此の間前後を通じて費したる資金は地代を除いて一萬五千餘圓で、個人の競馬場としては稀に見る所であつて優に馬產地の大競馬場たるに愧ぢない。其の後時勢の要求に應じ縣下產馬改良發達のため之れを縣產馬聯合會に提供したので、同會主催の下に四十三年八月第二回競馬會を開催し、地方側より三十四頭、軍隊側より十二頭出場して非常な盛況を見た爾來聯合會主催に係る秋季競馬會を繼續擧行するに至つたのである。

代表的名馬の產出

▽……黃雲號　長くも先帝陛下御在世の砌本縣の名馬に意を用ひさせられ大正二年二月本縣より御買上の御沙汰に接し武田知事は光榮として縣内から名馬を秀つて六頭を選定し同月七日赤坂離宮御馬場で天覽に供へた。陛下には殊の外龍顏麗しく同組合から選定された野邊地町野村家秘藏の「黃雲號」内國產洋種牡馬鹿毛三歲父（サラブレッドコートプレスター母内洋第二ハツケシ號）が御意に召し翌三年宮内省から御買上の光榮を賜はつた。

▽……雛鶴號　アラブ種栗毛牡馬三歲（父アラブオーバンヤン五ノ二號母アラブ雜サツキ號）は大正七年四月十九日東久邇宮殿下へ献上を差許された。

▽……笙號　内國產洋種鹿毛牡馬三歲（父アングロアラブジンギスカン號母内洋小石號）大正七年六月今上陛下未だ皇太子殿下に亙らせられた當時行啓の際長くも御乘馬用として献上を差許された。

▽……魁號　内國產洋種黑鹿毛牡馬大正七年三月二十七日生（父サラブレットトラシカツタ號母内洋スミレ號）は野村代議士の愛馬であつたが大正十四年六月東京市乘馬會長牧清之助氏の熱望で同氏へ讓渡した、大正十五年には東京市及仙臺市に開かれた全國乘馬會競走で一着を獲得し馬術界の權威昭和三年フランス巴里に開催される萬國オリンピック競爭に我國代表馬として出場の光榮を得たが名馬魁號の活躍は大いに期待されてゐる。縣外競馬に活躍した名馬

△……瑠璃號（馬主野村治三郎氏）明治四十四年秋期東京目黑競馬第七優勝馬競走に出走し馬十一頭出場し一等賞を獲得し帝室御賞典銀製御紋章入花盛鉢を拜領された距離一哩速度一分五十秒百分三。

▽……十和田號（馬主野村治三郎氏）明治四十五年函館競馬、距離一哩四分一で二分十八秒、同一哩二分ノ一で二分四十四秒の記錄、大正三年東京目黑（春期）競馬で一哩八分ノ一を二分一秒二、同一哩四分ノ三を三分十一秒十五の記錄を得たが何れも優秀なものである。

▽……浮舟號（馬主野村治三郎氏）大正八年秋日本レース倶樂部新馬優勝競走で一着金盃を受け、大正九年春東京目黑競馬會聯合競走で一等賞三千圓を受領された。

▽……ロビンソン號（馬主岡島爲吉）大正三年秋阪神競馬倶樂部新馬優勝競走で一着大正十四年春同聯合競走で一着一等賞距離二哩タイム三分四十二秒四九、同年秋期目黑競馬で一等賞を獲得。

▽……ホブライトスター號（馬主岡島爲吉）大正十五年春京都競馬倶樂部内國產新馬優勝競走で一等に入賞。

蘆野競馬場沿革

（馬匹改良の爲め明治三十九年西郡鳴澤村字

北浮田に適當の地を選び競馬場を新設し毎年春期に競馬を開催して來たが規模狹少の爲めに移轉する事となり北郡金木町字蘆野原野へ再設することとなつた。同競馬場建設に當つて蘆野原野は金木町有地であるので再參同町當局と協議の結果同町は多額の設備費及競馬場の存置する限り無料使用を條件として大正四年四月初旬起工し同六月下旬漸く完成を告げたが同郡車力村現貴族院議員鳴海周次郎氏嚴父簾之助は多額の設備費を寄附し氏自ら工事監督に當つて獻身的努力をなした爲めに東北稀に見る理想的な競馬場を竣成するに至つた、竣工間も無く祝賀開場の競馬會を翌七月初旬開催した同五年七月本縣產馬畜產組合聯合會第十二回競馬會を開き縣下の駿物を集め非常な盛況を極めた、爾來毎年縣聯合會と組合と交交開催し又鳴澤競馬をも開くに至つた。

鳴海簾之助氏彰德碑建立　鳴海翁の遺德によつて馬匹改良ばかりでなく同競馬場開設以來金木町の繁榮は極めて顯著で同町では感謝の意を表し永遠に紀念する爲め今町長、津島縣議、高橋彌左衞門、伊藤豐吉、山口甚三郎氏等發起で寄附金を募り大正十三年七月同競馬場の一隅に同翁の彰德記念碑を建立した。

▽……パーフブラウド號（馬主鳴海周次郎氏）サラブレット種牡馬十歲栗毛奥羽馬牧場產（父サラグレット種ガロン號母サラブレット種パースブラウド號）大正十四年七月十九日日、函館競馬會で一哩二分ノ一優勝競走に七頭立一着金一千圓及函館市長カップ受領、十四年八月二十三日札幌競馬會で二哩優勝競走に三頭同一着賞金千五百圓を受領、同年九月二十七日福島競馬會で、一哩二分ノ一優勝競爭に一着金千三百圓附加賞二百圓受領した。

鹿島競馬場沿革

三戸郡鮫村原野を競馬場として從來使用して來たが當時は未だ久八線開通せず頗る交通不便な爲め大正十三年使用を休止し縣聯合會競馬は野邊地町外大平競馬場の奪ふ處となつてゐたが昭和二年六月八戸乘馬會は新に八戸競馬倶樂部を組織し、資本金四萬圓で株式とし同月十二日創立總會を擧げた競馬場は鮫の代りとして八戸町外館村鹿島臺に地を選び八戸產馬畜產組合と協同經營で組合は土地買收費とし四萬圓を出し倶樂部は諸種の設備費として三萬圓を支出する事となし同七月下旬竣成したが敷地は六萬三百八十餘坪一哩の馬場で南側に土地の傾斜を利用したスタンドあり馬見場は昭和三年增築して東北に誇り得る一大競馬場を完成した、二年八月一、二の兩日縣聯合會主催の競馬會は同所を使用し理想的な競馬場たるの賛辭を呈され名實共に具はる大競馬場となつた。然るに同年秋發布となつた地方競馬の條例で八戸競馬倶樂部の存立を許さず解散の已む無きに至つた、解散後は總べての事業を上げて產馬組合へ移し競馬場の一切を同組合が買收して獨力經營する事となつた。

本年の競馬

縣產馬畜產組合聯合會主催の春季競馬は七月一、二の兩日八戸競馬場で開催され、前後二十五回に亙る競馬があつて盛會であつた。又金木蘆野競馬場に於ける縣主催の競馬大會は七月十七、八の兩日開催され、前後二十回に亙る競馬を行つたが、駈優勝に於ては先きに八戸で榮冠を獲たサラバンドガロン（七戸盛田氏）再び優勝した。當日は好天氣に惠まれ、輓馬、馬車の餘興等もあつて人氣が沸騰した。

年中行事

えんぶり

一月二十日前後三戸郡及び上北郡の全般に互りて執行せらるゝ豐年祭のえんぶりは、其の昔一時中絶の姿となつてゐたものを明治の初年大澤多聞に依つて復活され、漸次隆盛に赴き遂に去る昭和三年四月明治神宮外苑日本青年會館に公開せらるゝことゝなり、其の素朴な野趣と清新の藝術味に依つて滿都の愛好家を熱叫せしむるまでに至つたのである。

えんぶりとは村方の若者を以て組織せる極めて古典的色彩の濃厚な舞踊の團體であつて、長さ約二尺の烏帽子を被り三尺位の棒に鈴をつけたものを持つて三人乃至五人一組となり、戸別に祝儀を受け、調子を合せて踊り廻るもので該地方としては一年中を通じて最も賑やかな行事の一つである。

飯詰の競馬

北津輕郡飯詰村の南端二つ森の麓に廣大な原野が展けてゐる。往時津輕藩主が飯詰に於て乘馬を徵發した當時から此處に於て舊三月二十五日に競馬が行はれ、川廣田の馬乘りと稱して盛況を極めたもので、其後中絶の姿となつてゐたが大正十年以來村の有志は之が復活を圖り、今日では西北產馬組合の補助を得て年々舊三月二十五日を以て盛大に擧行し一つの名物となつてゐる。

綱引

三月下旬から四月上旬に掛けて各地で行はれるものに綱引がある。豐作豐漁の緣喜祝や何かの占として、大抵部落を二つに分け數日に亘つて競爭するもので、なか〳〵力瘤の入つた行事である。

高山稻荷の祭禮

四月二十八、九日執行せらるゝ西津輕郡車力村の高山稻荷神社の例祭は現今縣に於ける年中行事の一と化し、旗神狐額を先頭に丈餘の御幣を捧持して懺悔〳〵の三拍子も勇ましく乘り出す團體を初め遠く秋田、岩手、北海道等より參拜する信者で當日は實に夥しい人出で賑ふのである。餘興として競馬、力試し、馬力試し、猛犬の品評會等あり各自折敷に赤飯、鏡餅、魚類を大供饌臺に山と積まれることも亦此の神社の特色である。

虫送り（天のり）

舊曆五月、忙しい田の植付けも終れば樂しい慰勞の休みが來る。之を津輕地方ではさなぶりと云ひ、南部地方では天のりとも云ひ、此の休を利用して農村では虫送り祭を行ふ。害虫驅除の祈りをなし色々の餘興を催して以て豐作を願ふのである。

賽の川原地藏尊の例祭

北津輕郡金木町から東北へ約半里、大字川倉區有原野の一劃に、コンモリ松に覆はれた丘陵に一の堂がある。賽の川原地藏尊と昔から名のある所で境内の西に藤枝溜池を

控へ風光明媚、瓢を携ふる人がよく杖を引く所である。此の地藏尊は享保年間に安置されたもので文化の初年、雲祥寺十四世太淳和尚の時代から信仰參拜する者が漸く多きを加へ、毎年舊六月二十三四日の例祭には津輕全部から老若男女相集ひ非常な賑ひを呈する。殊に二十三日夜は巫女の市場と云ふ樣な狀況を呈し、津輕中から集まつた巫女數十人が暗夜の松山に篝火を焚いて怪しの口呪を唱ふればそれを圍む老若男女が亡者の口傳を聞いて泪してゐる態などグロテスクな場面である。そして一面には此山中を男女開放の境地として盛んに野の戀が結ばれると云ふのも古來からの名物となつてゐる。

侯武多

侯武多といふのは人物或は器獸等を模造した大なる燈籠の一種で、毎年舊七月一日から六日まで毎夜之を引出して市中を廻り、七日に至れば之を川に流し去るのが例である。青年健兒が群を成して唱へ言を和し笛太鼓を鳴らして興を添へ、甲乙途中で出逢ふ時は互に爭鬪を試み一場の修羅場と化すことが珍しくなかつた。此の習俗は昔田村將軍が東夷を征伐して此の地に來た時、容易に服し難いものがあつたので遂に策を廻らし兵士と共に假面を被り太鼓を鳴らし異樣の化粧を施して躍り廻り、何氣なく之を見に出て來た猾賊を捕へて平定の功を奏してから毎年侯武多と稱して之を催すやうになつたものであると言傳へられ、實に他方に比類のない一種特異の行事である。近年は爭鬪をなして人命を失ふが如き蠻風は跡を絶つて了ひ、電信電話電燈の諸線が市中を横斷してゐるので侯武多の大きさに制限を加へられたが、期節になれば今も尙弘前を初め青森、五所川原、黑石等殊に賑ひを呈してゐる有樣である。

侯武多の唱へ言

侯人流れ去れ（ねぶたながれろ）
忠臣止まれ（まめのはとつばれ）
截ばたて（ださばだせ）
截てよ（だせよ）
善哉（やさ〳〵よ）

盆祭り

于蘭盆も亦舊歷に多く行ひ、七月十三日から二十日まで毎日篝火と稱して毎戸其の門外に篝火を焚く。此の際は恰も害虫の蝶に化する季節に當るので之を驅除するために寧ろ藩政時代には之を奬勵したものであると言はれ、此の風習は今も尙殘つてゐる又盆踊りと唱へ、男女奇異の化粧をなし團座を造りて舞踊をなし、野卑極まる唄を歌ひ、手を打ち足をすり、其の踊方も亦他方に見ることの出來ない特色をもつてゐる。

湊川の流燈會

三戸郡小中野町と湊町の境を流れてゐる湊川では毎年舊の二十日盆を期して盛大に流燈會を催し、盆の一夜を永久に眠る佛達の慰安と夜の涼氣に心ゆくまでひたるのである。大正七年に始まつたもので土地の人に依つて「とろながし」と呼ばれ、最初は佛教的意義を多分に持つたもので上野山十王院（湊館鼻海岸）の院主が舊の盆を期して佛を祠るために自ら之を主催し、燈籠を作りそれに佛や地獄極樂の繪を畫いて實費で之を檀家の人達に讓り、湊川の大下邊から川の眞中を流し、十王院僧侶は勿論此の附近の名僧が澤山集まつて川岸に佛境を設けて一大讀經をなし、海の入口には二つの作つた佛（人形のやうなもの）を燒き、眞紅の焰と共に讀經の聲は夜のとばりをふるはし大小數百の燈籠は河岸を照らして流れ、實に壯嚴の限りを盡したものであつたが漸次俗惡化し、今日では商人達の人出を狙ふ催し物となつてしまつて僅かに燈籠流しの形骸が殘つてゐるに過ぎないが、然し當日夜の湊川へと遠近から集まる人出は實に夥しいもので言語に絶する盛大さである。

御山參詣

舊七月二十八九日より八月十五日までは岩木山登りの期日で賽者の最も多いのは八月一日である。古來登山は男子のみに限られてゐたが近時女子の禁制が解かれた。登山せんとするものは豫め齋戒休浴して七日間魚肉を斷ち、白衣を着、幣帛を捧げ、口々に懺悔を唱へて笛太鼓を和し、山巔の小祠にお詣りし、歸路は思ひ思ひの紛粧をなして舞廻り、八月一日は駒越川原より其の沿道が大いに賑ふのを例としてゐる。

參詣人の唱へ言

懺悔〳〵（さいぎさいぎ）
六根精生（どつこうさいぎ）
御山八大（おやまにはちだい）
金剛童子（こんごうどうさ）
一々禮拜（いちにになのはい）

南無歸命頂禮（なのきんめようちやうらい）

猿賀神社の例祭

南津輕郡猿賀村に鎭座せる猿賀神社は世々地方の尊崇篤く、舊八月十四日の前夜祭から十五日の臨時祭にかけて縣内は勿論のこと、遠く南部北海道等よりも老若男女の參拜者頗る多く非常の賑ひを呈し、年參拜者推定十萬人と註せられ、隨つて收入の多いことも亦縣下第一である。

猿賀堂の例祭

北津輕縣武田村大字富野の般若寺境内に猿賀堂が建立されてゐるが、之は南津輕郡猿賀の御分靈と傳へられ「北の猿賀」と稱して近鄕に聞えてゐる。舊八月十四日、十五日は例祭であるが、其際は津輕各地からの參拜者非常に多く數里の遠方から大幟を押立て笛太鼓で「サンゲ〳〵」を唱へてやつて來る。十四日夜は附近に野宿までしてゐると云ふ盛況で露店、見世物が軒を連れ田舍には珍しい大賑ひを呈する。尙一つ玆に奇異なことはお寺の境内にお宮が建つてゐてお寺の住職が祭事をやる、一體神か佛かと云ふ問題であるが、之は以前は神樣で今は佛樣である。其所以は斯うである、猿賀堂を建立したのは文化四年で般若寺住職覺範和尙から境内に建立せん旨を願出た所、寺社奉行から直に許可となり「廣須、金木兩新田開墾滿足の祈願所に付尊祭可致候」と云ふ御代官を通じての達しがあつた（七月二十五日）之は記錄に載つてゐることだが、言傳へに依れば、當時南津輕郡猿賀神社の御神體が行方を消したので新しい御神體を奉祭した所、間もなくもとの御神體が顯はれた。で之を富野の般若寺境内に祭つたもので、武田村の方が本統の猿賀の御神體だと云ふので四民の尊敬を受け來つたのだ、と云ふことである。所が明治維新の神佛混淆整理の時に佛樣と神樣と一所では差支へると云ふので「猿賀山深砂大權現」とし、神樣として祭り年を經て益々一般から信仰されてゐる次第である。

打毬

騎馬打毬は文政十年、八戸藩主南部信眞が產馬を奬勵し、且馬上で武器を使用する方法に熟練せしむる爲めに催したことに由來し、現今では九月上旬の八戸三社大祭の中日に之を催すことになつて居り、其の狀況

は隨變紀程に詳かに記されてゐる。即ち驛口長者山。有新羅神社。士人相集爲打毬儀。堀埒百間。倚高南面。設御座。圍造帷幔。司儀者。監勝負者。鼓手。鉦手皆烏帽素袍。據胡床。童子八人鮮服排立高棒彩毬。騎者入場。東西各四人。素袍行縢。頭戴華笠。手執月枝。按轡徐行。過帷宮下。伏鞍作禮。於是童子擲毬於地則撞鐙急跑。側身揮杖。爭拾取之。左騎杖頭揮毬矣。右騎撲墮之。前騎手毬而走矣。後騎追奪之。寶珠迸空。鉦鼓鏘鏗。蹄横鬣亂。離合折旋。悉中規矩。勝負已判。童子數十。徒跣給毬。狂蝶戲花。集禽啄菓。蝶去禽散。騎射復更番較技如前觀情娛樂。衆口喝采。

三戸大神宮の例祭

九月十日より三日間、其の昔舊南部藩主が甲斐の國から遷宮したとも傳へられてゐる三戸大神宮の例祭が執り行はれる。十數年前までは三四十尺も高い大きな山車を造つて夫れを自慢に街を練り廻つたものであるが、現今は電線の爲め其の半分位の山車しか出せない。夫れでも今も猶三戸祭と稱し該地方に於ける最大のお祭りである。

馬の糶

毎年各地に開かれる二歳駒の糶市場は、遠く縣外からも馬商が來て大した呼び物となつてゐる。附近農村の人々が或は愛馬心に煽られ或は見世物の人氣に誘はれて老若男女悉く出掛けるので、何所の大道店も見世物小屋も全く身動きも出來ない位人出が多く、これを目當ての商人や附近の女達が其の爲めに一年分なり半年分なりの飯米を儲けて歸ると云はれる程の殷賑さを見せてゐる。開期は所に依つて夫々異なり、多くは農閑期を利用して次ぎの如く之を行つてゐる。

木　造——九月上旬五日間
三本木——自十月三十日至翌月十五日

潮干狩

春の行樂の魁として人々に待たれるものは淺虫と鮫の潮干狩である。毎年舊三月三日に行はれるが、花火や藝妓の手踊りさては寶探し等で興を添へ人の氣分を彌が上にもそそる。鮫では此の日蕪島の辨財天の祭例もあるので殊に人の出足が多く、淺虫でも亦水族館が無料で公開されるので押すな押すなの盛況を見せるのが例である。

觀櫻會

毎年四月の下旬から五月の上旬にかけて縣下各地で觀櫻會が催されるが、何と云つても弘前の觀櫻會が最も賑やかである。今年の弘前觀櫻會の幕は招魂祭終了の翌日恰も五月一日から切つて落された。五分通り綻びた花の蔭に各種の賣店も張られ商品を綺麗に陳列して點景を添へる。夫れに弘前商工會の美術展覽會、弘前輪友會の全國自轉車競爭大會や、消防演習、藝妓の手踊りも亦花見に相應しい催物であつた。

秋振舞

田名部地方では毎年秋の收穫が終れば部落内の婦女子が寄合つて、三日乃至五日夜間歌舞饗餐大いに享樂する習慣がある。之を秋振舞と云つて婦女子が亭主役となり饗應を力め、男子が祝儀を持參して餅、蕎麥、鷄卵等の馳走を受けるのである。酒を嗜むものは各自酒を持參して相共に歡樂に耽るのであるが、川内地方では「夜酒盛」と稱へて毎年十二月頃に催される。

名勝舊蹟

青森縣は本州の北端で、三方に海を周らし、更に斗南、津輕の兩半島は青森灣を抱いてゐるので海岸線は非常に長く、山には八甲田、岩木、恐山あり、何れも火山で溫泉多く、川には岩木、馬淵、奥入瀬等あり、山岳重疊、溪谷縱横を極め、湖沼には新日本八景の十和田湖を始め十三潟、小河原沼等あり、南部の平野には若駒放牧され、津輕の沃野には穗波漂ひ、林檎紅く、春の若芽夏の青葉、秋の紅葉、冬の銀世界それ〴〵の風趣を添へて、探るべき名勝は甚だ多い。

之を歷史の上から見れば、先住民族の穴居時代から、阿倍比羅夫、坂上田村麿の東征、大河兼任の亂、十三福島城の興亡、北畠の浪岡御所、長慶天皇に絡まる傳說、南部の發展、津輕の勃興、爲信の津輕統一に至る迄、幾多の波亂を生んだので、舊蹟としても見るべきものも少くない。之等の名勝舊蹟を詳述するのは到底限られた頁數の納め得る處でないから、玆には其の主なるものに就き記す事とした。

國寶

一、甲冑　三戸郡館村鄕社八幡宮所藏
赤絨、卯花、小梅、萠黃、淺黃五種（大正四年三月指定）

一、佛像阿彌陀如來　下北郡田名部町常念寺本尊
惠心僧都の作と傳へらるゝ木像（大正四年四月指定）

一、佛像大日如來　南郡藏館村大圓寺本尊

一、刀劍　中郡岩木村縣社高照神社所藏
太刀銘眞守、拵糸卷太刀
津輕信壽寄進（大正十五年四月指定）

一、刀劍　中郡岩木村縣社高照神社所藏
太刀銘友成作拵糸卷太刀津輕爲信所用
附太刀目錄一通及津輕承昭近進狀一通（大正十四年指定）

特別保護建造物

一、國幣小社岩木山神社拜殿及樓門　岩木山神社寬永年間の作

一、五重塔　弘前市最勝院、四代藩主津輕信政初魂祠堂として寬文八年建立

天然記念物

一、うみねこ　蕃殖地鮫村蕪島（大正十一年三月指定）

一、白鳥　渡來地東郡中平内村淺所（大正十年八月指定）

一、椿山　自生北限地東郡中平内村東田澤（大正八年八月指定）

一、大銀杏　上北郡法奥澤村法量高淵澤善正寺跡（大正十五年十月指定）

一、十和田湖と奥入瀬（昭和三年四月指定）

右に就ては以下關係地方の項を御覽下さい

第一節　青森市及東津輕郡

青森市附近

青森市　青森市は縣下一の大都會で人口七萬八千餘、縣廳其他の官公衙多く、政治にも經濟にも交通にも中心を爲してゐる。元一漁村に過ぎなかつたのを寶永元年津輕信牧の政策、森山彌七郎の設計で、開港地として拓かれ青森港と命名された。青森の名は小丘の磯松が沖から目印となつてゐた處から、町の前途を祝福して選んだものであると。維新前は一國の港に過ぎなかつたのが、維新後は北海道連絡の北門として正に日本の青森となり、戸口も著しく增加し明治三十年頃弘前市を凌ぎ縣下第一の大都市となつた。年中行事の一つである七夕祭のネブタは、弘前市のネブタの殺伐的なのに反し、頗る平和で、全市を擧げて歡樂の巷と化すので有名である。

外ケ濱　古書に其名を止めてゐる外ケ濱は主に淺虫以西の東津輕郡の海岸を指したものと思はれる。外ケ濱は又た今の青森市を境にして、西を上磯、東を下磯と稱した尤も單に南部外ケ濱等と併稱された時の外ケ濱は、寧ろ津輕の代名詞として取扱はれた觀の無いでもない。　西行法師

陸奥の奥床しくも思ほゆる壺の石文外の濱風

陣屋跡　今の縣廳所在地は夫である。近年迄濠を廻らしてあつたが、今は埋められて昔の形を止めない。

善知鳥神社　青森市安方町にある縣社で祭神は宗像嚴島の三女神、昔は境内が非常に廣く其の一の鳥居は二里離れてゐる野内村の善知鳥前に立てられてあつたと言はれてゐる。此邊は大昔には大きな潟をなし安潟と言うた。潟の水戸口が出崎をなして居たのでアイヌ語の出崎卽ちウトウを又た地名としたが、其の出崎に集くうた鳥をも同じくウトウと呼んだ。鳥は千鳥に似て居るので之を葭千鳥、芦千鳥とも呼んだがそれが善知鳥、惡千鳥と書かれ、今の善知鳥の文字を產むに至つたものであると潟は埋沒して今では僅に其の俤を境内の一部に止めてゐるに過ぎない。

合浦公園　青森市の東端、浪打驛の前にある。面積二萬一千坪、舊藩時代の並木街道の古松を巧に取入れて造つたもので、海に臨み眺望佳である。園内に招魂堂がある。

妙見堂　青森市から南一里弱、東津輕郡横内村部内にある。嘉吉以前の創設にかゝり永祿年間再興された古い由緒ある神社で境内は荒川の流に臨み、枝垂櫻の古木多く老杉亭々として青森市民郊外散策の適地である。

横内城址　青森市から南二里、東津輕郡横内村にある。九十間四方の丸形の城なので鏡の城とも言はれてゐる。明應七年南部信時の築城にかゝり三男光康以後三代の居城となり當時近隣第一の大邑を作つたが津輕爲信の勃興となり油川落城の際、三代彈正は難を恐れ城を棄てゝ走り高陣場で殺された。

新城々址　津輕新城驛から二町で新城々址がある。何時築かれ何時亡んだか明でないが一說には新城大學、爲信の攻め來るを見一戰に及ばず退城したと、巷間に『新城の城なら言傳で落ちる』と云はれてゐるのも之から出たと云ふ。隣りの部落江渡村に北郡保養院がある。附近の原野は冬季スキー場として賑はひを呈する。

戸建澤　新城村大字鶴ケ澤にある。澤に臨んだ山の中腹に巨岩屹立し其中に洞窟がある。炭燒藤太の傳說で名高い。

淺虫溫泉附近

淺虫溫泉は東津輕郡野内村大字淺虫にあり東北本線の沿線で青森からは僅に九哩の地點にある。後に山を背ひ前は青森灣に臨み海岸近く湯島裸島鷗島等を望み、溫泉は各所に湧き四季夫々の情趣つきず青森近郊第一の遊覽地である。舊書には麻蒸とあり慈覺大師の發見とも傳へられてる。溫泉は無色無臭の鹽類泉で近年急激の發達を見せてる。

臨海實驗所　淺虫溫泉の東に出てる小さい半島の尖端、裸島と相對してる處に東北帝國大學の臨海實驗所竝に附屬の水族館がある。實驗所には海底水槽等もあり動物生理學の研究所としては世界に其名を知られて居る。水族館も日本一の稱があり夏季は縣外からも學生其他の入場者が多い。

善知鳥前棧橋　淺虫溫泉の西側一帶の斷崖は善知鳥前と稱されてるが、舊藩時代には國防第一線として態と道を開かず棧橋を造り僅に人の通路とした處である。玆は又た建久の昔、藤原泰衡の臣大河兼任が主家の弔合戰を試み津輕方面の最後の奮鬪をなした有名な古戰場である。

附近遊覽地　湯の島裸島から茂浦、双子島へかけての舟遊にはモーターボートの便がある。善知鳥前の南方の山上には天下茶屋と云ふ藩公遊山の跡がある。其の他附近には探るべき勝地が多い。

夏泊半島　青森灣と野邊地灣とを割つて突出てる半島を夏泊半島と云ふが略海岸の一周が出來勝景に富むので一日の遠足には好適の處である。探勝は小湊驛から下車し雷電神社より椿山に至り淺虫溫泉に出るのを便とする。

雷電神社　小湊驛から半里、小湊川の川口淺所にある。此邊の海は一帶遠淺で小松島と稱せられる小島もあり貝拾ひ等には最も適當な遊び場所である。初雪から消雪にかけて白鳥の大群が飛來するので有名であるが、大正十年白鳥渡來地として天然記念物に指定された。

立石　淺所から約一里で海岸に屹立する立石がある。洞穴があり案外廣く、中には蝙蝠が住んで居る。

椿山　立石から更に二里で椿山に達する滿山椿で掩はれ、大きいものは周六尺に達し、花時には紅霞靡き美觀附近に其の類を見ない。昔越前の商人が此村に來り乙女玉女と深く契り翌年を約して去つたが玉女は思慕の情寢食を忘れさせ遂に翌年を待ちかねて死んで了つた。一方商人は椿油や椿の實等を澤山持つて約束通り來たが既に冷たい墓標となつてゐたので墓の周に實を植ゑたのが今の椿山になつたのだと傳へられてる。傍に椿神社がある。椿山は椿の自生北限地として大正十一年天然記念物に指定された。

茂浦　干潮の時は椿山から無人島大島にも渡られる。夫から山越えして茂浦に出で養狐場のある茂浦島を見、崎嶇たる海岸の小徑を南すれば椿山から約四里で淺虫溫泉に出る。

小湊城址　東津輕郡中平内村小湊は平内第一の大邑である。僅に俤を止めてゐる城址は延元元年に安東家季と成田泰次と戰つた古戰場であると云ふ、玆から狩場澤に向ふ國道に沿うて千本並木がある。

松野木鑛泉　小湊から南東一里半、清水川上流に松野木鑛泉がある。冷泉を焚いて溫泉客舍があるが此の邊は平凡な中に愛すべき情趣の籠つた風景である。

上磯地方

油川町　青森市の西方一里にある。青森開港前は外ケ濱第一の港であつた。俗に大濱と呼んでゐる。西方十餘町の山麓に油川

城址がある。

内眞部森林　津輕半島を貫く梵珠山系はヒバ材に富み日本三大美林の一に數へられてるが分けても内眞部附近は最も美林を形成してる。青森營林局の森林鐵道は此處から山中に支線を引いてる。山の中に眺望山と名づけられた眼界の雄大な勝地がある。

阿彌陀川　上磯街道の小部落である。法然上人の高弟金光上人が川の中から阿彌陀像を拾つたので此の名がある。

玉松臺　蓬田村大字瀬邊地の南方の丘陵である。老松の下に數十基の墓石が竝んでるが之は日露戰爭の際召集を受けた在鄕軍人が不期生還を誓ひ、豫め墳墓を作つて出征したと云ふ悲壯な物語のある處である。

平館燈臺　蟹田村から二里、平館村にある。明治三十二年の設置で臺の高さ六丈九尺で光達距離十四海里である。黑船來航の當時此の村に津輕藩で臺場を築いた。

野田の玉川　青森を去る九里、平館村大字野田にある。日本六玉川の一で千鳥の玉川と云ふ。今は川床も淺せ幅も細つて見る影もなくなつた。野田の玉川は數々の歌に詠まれてゐる。

新古今集　能因法師

夕ざれば汐風こして陸奥の
野田の玉川千鳥なくなり
續新古今集　順德院御製

陸奥の野田の玉川見渡せば
汐風こして氷る月影
夫木集　後鳥羽院御製

光そふ野田の玉川月きよみ
夕汐千鳥夜半になくなり

袈月　平館の隣村一本木村大字袈月は三面の綠山が小浦を抱いた風光明眉の村で舍利石と云ふ小粒の光澤ある石を產する。

今別　上磯大邑の一で藩政時代には代官所を置いた處である。同村淨土宗本覺寺は地方に珍らしい伽藍で有名な貞傳上人を出した寺である。

三厩　津輕半島最北の港で、昔は松前藩の參勤交代も三厩を經由し繁昌を極めた處であるが今は一漁村に過ぎない。函館へ三十五浬、福山へは二十浬、其昔源義經が北海道に渡つたのも玆からだと傳へられてる三厩の名は義經が馬を繫いだと云ふ三つの岩窟から出たものである。村端れの高臺に龍馬山義經寺があり笹龍膽の紋が人目を惹く。

算用師越　三厩から北津輕郡小泊村に通ずる山道を云ふ。吉田松陰は嘉永五年三月小泊から三厩に越えたが當時の模樣は同人の東北遊日記に出てゐる。

龍飛岬　津輕半島の尖端、津輕海峽と日本海とを割つて突出てる岬である。海峽は靜かでも日本海が荒れ、日本海は晴れても海峽は曇ると云ふ風に、怒濤常に崖に迫つて眞に龍飛の思あらしめる豪快な風光である。附近に鮑で名高い宇鐵村がある。

八甲田山

八甲田山は東津輕郡と上北郡に跨がる高山にして深山を兼れた名山で酸湯岳(大岳)井戸岳、赤倉岳、田茂萢岳、前岳、石倉岳小岳、高田大岳の八峰から成つてる。一番高いのは酸湯岳で海拔五千二百八十尺本縣最高峰の一である。八甲田山は縣の中央にあるので東に南部平原を通じて太平洋を望み、西に津輕の沃野を越えて岩木山竝に日本海を眺め、北は青森灣津輕海峽を隔てゝ遠く北海道の山々を見渡し、南は山岳重疊たる中に岩手山、鳥海山と對峙し、縣下は元より眼下にあつて其の眺望の雄大な事日本にも多く類例を見ないと云はれてる。高山植物の豐富な事も日本有數で東北帝國大學の高山植物研究所竝に高山植物園は昭和三年山中酸湯溫泉の傍に設置された。周圍に溫泉多く田代、下湯、酸湯、新湯、猿倉谷地の諸溫泉を數へる。登攀は青森市から酸湯溫泉に出るのを順路とするが、酸湯からの登山道は女子供にも樂に登られる程度のものである。

酸湯溫泉　青森市を去る南七里八甲田山の西腹にある。青森市から横内村を通り雲谷峠の西側を廻り萱野からブナ帶に入り甲田八峰中の前岳田茂萢岳の麓を過ぎて酸湯に達するが此の間自動車の便がある。泉質は硫黃泉で入浴三日で他の溫泉の一週間に比敵する靈泉である。附近には酸湯公園、城ケ倉、三階瀧、睡蓮沼等の勝景がある。酸湯から西十町に新湯溫泉がある。酸湯の岩燕は中郡嶽溫泉の岩燕と同じく人家の軒に巢くうので動物學者に珍重がられてる又近頃評判となつた八甲田山のモリアホ蛙は研究も一段落をつげたので天然記念物として指定申請中である。

植物研究所　東北帝國大學の高山植物研究所竝に高山植物園は酸湯溫泉の傍、酸湯公園の一隅にある。高山植物研究所は全く日本最初の試みだと云ふ。植物園内には地獄湯井戸湯其他の溫泉が湧き山あり谷あり規模頗る雄大で浴客の自由散策を許してる

雪中行軍遭難地　明治三十五年一月青森歩兵第五聯隊の雪中行軍遭難地は八甲田山赤倉岳の北方鳴澤附近で同地に記念の銅像が立てられてる。田代溫泉は其の附近にある。

蔦街道　酸湯溫泉から上北郡蔦溫泉迄は四里半あるが其の途中には石倉岳の懸崖、トド松帶、睡蓮沼、お花萢、猿倉溫泉、谷地溫泉、ブナ處女林等の見るべきもの多く近來十和田湖見物に此の八甲田越えを選む者が多くなつた。睡蓮沼の邊から北に八甲田山景を衝立と仰ぎ、南に櫛ケ峰、乘鞍岳の連山を屏風と眺むる壯觀は、眞に陸奥アルプスの名に背かない雄渾なものである。

第二節　西津輕郡

鰺ケ澤町附近

鰺ケ澤町　西津輕郡は海岸線が長く、又昔から海上遙かに越の國と往來したので文化も津輕中で最も早く開けた地方である。阿倍比羅夫が舟師百八十艘を率ゐて上陸した地點も此の西海岸らしく、其の外坂上田村麿の遺跡も多い。鰺ケ澤町は本縣西海岸の中部に位し津輕四浦の一として青森に次ぐの要津であつたが明治初年から海運の系統が變り漁業の不漁と相俟つて急激な衰運を招いた。然し町の造り何となく古い港と云ふ感じを與へる情趣ある町である。鰤の名產を以て名があつたが近年は豐漁を見なくなつた。

種里城址　鰺ケ澤の南西一里赤石村の山間にある。津輕家發祥の地として名高い。

關の甕杉　鰺ケ澤の南二里關村にある。高さ百二十尺周圍三十尺、樹齡千年だと云はれてゐる。此處は鎌倉時代既に安東氏の一族が城を築いた古い村である。

大戸瀨　關村から更に南すれば鰺ケ澤から約三里で大戸瀨の絕景に達する。大戸を立てた樣な巨岩が道の傍にあるので大戸瀨の名を得たが此邊一帶の荒磯は千狀萬態頗る奇景に富んでゐる。玆は寬政四年の大戸瀨地震に地盤が六尺以上隆起した處で、昔海床であつた部分が露出して千疊敷等の奇觀を止めてる。大戸瀨に續いて小戸瀨の奇勝があるが總じて玆から深浦迄の海岸は鳥居岬を初めとして飽く事を知らない勝景續

きである。

東の濱　深浦町の入口に景勝東の濱がある。海中に烏帽子形の二本の岩が立ち怒濤と戰つてる壯觀等西海岸第一の風景だと云はれてる。此處は昔阿部比羅夫が秋田、津輕、渡島の三蝦夷を饗應した有間の濱であると

深浦港　昔は津輕四浦の一で他國の船も多數碇舶したので、花柳界の方は古くから發達し、ミズ漬の名を冠せられてる深浦遊女は出船を遲れさす等の濃厚な深浦情緒を生んだものであつた。今も殘る俚謠の

都々逸

深浦泊りにや碇が入らぬ
　深浦女郎衆は皆碇
深浦音頭
私は船頭の身であれば
　來春來るやら來ないやら
妾も勤の身であれば
　此の家に居るやら居ないやら

等を見ても當時の港の賑はひは想像に難くない。

圓覺寺　眞言宗醍醐派で本尊は十一面觀世音、大同二年坂上田村麿の創立だと言はれてゐる。觀音堂棟札には康永三年藤原氏家再建とあるが何れにしても本縣最古の建築物の一つである。境内には見落してはならぬ杉と銀杏の二老樹がある。

岩崎村　近く艫作、黃金の二岬を控へ、岸に辨天島あり沖に久六島を望む岩崎も亦た西海岸の一勝地と云はればならぬ。村の南端笹内川の上流には笹内溫泉と近年世間に知られて來た十二池がある。

ガンガラ穴　岩崎から森山を經て杉神に出ればガンガラ穴、仙北穴の奇勝がある。一大奇岩が海中に突兀とつき出てる中に一筋の水路を刻んで洞穴が穿たれてる。入口は狹いので舟上に身を屈して入るが、中は案外廣く舟で一週する事が出來る。狹い入口から入る太陽の光線は海水を最も美くしい色に染め、凄慘の氣漲つて漫ろに襟の寒いのを覺えさせる。暗い洞中に蝙蝠が巣くうて不意に頰片を掠めるなどまるでアラビアンナイトの中にでもある魔境の中に入つた樣な氣がする。奥に更に仙北穴があるが共に本縣には類の無い景色で正に伊太利の琅玕洞にも比すべき奇景である。陸に上れば茶右衞門館で、今でも土中から燒け米が出る。

森田の竪穴　鰺ケ澤と木造の間に森田村がある。七十九個の先住民族の竪穴が散在して斯學研究家の興味を惹いてゐる。

七里長濱　鰺ケ澤から十三村迄七里の海岸は屈曲のない砂濱で只日本海の大浪がザワリ〳〵と碎けるばかりである。昔は此處を馬が通つたと見え左のヨサレ節が今も唄はれてゐる。

扨も珍らし馬喰の浴衣、肩は鹿毛馬に裾栗毛、腰に馬轡手に手綱、七里長濱唄で通る。

屏風山　岩木山麓鳴澤村大字浮田から牛潟村大字富沼に續く幅一里長さ十里の一脈の丘陵を屏風山と云ふ。昔は一木もない砂丘であつたので西風の度に七里長濱の砂が飛んで來て耕作を妨げる事夥しい處から津輕信政が玆に雜木を植ゑ名けて屏風山と呼んだ。屏風山中車力村大字牛潟部内に三五郎稻荷があり近郷の信仰が厚い。

龜ケ岡　館岡村大字龜ケ岡は元瓶ケ岡と書かれた程先住民族の土器が多く發掘された處である。土器の完全で且つ立派な事は日本中でも有名なものである。多分土族中の豪族が比較的近年迄住んでゐたものであらう。津輕信牧が玆に築城の工を起したが工事半に幕府から一國一城の令を布かれたので築城は中止した。

十三潟

十三潟は屏風山の盡きる西郡の北端にある昔はトサの潟と稱したが土佐守信牧の官名に諱んでジウサン潟と改めるに至つた。湖面は東西一里二十八町南北一里二十町、周圍六里餘とあるけれども、岩木川、山田川相内川其他の諸川が注ぐので土砂の爲に年年潟を狹められ、底は淺くなり今では最も深い處でも七尺に過ぎないと云はれてる。勿論昔は潟も廣く底も深く、大船が自由に出入した處で、十三福島城、十三千坊を初め古の江流末郡の文化は皆此の潟を通じて生れたものであつた。鎌倉時代には日本七港の一に數へられてゐたのである。然るに打續く弘安、興國再度の暴風洪水に破壞され今では古跡を探るにさへも苦しむ程になつた。黃金時代の殷賑さは十三往來や十三音頭にも覗はれる。十三往來は山王坊居住の當時の高僧の作と稱され、誇張し過ぎた嫌のないでもないが大體の結構を窺ふに十分である。原文は漢文で讀み惡いから玆には譯文を揭げる。

十三往來

夫れ天竺には王舍城、震旦には長安城、我朝には平安城、三國相應の都なり。爰に近ごろ奥州津輕十三の湊は新城として は肩を雙ぶる城郭坂より東には有るべからず、此城郭は方八十町、柵の木築き廻し、内は面々に要害を構ゆる事莫大なり外より見て明白なり、焚嚼養由の勇を成すも轍ち弓を引き打物を取りて向ひ難し其の外景物の多き事は八景に過ぎて十景とも謂ふべし、東山の野澤は渺々たる牧なり、數千疋の馬共麋鹿を交へて思々の勇を成し、心々に遊行く風情を見れば誠に稀代の景物なり。

南は湖水濃々として月は水底の暗を照す青波靜にして魚捕の便あり、遙に巖木の嶽を見れば花に交る殘雪は遠眼を興ぜしめ、谷を出づる鶯舌は近きに依りて聞く雲霞麓に鬟き、山の嶺高くして大空に顯はる、誠に是れ富士山を諍ふ程の名山なり。

西は滄海漫々として異船京船群集し艫先を並べ舳を調へ湊は市を成す、亦濱の大明神の社頭を拜し奉れば甍を並べ玉籬を立て圍み、神殿の床嚴として十餘丈の鳥居は遠く立ち、其間切石を疊み瑠璃殿に異ならず、此の明神の本地を尋ね奉れば東土淨瑠璃世界の教主醫王の善誓跡を垂れ給ふ事歳久し、十二大願の網を法界の海に張り、無緣の群集を救はん爲め假に瓦礫の塵砂に身を交へ、風波を海邊に擔ひ跡を垂れ給ふこと寔に悲願頼もしき靈社なり。

北は深山堂塔を連ね僧坊透なく、圓宗の修學、禪林寺の過現未堂、三千佛の光明赫々として靈山淨土とも疊ゆ、亦龍興寺の體たらくを見れば、後は青山峨々として峰の清嵐梢を鳴らし、前は瀧の水漲り落ちて坐禪の眼を驚かす、阿吽寺の鐘聲は諸行無常の告を成し、後夜晨朝の勤聲は寂滅爲樂の雲を穿つ、是れ亦殊勝の景物なり。

新町は棟を並べ軒を攝し、數千萬の家造あり、商人賣買心に任せ民の竈煙賑はふ相内川の水淸うして許由耳を洗ひ、巢父の牛を牽いて歸るは顯衆の流に異ならず遙に瑇瑠磨明神の社堂を拜し奉れば前は海邊を望み、岩崛峰に峙ち、松風颯々として琴を調べ、麓は白浪花を疊むこと千斤、遙に熊野權現跡を垂れ給ふこと年久しく靈驗少しも本社に劣らざる程の名山

なり、又館の内に羽黒權現を崇め奉る、祈念御神樂怠轉なし、椒橙の鼓聲は五衰の雲を消し感應の月は圓にして大なり、堯々たる鈴の聲は拾亂の霞を振ふ、偏に利生の華鮮なり、頼もしきかな、是を禮し彼を拜せば心肝を愷めざるなし、惣じて此福島城郭は、左は青龍、右は白虎、前は朱雀、後は玄武、四神相應の靈地なり。

數字は勿論割引して見るを要する。次に今も猶ほ十三地方に殘つてる左のトサ音頭はべんざい船（川崎船の大なるもの）の出入した事を物語つてゐる。

十三音頭

トサの砂山米なら良かろ
西のべんざい衆（船頭）に皆積まそ

昔十三潟の廣かつた事は、木造新田地方からサルケの出る事でも分る。サルケは昔潟の周圍に生へた草の名殘であるから、或る時代には木造邊に迄も潟の廣がつてゐた事が解る。十三村附近の砂の中から今でも時時懸け佛が掘出されるが之も當時人家の多かつた事を物語つてゐる。

木造町附近

木造新田　木造町は元木作と書かれた。之は信政公新田開墾の際、惡路人馬を通さないので道に材木を敷いた事から起つた名である。當時拓かれた新田は木作、金木、俵元の三新田である。木造中學校境内の大公孫樹は當時信政公の手植にかゝるもので三新田神社は信政公を祀つてゐる。

彌三郎節　木造新田を中心に彌三郎ぶしなる唄が唄はれてゐるが、之は木造町の隣村下相野の彌三郎が嫁を虐待した事實を唄つたもので郷土色に富んだ有名な唄である から全文を掲げて見る。

彌三郎ぶし

一つアエー、木造新田の相野村、村の端
　れコの彌三郎ア家、コレモ彌三郎ア家
二つアエー、二人三人と人頼で、大開萬
　九郎から嫁貰らた、コレモ彌三郎ア家
三つアエー、三つ物揃へて貰らた嫁、貰
　らて見だどこア氣に合はぬ
四つアエー、夜草朝草缺かネエでも、遲
　く戻れば苛びられる
五つアエー、苛びたり揉んだり嘲たり、
　日に三度の口つもる
六つアエー、無理だ親衆に使はれて、十
　の指がら血コ流す。
七つアエー、なんぼ稼でも働レエでも、
　附る油コも附させぬ
八つアエー、彌三郎ア家コばり日コ照る
　な、藻川の林コも日コア照るアネ
九つアエー、玆の親達ア皆鬼だ、此處サ
　來る嫁ア皆馬鹿だ
十とアエー、隣知らずの牡丹餅コ、嫁サ
　食せネアで皆隱す
十一アエー、十一吉日倉開き、倉も開が
　ネアで嫁出した
十二アエー、十二山の神ア角ア生でラ、
　玆の親衆に良ぐ似でる
十三アエー、十三所八方から嫁貰らても
　玆の婆樣の氣に合はぬ
十四アエー、濕打だネアで粗搗がせ、滴
　す涙で粗ア搗けだ
十五アエー、絲の無いのは是非もない、
　泣の涙で暇貰らう

第三節　弘前市及中津輕郡

弘前市附近

弘前市　弘前城は津輕藩主三百年の居城で東奥有數の名城である。今は、一部は陸軍省用地となつてるが大部分は弘前公園として開放されてる。天主閣、隅矢倉、樓門等多數現存し老杉古松の間に昔の姿を止めてる。本丸は一段高く、岩木の秀麗を西に仰ぎ、西北津輕の平野を一眸に收め風光最も雄大である。本丸の中央には藩祖爲信の銅像があり、周圍の濠端には數千の櫻樹植栽され今や東奥一の櫻の名所として天下に名を知られるに至つた。大正天皇東宮時代に行啓あらせられた際鷹揚園の名を賜つた築城は慶長八年爲信の選定にかゝり信牧遺志を嗣いで同十五年着手翌十六年五月落成した、弘前市の町割りの屈折して見透しつかないのも軍學を基礎として區劃された結果に外ならない。弘前市は津輕三百年の文化の發源地で、文學に美術に地方色の濃いものを澤山殘してゐる。名物の年中行事としては觀櫻會、ネブタ、盆踊り、お山參詣等がある。市内和德町に和德城の跡がある。

長勝寺　弘前市西茂森町にある、津輕曹洞宗の總本山で同宗二十三ケ寺は末寺と共に門前に立並び老杉鬱々と天に冲して清淨なる地域を劃してる。山門は高さ八間、本堂は津輕有數の大伽藍である。古鐘は嘉元の銘ある津輕最古の梵鐘であるが北郡飯詰村長圓寺から持つて來たとも云はれ又た藤崎の滿藏寺から持つて來たとも云はれてる此鐘は元雌雄二つあつたのを雌の方を十三潟の底に落したので今でも長勝寺の鐘は、十三懸し十三懸しと鳴ると云ひ、又た十三潟底の鐘は長勝寺の鐘の鳴る度に和音すると傳へられてる。

五重塔　弘前市新寺町大圓寺境内にある高さ十七間二尺、廣さ四間五尺四方、寛文八年津輕信政、戰死者供養の爲に建立したもので四年の歳月と一萬四百十二兩の工費を要した。初め三重塔であつたのを後二重を加へて五重塔とした。三重塔の營造棟梁は弘前の名工高山莊四郎である。日本國中にも稀に見る立派な五重塔で、國寶に指定されてゐる。同寺の仁王尊は天保の頃弘前の名工福地福左衞門の作で名作と稱されてゐる。

著名な社寺　弘前市内には社寺の數が非常に多いが其の内著名なるものを記せば

◇大行院　藩政時代には山伏の道場として著名であつたが維新後は神宮となり天保宮と稱する。院内の古櫻は良く文人墨客の杖を曳いたものである。

◇縣社八幡宮　田町にある、元鼻和の床にあつたのを慶長年間津輕信牧今の地に勸請したものである。

◇縣社熊野宮　同じく田町にある。草創は阿倍比羅夫だとも傳へられる。

◇住吉神社　弘前市住吉町にある、寛永五年信牧の創立である。

◇報恩寺　弘前市新寺町にある。津輕信義の遺髮を埋めた處で津輕信明、同信寧の木像がある。

◇貞昌寺　弘前市新寺町にある。縣下淨土宗第一の寺格を有してる。

◇眞敎寺　同町にある眞宗大谷派の總錄であつた。

◇本行寺　新寺町にあり日蓮宗の大刹である。先代住職協日凞上人は一代の碩學であつた。

唐内坂　弘前市外清水村にある正面に岩木山を望み眼下に岩木川流れ、美景唐にも無しとて初め唐無坂と稱したが今は唐内坂に代つてる。津輕五代藩主信壽此處に亭を設け遊興したと。坂の下は惡戸村であるが方言踵をアクドと云ふ處から舊藩時代の謎に左の秀逸がある。

唐内坂とかけて、切れ足袋と解く、心は

惡戸（アクド）が見える。

久渡寺　弘前の南一里餘にある、眞言宗五山の一で境内の眺望佳絶である。有名な幽靈の軸は古くから應擧の筆だと傳へられてゐる。森岡金吾の碑もある。

座頭石　弘前市から二里千歳村一の渡の山中にある。斷岸上の石は春者が琵琶を負うた形に似てるので此名がある。杉あり躑躅あり四季夫々の情景掬すべきものがある

小栗山權現　弘前市から一里、千年村にある。岩木山の傳說安壽姫津志王丸に絡んだ傳說が玆にも殘り、附近の若者は昔から岩木山詣りをしなかつたそうである。此處の祭例は舊八月十七日で附近最終の行樂地として大いに賑はふ。

革秀寺　弘前市外中郡藤代村にある。藩祖爲信公の廟があるので名高い、門前の蓮池は附近の名所に數へられてる。

堀越城　弘前市の西一里堀越村にある、永祿年中南部の臣武田紀伊守の居城で後大浦に歸し、文祿三年津輕氏の居城となり弘前城の工竣る迄此處に據つた。

大浦城　津輕爲信勃興の地で石川、和德大光寺、浪岡の諸城攻落は何れも軍を大浦より發して凱歌を上げたのである。弘前市より西一里半、大浦村大字賀田にある。

百澤村附近

岩木山　岩木山は弘前市から西三里、津輕平野の中に屹立し山容秀麗富士にも勝る所から津輕富士又は奥富士の名がある。高さ五千二百餘尺、八甲田山と相對して本縣第一の高峰である。頂上は更に三峰に分れ中央の最高峰を岩木、東峰を巖魏、西方を鳥海山と云ふ。津輕平野、日本海沿岸は眼下にあり外ケ濱下北半島方面も一眸の内に收まり遠くは北海道の山々、秋田の鳥海山も見える。丹後國山莊太夫に虐待された安壽姫の靈が此處に來て神となつたから、昔から丹後の者が入國すれば天氣が荒れると云はれてる。頂上に御室と稱する一社がある。

岩木山神社は國幣小社、山麓百澤にある祠堂の結構壯麗を極め奥日光の名がある。山門は高さ數丈寛永五年の建造、信牧の造營、本社は三間四方、拜殿は十三間四方で元祿七年に七年間十八萬兩を費し信政の經營で成つたもので、津輕通寶と云ふ一分銀は此時鑄造されたと。山門と拜殿は國寶に指定されてる。祭神は顯國玉神、多都比々

賣命、宇賀能賣命である。

お山參詣は毎年舊八月朔日から十五日頃迄行はれ津輕の各市町村から例年登山者を見ない事がない程盛んな行事となつてゐる

登山には白裝束に御幣を持ち笛太鼓につれサイギ〳〵、ドウコウサイギ、オヤマニハツダイ、ゴンゴウドウサ、イヅニナノハイ、ナムキンメウテウライ（之は、懺悔々々、六根懺悔、御山八大、金剛童者、一々禮拜、南無歸命頂禮、の訛りだと云ふ）

と勇ましく唱和して上り、下山には同じく笛太鼓につれ

良い山かけた、朔日山かけた、バツタラバツタラバツタラヨ

と假面を被り踊り乍ら迎への人々と共に夫々の村に歸る。登山口は西郡長代と中郡百澤の二つだが百澤口が最も賑はふ、單に視察の爲めの登山には近年嶽温泉から上る者も多い。岩木山を詠んだ詩歌は澤山殘つてるが西行法師の歌は最も聞えてゐる。

西行法師

富士見ずば富士とや云はん陸奥の
岩木の嶽の雪のあけぼの

縣社高照神社　弘前を去る三里、中郡岩木村高岡にあり岩木山神社と連接してる。津輕藩四代の明主信政公の廟がある。當社の寶物刀劍二口（一は銘眞守、拵糸卷太刀津輕信壽寄進、一は銘友成、拵糸卷太刀、津輕爲信所用津輕承昭寄進）は國寶に指定されてゐる。

公家塚　岩木山麓船澤村部内の宮館、中別所近傍にある。正應以來の古碑だが何人のものか判明しない。里人公家塚と稱してゐる。此處から程遠からぬ岩木村に高館城址がある。

嶽、湯段　岩木山の南麓、中郡岩木村大字常盤野に嶽、湯段の二溫泉がある。弘前から五里の所にあるが浴客は相當に多い。

常盤野　岩木山麓の廣濶な高原を云ふ。弘前市出身の東京商工會議所會頭勅選議員藤田謙一氏が數十萬圓を投じ開墾竝に牧畜を初めて有名となつたが、藤田氏は最近之を弘前市東奥義塾に寄附した。

目屋村附近

紙漉澤御陵　弘前市を去る二里、中郡相馬村大字紙漉澤にある。長慶天皇御陵墓參考地として名高い。附近に、うへの堂（上皇堂）五所村（御所村）等があり、御製として

ゆきくれて紙漉澤に迷ふ身の
けふを限りの命なりけり

の一首も傳はつて居るが、辭世の御歌とも拜されて畏い極みである。

目屋溪　岩木川の上流を云ふ。奇景に富むが交通不便な爲め世に多く知られてゐない。暗門瀧其他の名勝も皆目屋溪のものである。

◇清水の觀音　弘前を去る三里半、東目屋村大字櫻庭にある。堂の近くに釣橋があり高さ十數丈、下は目屋の溪流で男でも眩暈する位であると。

◇岩谷の觀音弘前市を去る四里半、西目屋村大字村市にある、目屋溪の河岸十數丈の岩窟の中にあるので聞えてゐる。

◇乳穗ケ瀧　川原平に至る途中田代村にある。十丈の高さから落下し水勢弱いが年中涸れる事なく冬季は飛沫氷結して落ち壺を中心に乳穗の形となるので此の名がある。藩政の頃には乳穗の大小で年の豐凶を卜したと云ふ。

◇暗門の瀧　西目屋村大字川原平から更に三里山中の目屋溪にあり弘前からは十里餘である。瀧は三段からなり一段は高さ二十餘丈幅二丈、二段三段は稍劣るが縣下第一の瀑布で一里前から其の音を聞くと云ふ獨り暗門の瀧が見事なばかりでなく途中の溪流は又た幽邃を極め全國でも稀有の勝地だと云はれてるが、地が餘りに不便な爲め探險した人は甚だ少い。

第四節　南津輕郡

黑石町附近

黑石町　南津輕郡は津輕五郡中の大郡で古くから平賀郡、田舍郡、興法郡等の名で世に聞えた處である。其の中心黑石町は津輕藩の分家黑石藩一萬石の城下として昔から繁昌した町で今でも青森弘前の兩市を除けば八戸町に次ぐ大きい町である。黑石公園は舊城址の一部であるが、淺瀨石川の清流に臨み岩木山を高く仰いで眺望頗る良い

淺瀨石城址　黑石の南東半里、淺瀨石村の東端高地にある。南部の臣千德大和の居城で大光寺城と竝び石川城の兩翼であつた石川城が爲信に落されるや千德は降つて津輕の臣となつたが後謀叛して誅せられた。

溫湯溫泉　黑石から東方二里、淺瀨石川の岸にある。鶴が脛を癒やしたのを見て開

いた溫泉で鶴の湯とも云ふが泉質は鹽類泉溫度は甚だ溫い寛永年間花山院藤原忠長が流滴された際玆に浴して溫湯の名を與へたのであると

雲の上に聞こえあげばや芦田鶴の
　癒えしいで湯のしるきしるしを　　花山院藤原忠長

板留溫泉　溫湯から約半里、同じく淺瀬石川の岸にある。此處も花山院忠長が、河水の湯に流れ込むのを板で留めて入浴した事から板留溫泉と名づけたのであると、泉質は同じく鹽類泉である。

中野の紅葉　板留溫泉の入口から左に入れば間もなく中野に出る。高さ三丈幅七尺の不動の瀧が玉簾に凉味を織交ぜて中野川に落つる邊、川原も山も皆楓樹で、春は芽出し夏は青葉、秋は紅葉に時々の趣あり縣下有數の遊覽地となつてる。此の楓は享和年間津輕藩主信寧が京都から移植したものだと言はれてゐる。山上に古社あり日本武尊を祭つてる。溫湯板留中野三ケ所の廻遊は一日の清遊に丁度良い處であるが更に黒森山に登つて附近の溫泉に一泊するのも面白からう。

黒森山、中野から七曲り等の急坂を上る事里餘で黒森山淨仙寺に着く、閑寂の境で修業には最も適はしい處である。明治三十七年九十三歳の高齢を保つて物故した住職寂導師は近村の子弟を山に寄宿せしめて和漢の學を敎へ、又た師是空上人の遺訓を守り穀を食まず木の芽等を主食とし自ら石洞の墓穴を掘り大往生を遂げたので有名である。黒森山の頂上は青森灣も見えて眺望が廣い。

十和田道　十和田道黒石口は黒石町から前記溫湯板留を過ぎ溫川を經て湖畔瀧野澤に出るのであるが此の里程十里、溫川迄八里の間は自動車も通る。沿道に溫泉が多いので溫泉街道の名もある、即ち溫湯板留の次に二庄内、沖浦あり溫川溫泉迄合計五個を數へる、沖浦、溫川の中間から一里餘の山中には別に要目、切明の二溫泉もある。

田舍館城址　黒石の南方一里半にある。天正十三年、城主千德掃部政武は爲信に攻められたが孤忠を守つて降らず城中の將卒悉く戰死し政武も自刄した悲壯な物語を殘してゐる。

大光寺城址　黒石から二里、弘前から二里半位の大光寺村にある。建久年間大河兼任の亂から天正三年津輕爲信の手に歸する迄幾多の戰亂を見た古戰場である。

猿賀神社　黒石の南一里半猿賀村にある境内十五町、昔から殺生禁斷の地として百鳥群來してるが分けても五位鷺は著名で天然記念物に指定の取調中である。地方盆唄

猿賀池の雜魚皆々メコだ
　餘計もメコで無いや二三匹メコだ

とあるのも玆の事である。神社の緣起は中々古く比羅夫が創設し、田村麿勅を奉じて宮社を建立し後藤原秀衡、北畠顯家、安倍師季等交々造營し津輕家でも修理したと言はれてる。陰暦八月十四日の前夜祭には縣下各地から參拜者殺到し非常に賑ふ。

奥の身延　六郷村高館の山中法峠を云ふ日蓮上人六哲の一人日持上人の道場であつた。寛政年中堂を建てたが白河樂翁公、東奥戒壇と書いた額を寄進した。

浪岡附近

浪岡城址　浪岡は昔並岡又は行丘とも書き津輕地方では最も古い地名の一である。津輕平野から外ケ濱に通ふ要驛であつたので鐵道開通前は相當に繁昌した處である。浪岡御所と呼ばれた浪岡城址は村の東方高地にある、三面に山を負ひ下には河水を引いて濠を築いたものらしい。應永年間北畠顯家の曾孫顯邦が玆に居り代々北畠の居城であつたが天正五年津輕爲信に亡され兵火に罹つて烏有に歸した。附近には浪岡八幡宮、五本松の首塚等の古蹟もある。又地方唄ホーハイ節は浪岡お玉が茶屋で、津輕爲信が敗軍の兵を慰める爲に唄つたものだと云はれてる。

ホーハイだホーハイだ婆の腰ア曲つたホーハイだホーハイだ曲らネイヤくにやた

西光院　行岳山西光院は浪岡を去る半里五郷村大字北中野にある。陸奥國に巡錫した法然上人の高弟金光上人は東郡阿彌陀川で拾つた彌陀の尊像を此處に奉安し、近村に淨土宗を廣めた古刹である。北中野は昔津輕から南部に拔ける近道であつたので、相當に榮えた處であつた。盆唄で名高い中野のお松は北中野のお松と云ふ娘の事で、鬼神お松の前身であると云ふ傳說もある。

行けば常式だヨ中野のお松、ナンボお松でも常式はならぬ。

高陣場　浪岡村王餘魚澤地内にある。津輕平野と外ケ濱の中間にある高地で眺望が廣い。此處は幾多の古戰場として名高い。

藤崎附近

藤崎城址　藤崎町の西方平川に沿ふ高地にある。津輕最古の城で規模も大である。安倍貞任戰死後、其の二子高星丸當時三歳が乳母に抱かれて藤崎に隱れ長じて築いた城と云はれてる。

堰神福田宮　藤崎町にある。慶長年間藤崎堰が年々破れ農民が困難した時、自ら進んで人柱に立つた堰八太郎左衞門安高を祀つたものである。

唐糸御前の碑　藤崎の北板柳に通ずる道路の傍にある古碑は唐糸御前の碑だと傳へられてる。唐糸御前は藤崎の產で北條時頼の妾となつたが寵衰へて歸鄕悶死した、時頼之を聞いて憐み一宇を建て弔つた、滿藏寺は之である。後兵火に罹つたが古鐘は弘前長勝寺に納められた。鐘銘に嘉元四年とあり今から六百二十數年前で、本縣に存する金石文中最古のものである。

大鰐藏館附近

大鰐藏館溫泉　大鰐溫泉と平川を隔てた對岸に藏館溫泉があり共に鹽類泉である。大鰐の川原の湯は昔から有名で、

お醫者樣でも川原の湯でも
　戀の病は癒りやせぬ

の盆唄が殘つてゐる。近年はスキー場として全國的に有名となり、昭和三年一月此處で開かれた第一回大學專門學校スキー競技大會の際には秩父宮御來臨の榮譽を擔つた大日堂と萩桂　藏館村大圓寺にある。眞言宗の寺であるが本尊が大日如來である所から俗に大日樣と呼ばれてゐる。此の如來像は國寶として指定されてゐる。萩桂は山門外にあり日本三大名木の一で、樹齡八百餘年と言はれてる。

阿闍羅山　大鰐の傍に聳えてる山で、田村麿北伐の際阿闍羅千坊を建てた舊蹟として有名であるが千坊の跡今は見出し難い、麓の狐森は所謂大鰐のスキー場である。

古懸の不動　大鰐から一里半、碇ケ關から半里碇ケ關村大字古懸にある。阿闍羅山から移した伽藍で近隣の信仰が厚い。

碇ケ關溫泉　大鰐から二里、碇ケ關驛から十町の處にある。泉質は鹽類泉、溫泉は淸冽平川の兩岸に湧き川に河鹿もないて幽靜閑雅な溫泉場である。昔から何も利かぬ關の湯と云ふ言葉があるが、之は他藩の境に近いので其の入浴を防いだ宣傳であらう

乳井の毘沙門　竹館村大字乳井にある。承應三年津輕信義の建立で七間四方の堂宇は近隣第一と稱せられてる。附近に茶臼館の砦がある。津輕一統の際爲信危く一命を殞さんとした處で名高い。

石川城　石川町大字大佛山にある。大佛ケ鼻城とも云ふ。津輕第一の堅城として南部高信茲に居つたが元龜二年五月津輕爲信に攻め落された。城址は石川町の公園となつてるが近年城内から城外に通じてるくけ穴と稱する坑道が二本發見され見物に赴く者が多い。

第五節　北津輕郡

五所川原町附近

五所川原町　北郡第一の大邑、同郡の政治經濟の中心を爲してる。延寶四年津輕信政の時新田開墾されて以來漸次繁榮を見て今日に至つた。五所川原の名は、當時岩木川の川原が五ヶ所あつた事から命名されたと云はれてる。村社八幡宮は長慶天皇御尊像を祀ると稱され五所川原の地名は御所川原の轉訛したものとも云はれてる。

岩木川　岩木川は本縣第一の大河で、本流は秋田縣境泊岳から發し、上流を目屋溪と云ひ弘前市附近から岩木川となるが、更に平川、淺瀨石川の二大流を合せ板柳より五所川原に入り、附近の諸川を呑み北走して十三潟に注ぐ、延長二十二里である。上流には斷崖絶壁目屋溪の勝を殘し、中流には弘前市附近に清き積を見せ、五所川原邊より所謂下流の平凡にして雄大な風趣を展開してるが、分けても五所川原附近の堤防より川を隔てゝ岩木山を望む風景は、津輕平野の代表的書面である。

高野千坊　七和村大字高野に狄館の古跡がある。茲は昔高野千坊のあつた處だと云はれ、津輕三千坊とは阿闍羅千坊、十三千坊に、此の高野千坊だとも傳へられてるが中には高野千坊を除き、東郡東岳の東千坊を入れて三千坊としてるのもある。

七和村　七和村は優良村として名高い村で、村内には前記高野千坊の外原子城址持子澤城址等の古蹟もある。唄の意味は解らないが次の地方唄が古くから唄はれてる。

原子羽野木澤持子澤の烏
同じ烏でも色黑い

鶴壽橋　鶴田村から中郡野木に通ずる岩木川の鶴壽橋は縣下一の長橋で長さ百六十七間ある。

館野越　浪岡の西方一里半、北郡浩川村大字館野越は永祿年中北畠顯範の築いた處で其の後裔北畠德本氏には永祿日記、北畠氏系圖等の重要書類が傳はつてゐる。

海童神社　板柳町にある。文祿二年豐臣秀吉三韓征伐の際津輕爲信は秀吉に謁見する爲め九州名護屋に赴いたが、船出に當り海上安全の祈願所として岩木河畔に創建したのは此の海童神社である。目下縣社の請願中である。

梵珠山　津輕平野と外ケ濱とを隔てゝる山脈を梵珠山脈と云ふ。山脈は東、北、南の三郡に跨つてるが最高峰梵珠山約千五百尺は北郡七和村に屬してる。青森灣、津輕沃野眼下にあり眺望が大きい。頂上に巨刹の址がある。山名はアイヌ語のポンニタイ即ち美しき小高き山から出たものである。登山口たる七和村前田野目に松倉神社がある。

飯詰村　飯詰村は開村の紀元が古く附近には名所舊跡が多い今猶ほ村内に殘つてる高館城址は天文年中樺澤國右衞門の築いたもので此の外長圓寺を初めとして由緒の古い寺も多い。村の南端の二つ森はスキー場

として競馬場として近隣に聞え、村の東方一里の尼池は、二人の尼の投身の傳說を宿した淋しい池で、雨乞ひの名所として名高い。油川道一里餘の處には不動の瀧がある。

金木中里附近

芦野公園　金木町の直ぐ傍にある。藤枝溜池の周圍に造られ、園内外に芦野グランド、芦野競馬場、賽の川原等がある。賽の川原地藏堂の祭例は六月二十三四日であるが、二十三日夜は津輕の巫女が全部茲に集り暗夜の松原に篝火を焚き怪しい呪文を唱へる形相は全く一奇觀である。

嘉瀨村　金木町と小田川を隔てゝ嘉瀨村がある。サルケの產地として名高い。又昔は大きい凧を飛ばしたので有名であつた。金木と嘉瀨とは昔から仲が惡るく爭鬪には永い歷史を持つて居たが、今も猶ほ次の盆歌が殘つてゐる。

嘉瀨と金木の間の川コ
石コ流れて木の葉コ沈む

湯の澤鑛泉　喜良市村から東南一里半の山中に湯の澤地藏と湯の澤鑛泉がある。此の地藏堂の傍には昔高貴の人が殘したと云ふ五輪塔がある。傳說に依れば其の高貴の人は、地方人の來る事を忌んだので忌來市と稱したのが村名の始まりだと云ふ。附近に雄瀧雌瀧の勝がある。

中里村　には袴腰嶽、箏瀧、大溜池、五輪塔、古城址、工藤他山翁の碑等見るべきものが多い。他山翁は弘前の儒者で、早くから中里村に隱棲し、寺小屋を立て附近の子弟を養育したので名高い。小字宮野澤には二樣の盆踊があり一つは近村のものと變りないが、一つは江州音頭其の儘であると云ふ。近江の國は昔から行商を以て聞えた國であるから、多分十三村全盛の頃海から入つて來て殘して行つたものであらう。

相内小泊附近

相内村　相内村は十三潟北岸にある。昔から十三福島城址として名高いが、近年は隣村内潟村と共に先住民族の遺骨發掘等で全國的に其名を知られるに至つた。福島城址は其の所在を知るに苦しんだが、近年内潟村長奥田順藏、福士今泉小學校長等の熱心なる探索から相内今泉兩村間にある事を發見した。之を古文書十三往來（西郡十三潟參照）に照して見るに城門、社寺の跡歷々として指摘し得る樣になつた。

福島城址　相内村實取及露草にある。後白河帝の保元年間に築かれ坂東隨一と稱され數百年間津輕地方文化の中心となり、十三千坊の大伽藍立比び十三港の殷賑と一括して當時既に一萬以上の人口を有した事と思はれる。弘安以後再度の暴風洪水に逢ひ城主安東氏衰滅してからは全く荒廢に歸し今では僅に山林等の間に城址や寺院跡の石垣や土臺石を認めるに過ぎない。

阿吽寺　十三往來は山王坊在住の當時の高僧の筆になつたものと稱せられるが、其の山王坊阿吽寺の小祠は縣下第一の古い建物として今も一里の山中に殘つてる。周圍には寺院跡の土臺石が竝んで、往時の盛賑を偲ばせる。

禪林寺跡　十三往來に『北は深山堂塔を連れ僧坊透なく、圓宗の修學禪林寺の云々とある禪林寺跡は今相内村南端軌道右手の老松の附近にあり、松樹の下には三基の五輪塔の斷片がある。附近の用水堰から門柱と思はれる巨材が掘出された事もあると。

龍興寺跡　相内村字岩井は『後は青山峨々として峰の清嵐梢を鳴らし、前は瀧の水漲り落ちて云々』とある情景と、良く符號するので茲を龍興寺跡に凝してゐる。茲に

ある小祠飛龍神社は山王坊と共に津輕最古の建物である。

唐川城址　安倍氏の居城で縣道から明にそれと首肯される要害の地である。嘉吉三年南部義政と戰ひ破れて小泊の柴崎城に遁れ更に海を越えて矢不來に走つた。其時山王坊、永善坊、實相坊の三僧が隨行した。城址頂上に古井戸があり、金の冑が埋められてるとの傳說がある。

古墳の跡　村社神明宮のある丘陵は古墳の遺跡で大正十二年六月六尺豐の人骨を掘出したのも此處である。人骨は二千年以上經つた先住民族のものらしいと。

權現崎　北津輕郡の西端、小泊港の南方に突出し、東津輕郡の龍飛崎と遙かに相對し小泊灣を抱いてる。懸崖の高い事、絕壁の急な事、眺望の雄渾な事、龍飛崎に優るとも劣らないと云はれてる。小泊村は權現崎の下にある。

道中唄　小泊から飯詰迄の道中唄はジョンガラ節（上川原節で出所は淺瀨石川原だと云ふ）として今も殘つてる。何時頃の作か判明しないが明治以前のものである事は確である。昔の樣を窺ふに足るから玆に記して見る。

奥州津輕弘前在の
在さ下れば小泊村よ
それや村にて色伊達男
晒手拭小肩にかけて
とろり〳〵と山中通れば
登りつめたる釣掛の坂
此處は折戸の思案の坂よ
坂に腰かけ沖眺むれば
沖の大なだ白帆が見ゆる
岩木山には腰雲かけて
私とお前は脇元村よ
四月八日は藥師の參り
藥師參に白旗立てゝ
とろり〳〵と濱端通れば
横に見て通る磯松村よ
一寸腰かけ相内村よ
澤に住まいた坂割太田
とろり〳〵と山中通れば
人も通はぬ七平沖に
傳馬おろしてともつな取りて
とろり〳〵と今泉通れば
村の眞中に大橋が御座る
橋のたもとに茶屋コも御座る
茶屋の娘は氣の利く娘
道中する人みな聲かけて

一服呑まんせお茶上らんせ
お茶がいやなら酒コも御座る
酒は何處よと値を問ひ聞けば
酒は薄市その値は高根
間の新田コはアレア上高根
橋を隔てゝ尾別村よ
とろり〳〵と牧の坂通れば
私の中里世間で知らぬ
酒屋一軒に木綿屋も御座る
寺は二ヶ所に庵寺も御座る
五輪宮川どうでもかもな
隅の宮の澤安じて暮せ
色の深郷田宮八幡よ
大澤内通れば喉川倉よ
下り藤枝見たよに通れば
愛想見たよな金木の村よ
嘉瀨をかけても及ばぬ節は
喜良市小田川瀨戸なり野崎
下の長富中柏木よ
願ひ上げます毘沙門樣よ
下の岩崎で金木組ア止まる

第六節　上北郡

野邊地町附近

野邊地町　上北郡の北方、野邊地灣に臨んだ處にあり郡中第一の大邑である。開町は建武以前らしく、八戸政經が下北郡の蠣崎を攻めた時玆から出船して居り、南部藩時代には北部第一の港として遠く京阪地方とも貿易したものである。野邊地城址は今城内小學校の建つてる處である。公園は町の東隅にあり櫻の名所である。南東二十餘町の太平競馬場は設備良く、年々の競馬に人出が多い。

花鳥號碑　同町常光寺にある。明治九年明治大帝東北御巡幸の際御乘馬花鳥號野邊地町に斃れたので、天皇之を恤み給ひ常光寺境内に葬むつた。地方有志之を惜んで同十一年四月御馬碑を立てた。

馬門溫泉　大字馬門の高原野つきて山起る處にある。野邊地驛から約二里、山を負うた靜かな溫泉である。馬門村は維新の際津輕南部の古戦場で津輕藩死者二十餘名の墳墓は今尙ほ存してる。津輕では勝つた狩場澤、負けた馬門と言つてる。

十符の浦　古歌に良くよまれた十符の浦の地は明でないが、野邊地附近の海濱だと言はれてる。

萬葉集　　讀人不知

陸奥の十符の菅菰七符には
君を寢させて三符に吾れん

爲　家

更にけん賴まぬ風は訪れて
七符淋しき十符の菅菰

等とあり情趣に富んだ地名である。

尾駮の牧　今尾駮は小河原沼の北方太平洋に面した六ヶ所村の小字であるが、昔は附近一帶の原野の總稱であつたらしく、尾駮の牧は昔から有名な牧場に數へられてる宇治川の先陣を爭つた名馬生唼に關し源平盛衰記に「生唼とは、黑鹿毛の馬、高さ八寸、是も陸奥國七戸立の馬、人をも食ければ生唼と名附たりとあるが、之は尾駮の產であると言はれてる。

陸奥のをふちの駒を野かふには
荒こそ增されなつくものかは

讀人不知

泊漁港　上北郡太平洋沿岸の北端にある崎嶇たる斷崖海に迫り、一望際涯なき太平洋に臨んで眺望雄大である。

七戸町附近

七戸城址　七戸町は舊七戸藩一萬一千石三百年の城下で、柏葉城址は町の西方の丘陵にあり今では大部分小學校の敷地となつてる。周圍に原野が廣いので國立奥羽種馬牧場、縣立種馬育成所等產馬に關する施設多く近年三本木と併んで所謂南部駒の名聲を一手に背負へる形がある。七戸の駒踊りは鄕土藝術として出色のものである。

法蓮寺　七戸町から南一里餘、大深内村大字洞内にある。有名な法身國師の開基で寺の南方に法身塚がある。法身國師は眞壁城主に額を割られたのを含み單身支那に渡つて名智識となり歸朝して松島瑞巖寺前の岩窟に座禪してゐたのを最明寺時賴に見出され、後瑞巖寺の住職となつたが、眞壁城主は之を聞いて剃髮し國師の弟子道無和尙となつた。國師は靜寂を慕うて更に此の地に來たのであるが寺には國師が道無を、道無が國師を互に彫刻し合つた木像が殘つてる。

五庵川原　奥羽種馬牧場三浦山の附近にある。法身國師が法蓮寺を開基する前に數年隱れ住んだ處で、當時の基石が今も殘つてゐる。

先住民族の竪穴　七戸町を中心として附近に先住民族の竪穴が非常に多い。七戸史蹟調査會員の手に調べられた遺跡は、盛喜

山の大館、竪穴百餘個を筆頭に十五個所に及んでる。盛喜山だけでも優に二千人の人口を入れたらしいから、七戸町四里四方位に數萬のアイヌが居住した時代があつた樣に思はれる。

天間節　奥羽種馬牧場開設の際近村から男女人夫多數雇はれたが其の内でも天間林村のみよ子が最も美しかつたので、唄に作られ牧場で唄はれたものが、今では南部の代表的俗謠として津輕方面に迄唄はれてゐる。

親父貰てけだ嬶ほしくない
ならば天間のみよ子ほし
ソリヤ又全クダ

壺の石文　多賀に國府を置いた頃、北地の荒蝦夷の地を、貳薩體、都母と云つたが貳薩體は今の上北郡相坂川の以南で、都母は其の以北であつた。都母は壺又は坪とも書く有名な壺の石文は果して何處に建てられたか判明しないけれど、地名や口碑から推せば今の天間林地内、坪川の邊の坪村に建てたものらしい。尤も石文は洪水に流されたとも、又は官役人の取締が而倒臭いので土の中に埋めたとも言はれてる。壺の石文に就いては文献が澤山ある。

山家集　西行法師

陸奥の奥床しくも思ほゆる
壺の石文外の濱風　源　頼朝

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ
書きつくしてよ壺の石文

千曳神社　甲地村地内、古檜の並木亭々たる丘の上にある。之は壺の石文を埋め其上に建てた社で、此の尾上に石を引上げるに多數の人を要したから、石を千引の石と云ひ、社を千曳神社と云ふと傳へられてゐる。千曳驛から約一里半である。

小河原沼　郡の東海岸にあり周圍十四里十四町七戸川之に注ぐ、沼崎驛より數町で達する。明神崎の眺望最も佳であるが、靜寂の景は隨所に見られるので一日の遊覽にふさはしい處である。又水鳥が群來するので狩獵地としては全國的に有名である。附近に姉沼、其他の小湖があり、玉世姫、勝世姫に絡まる傳說が殘つてゐる。

氣比神社　古間木驛の東方十五町下田村大字木ノ下にある。茲は昔の木崎野の牧場で、古來木崎の馬子神堂と稱され、舊六月朔日、十五日の祭禮には隣縣岩手秋田地方から迄馬產家の參詣を見る。

三本木附近

三本木町　七戸の南二里二十五町の處にある。安政二年迄は只茫々たる原野であつたのを舊盛岡藩士新渡戸傳翁が開拓し僅か七十年の間に現在の大邑となつた。軍馬補充部支部があり七戸町と共に縣產馬界の中心をなし、毎年秋季の二歲駒の糶市は出場馬數千頭に及び地方名物の一に數へられてる。此處は又十和田湖遊覽の要路に當り、私設十和田鐵道は東北本線古間木驛から三本木町迄通じ驛には遊覽自動車が、數十臺何時でも客を待つてゐる。

太素塚　開祖新渡戸傳翁を祀る小祠で町の西南方の小高い丘にある。太素は翁の雅號である。茲からは三本木平野を一眸に收め、牧馬の群遊愛すべき情景を展開してる。

相坂孵化場　三本木の南方一里半、相坂川畔にある、年々數十萬粒の鮭卵を孵化放流し、好成績を收めてゐる。

淵澤大銀杏　十和田道沿道の法奥澤村法量字淵澤善正寺跡の大銀杏は地上十五尺の周圍約四丈、幹の高さ約十五間、大正十五年天然記念物として指定された。

蔦温泉　十和田道燒山から一里八町の山中にある。土地の靜寂、湯の清冽を以て名

あるが、文豪大町桂月翁は晩年此地を愛し本籍を茲に移して遂に蔦の土となつた。其の墓は露しげき蔦野の片隅とり、桂の老樹の下、遙かに南部赤倉岳を望む靜かな境にあつて遊子の涙を誘ふ。茲から八甲田山の登山口、東津輕郡酸湯温泉迄は四里半で、途中に谷地、猿倉の二温泉あり、勝景に富むので近年學生其他の通行が多い。縣道にはなつてるが今の處車馬も通らない（東津輕郡八甲田山參照）

十和田湖

十和田湖は新日本八景に選ばれた名勝で、十和田湖八甲田山一帶は更に國立公園の候補地に目されてゐる。青森縣上北、秋田縣鹿角の兩郡に跨り、周圍十五里、海拔千二百尺、四圍に山岳重疊し、其の幽邃なる事其の壯嚴な事、其の變化多い事等に於て他の湖沼の追從を許さない。十和田の勝景は其の門戸たる奥入瀬溪流あつて初めて完成されるのであるが、十和田湖及び奥入瀬溪流は昭和三年四月に天然記念物として指定された。湖中青森縣に屬する御倉、中山の兩半島は十和田風光の粹で日暮崎、千丈幕御占場、自籠入江、島々等の名は既に世間に知り盡されてゐるから茲には一々の叙景を略し、十和田道に就いて記載する。

△奥入瀬口　東北本線古間木驛から十和田鐵道又は自動車約三十分で三本木町に入る。茲から自動車で九里半、奥入瀬溪に沿うて其の勝景を飽かず見乍ら走らせれば湖畔子の口に出る。遊覽船は何時でも客を待つてゐる。湖畔の部落で旅館の最も多いのは休屋である。

△八甲田越　青森市から自動車七里で酸湯温泉に着く、茲は海拔三千尺、八甲田山の中腹で頂上迄は一里に過ぎない。東北帝大高山植物研究所並高山植物園は酸湯の傍にある。酸湯から蔦温泉迄四里半の間は所謂陸奥アルプスの稱ある山地で（東郡八甲田山參照）林相の變化、濕地帶の妙景、猿倉谷地の二温泉等旅情飽く處を知らず蔦温泉に入る。此の間は縣道であるが今の處車馬が通らず徒歩に依るより外ない。蔦から里餘で燒山に出で奥入瀬道に合する。八甲田越えは風景の變化が多いので近年遊覽者が頓に增加した。

△五戸口　東北本線尻内驛から自動車四里餘で五戸町に入る。茲から又自動車道約十里、倉石、戸來等を經て湖畔宇樽部に達する。此の線は昭和三年八月開通した新線である。

△淺瀨石口　奥羽線川部驛から黑石線に乘替へ、黑石町から淺瀨石川に沿うて約十里湖畔瀧野澤に出る。途中温川迄八里の間は自動車が通る。

△小坂口　奥羽線大館驛より小坂鐵道で小坂町に至り、徒歩又は駄馬で約六里、湖畔鉛山に至る。湖上休屋へ一里六町、子の口へ二里十町である。

△毛馬内口　大館驛より秋田鐵道で十八哩毛馬内に至る。大湯川に沿ひ自動車で七里餘湖畔發荷に出る。

第七節　下北郡

田名部附近

下北郡は本州の盡頭に位し三面海に圍まれた半島で下北半島とも斗南半島とも云ふ。斗南の名は、明治二年會津藩主松平氏が茲に移封された時、北斗以南皆帝州からとつて斗南藩と稱したに始まる。田名部町は古くから半島の首府となつてゐた、田名部校の一郭は昔の館跡である。

常念寺國寶　田名部町淨土宗常念寺の本

尊阿彌陀佛は惠心僧都の作と傳へられる木像で、大正四年國寶に指定された。初め國寶調査員は常念寺の寶物八島の屏風を見に來たのであつたが、屏風は失格したけれども、佛像は偶々見出されて國寶に指定されるに至つたのである。

近川開墾地　近川驛附近にある。三十年前北津輕郡の識者佐々木弘造氏の開墾したもので一種の理想境を現出してる。

恐山　貞觀元年慈覺大師の開山した靈場で大殿には慈覺大師作の地藏尊を首として古い佛像が澤山ある。山號は釜伏山菩薩寺と呼ばれ境内百町歩、一百三十六地獄の姿態を現じてゐる。地獄を過ぎれば極樂濱あり、前は周圍二里の恐山湖で、其の落ち口は三途の川となり正津川に注いでる。廻りは八葉蓮華の形をした山に圍まれ、春から夏にかけて靈鳥佛法僧がなくと云ふ清淨の地である。境内所々に溫泉があり、古瀧の湯、藥師の湯、花染の湯、新瀧の湯等の浴場がある。何れも硫黃泉で白濁を呈してゐる。恐山には郡内各地から上られるが、里程は、田名部驛から四里、大湊から三里半大畑から三里、川内から五里半、藥研溫泉から二里半で、田名部からは毎日二回定期自動車が通つてるから、急げば青森からでも日歸りが出來る。恐山湖には東津輕郡野内村横内義桿氏の手で姫鱒の養殖が行はれてゐる。

斗南ケ丘　田名部町から十餘町の處にある。明治三年三萬石に落され、下北半島に移封された會津藩士の一時落付いた處であるが。其後野火から火が移り全燒して燒ケ野が原となつて了つた。此の斗南ケ丘の移住者から次の二名家を出してる。

山川家　次男は東京帝國大學總長から貴族院勅選になつた山川健二郎男（當時十九歳）次女は大山巖大將夫人となつた山川捨松子（當時十四歳）

◇柴家　長男は下北郡長となつた柴太一郎（當時三十二歳）四男は小說佳人の奇遇を著はし東海散士の名で名聲を博した柴茂四郎（當時二十一歳）五男は陸軍大將柴五郎（當時十四歳）

落しの澤　斗南ケ丘燒失後、最も落魄した柴一家は、其後大湊松ケ丘部内の落しの澤の民家に移つたが、村社稻荷神社の拜殿の柱に今も殘つてゐる。

さすらひて身をば落しの澤住ひ

其他の落書は、當時東海散士の書いたものだと言はれてる。柴五郎大將は、當時未だ子供で、使ひの途中に良く田名部町の二本柳鍛冶屋で暖とつたものであるが、先年功成り名遂げてから來遊した際、昔を思出して鍛冶屋の主人に

暖けき宿なつかしみ尋ね來て
昔の冬を忍ぶ今日かな

の一首を贈つた。又た大將が、當時青森縣廳の給仕に雇はれて田名部を立つ際、二本柳常五郎氏養母から二朱の餞別を貰つた嬉しさを忘れかね

世に出づる門出を祝ふはなむけの
嬉しかりしを吾忘れめや

の一首を贈つたそうである。

西通り

大湊村　田名部から西方一里半、昔から安渡の港と呼ばれたゞけあり、灣内更に灣を抱いた天然の良灣である。大湊興業株式會社が巨費を投じて埋立てた波止場は村に不似合な立派なものである。釜伏山が後に聳え海岸の風光にも賞すべきものあるが、要塞地帶の事とて詳述するを許されない。大宇城ケ澤には古城址があり、附近の山中には天狗岩と稱する奇岩がある。

大湊要港部　支村宇田にある。三十五年水雷團を置き、三十八年要港部を開廳した北方警備の根據地として世界的に有名である。

安部城鑛山　川内町大宇川内から二里の山奥にある。田中興業株式會社の手で大正元年採鑛を初め、同十四年二月休山する迄に製錬した鑛石は九百萬噸に上り、精錬の結果は

金二六九貫一六三匁△銀一七、四九八貫
三〇一匁△銅三二、一四二、六一八斤

と云ふ大數に上り、此の價格二千萬圓、會社の純益一千萬圓だと稱されてる。今は大煙突も折れた儘で醜い殘骸を晒してる。附近に西又、大正、岩瀧の諸鑛山もあるが何れも休山の姿にある。

湯の川溫泉　安部城鑛山から更に二里の山奥に湯の川溫泉がある。川内營林署の森林鐵道に便乘すれば日歸りも出來る。泉質は鹽類泉、浴場三ヶ所あり、淋しい靜かな溫泉場である。

蠣崎城址　川内の西方三里、大宇蠣崎にある。一小漁村に過ぎないが、松前藩三百年の基を開いた蠣崎武田信廣の出身地として知られてゐる。

脇野澤村　舊藩時代には船舶の出入も多く繁昌した港であるが今は振はない。明治初年、船で來た鍋島勢に掠奪された事がある附近に辨天島がある。形が鯛に似てるので鯛島とも云つてる。延曆の昔土地の豪族安達小連の女が、征夷の田村麿と契り、其の歸京後焦れ死んで、沖通る船に怪異を見せたので、辨財天を祀り亡靈を鎭めたとの傳說がある。

東通り

夷が岩屋　田名部町から尻屋に向ふ途中田名部から六里の岩屋村にある、石灰岩の大岩道を塞いだ中を剝り拔いて車馬を通してる。此處から尻屋崎に至る一帶の海岸は岩多く崖高く風光の賞すべきものが多い。田名部からの途中の野牛村は砂鑛で知られた處で農務省の砂鑛研究所がある。

尻屋燈臺　田名部から七里、津輕海峽と太平洋を割つて突出てる尻屋崎の尖端にある。茲には自動車も通る。尻矢崎燈臺は明治九年に十二萬圓の巨費を投じ英人バッジー氏に依つて建てられたもので、古い事と塔の高い點では日本でも有數の燈臺である當時米一俵三十錢であつた事に徵しても如何に大工事であつたかゞ窺はれる。塔の高さ九十餘尺、水面からの高さ百五十尺、燈器二を備へ一個千三百萬燭光、暗夜は二個に點火し光達距離は邦里九里である。濃霧の多い處だから外に霧笛の準備もある。明治九年と云へば今から五十餘年昔の事であるが、此の半世紀の間、尻屋燈臺は一夜も缺かさず其蒼白い光を魔の海と稱されてる近海に投げてゐたのである。有名な共産村尻屋は燈臺から一里南の太平洋岸にある。

千軒平　東通村猿ケ森北方一里にある。傳說に依れば昔は民家千を算した繁華の地で千石船も容易に出入した良港であつたが天正、寛永兩度の海嘯で全滅したと云ふ。屋敷跡が今もあり蘭、萬年青が生じて漫に昔を偲ばせる。

白糠港　上北郡泊に接した太平洋沿岸にある。昔白糠武藏の居つた處で、下北郡太平洋岸唯一の良港である。附近の押付澤は泊村と白糠村とで百餘年も前から境界爭ひをした處であるが、近年白糠部落に編入された。

北通り

大畑村　田名部から四里、津輕海峽に面

した第一の大邑である、昔から木材の輸出が盛んで諸國の船が大畑川に林立したと云ふ附近に木の部崎、綴濱等の勝景がある。又正津川には有名な優婆堂がある。恐山から流れて來た優婆像を祭つてゐる。

薬研温泉　大畑川を逆上る事二里で薬研温泉に達する。湯は川床の薬研型の岩から湧くので此名がある。鹽類泉で玉を溶いた樣に奇麗である。大畑から森林鐵道の便がある。

赤川鑛泉　大畑から海岸沿ひに西する事一里の赤川部落にある、泉質は鹽類泉で温度が低いから火を焚いて湧かしてる。

下風呂温泉　大畑から三里で下風呂温泉がある。昔から著名な温泉で、泉質は硫黄泉、浴場は二つある。此の邊の海岸はどの一部分も捨て難い趣を持つた處で、夏の旅には適はしい處である。

大奥村　下北郡の最北端で北海道とは本州中で最も近い處である。鮑の産地として名高い。津輕要塞は大字大間部落にあり、對岸の北海道の二要塞と呼應して完全に津輕海峽を警備してる。

大間燈臺　大間鳥居岬の沖、辨天島にある。大正九年起工、翌十年落成した。高さ七十五尺、三萬燭光である。

奥戸の牧　大字奥戸は古くから開かれた村で、盛岡九牧場の一で寶暦の頃には放牧常に百四五十頭を數へたと云ふ。昔は大間野にも百頭内外を飼養したさうである。

佐井の猿　佐井村は檜の産地として昔から諸國の船が出入し繁昌した村であつて、緣起の古い社寺が多い。佐井の山を中心として住む猿は、本邦天然猿の最北限として天然記念物指定申請中である。

佛ケ浦　佐井村福浦、牛瀧兩部落中間一帶を佛ケ浦と呼ぶ、一つ佛、夷佛、五百羅漢、蓮華岩、極樂濱等の奇岩怪石海岸に亂立し、其數幾十百なるを知らぬ天下の一大奇景である。故大町桂月翁は、此處を日本山水中の化物屋敷と嘆稱し、金剛山の怪、妙義山の奇も之には及ばないとして

呆れ果て驚きはてゝ佛浦

念佛申す外なかりけり

と詠んでゐる。陸路の交通は頗る不便であるが、青森からは夏期數回遊覽船が立つてゐる。

第八節　三戸郡

八戸町附近

八戸町　八戸町は八戸南部藩の城下で、青森弘前に次ぐ大都邑である。町に連續してる小中野、湊、鮫等の濱通りを加へれば遙に弘前市を凌ぎ本縣第二位の都市となるので市制施行の議は屢々地方に叫ばれてる八戸城址は驛附近にある、廢藩置縣の際櫻閣は毀たれて了ひ、今は城址に縣社三八城神社を移し公園としてる。八戸町には此の外長者山公園もある。町内糠塚にある臨濟宗の南宗寺は附近第一の大伽藍である。八戸の朴(エンコウ)は鄕土藝術として出色の者である。

根城址　八戸町の西郊二十町にある、八戸家四代の主南部師行が建武年中築城したもので代々南朝に忠節を盡し二百五十餘年榮えたが、天正年間宗家南部守行の秀吉から十萬石の朱印を得たに反し、根城は知行の朱印を得る事が出來ず、終に破却され廢墟となつた。

櫛引八幡宮　八戸町から里餘、館村大字櫛引と八幡の地にある。南部の始祖光行が貞應元年甲州から遷座したもので、寶物中赤絨、卯花絨、小櫻絨、萠黄絨、淺黄絨の五種の甲冑が大正四年三月國寶に指定され

た。

矢倉の懸崖　櫛引の邊を流れる馬淵川の懸崖高く聳ゆる處を矢倉と云ふ、昔八戸藩士大槻某の妻が愛妾の懷胎を妬み夫の參勤交代不在中之を矢倉の絶壁に突落して慘殺した爲、其の死靈の祟りで大槻家が滅亡したとは界隈に語りつがれてる物語である。

新井田川　新井田川は源を岩手縣に發し八戸町の東を通り湊に注ぐが其上流及支流は頗る名勝舊蹟に富んでゐる。

◇島守溪　是川村の地内にある。紅葉の勝地として有名である。

◇脫龍洞　八戸町の南三里の階上村大字金山澤邊は一山石灰岩から成つてるので奇景多いのを以て聞えてるが、此の金山澤に脫龍洞又は蛇拔穴と稱する奇勝がある。更に其の上流二里餘の小松倉は大理石を産するので名あるが玆にも小脫龍洞の奇觀がある。

◇閉伊穴　大館村大字松館の溪流は之又全山石灰岩から成り兩岸白屏風の如く隨所に奇景を藏してる。閉伊穴は岩手縣閉伊郡迄續いてるとて此名がある。

◇カン子のお宮　新井田川の下流湊の附近大館村鹽入にはカン子の傳說が殘つてる。カン子は引く手數多の中から一人の男に操を守つたので失戀の男がカン子を捕へ新井田川に生埋にした。爾來同所から良く火の玉が飛ぶので里人はカン子が出た〳〵と怖れる樣になつた。此處は磐城セメント會社の工場地帶に當るので同社でカン子のお宮を建てゝ亡靈を弔つた

◇新井田城址　大館村大字新井田の新井田川畔にある。根城が破却されてから八戸氏之に移つたが寛文四年遠野に移つた後は廢棄された。

濱通り　小中野、湊、鮫から太平洋の沿岸一帶を濱通りと云つてるが、太平洋の巨濤を受けてる海岸の風光には賞すべきものが多い。尻内驛で東北本線から分岐してる久八鐵道は既に岩手縣八木驛迄開通してるので探勝には便利が良い。

◇館鼻　湊河口の東岸外洋に面して突立つてる丘を館鼻と云ふ。上に鄕社御前神社があり眺望雄大である。一里半の山中に金吹澤鑛泉があり近年遊覽者が多い。

◇蕪島の鷗　鮫村の傍、海岸から三町の處にある。鮫浦岸は風光明眉であるが、蕪島の頂上の展望は一層壯麗である。天然記念物に指定されてる鮫の海れこは蕪島に毎年群來する鷗の事で其數は幾千萬なるを知らない程である。鮫の東方十餘町の處に東洋捕鯨會社鮫事業場がある。

白銀ころし　鮫湊を中心に白銀ころしと云ふ地方唄がある。

白銀育ちで色こそ黑い
味は大和のつるし柿
行けば鮫村戻れば湊
こゝは思案の湊橋

鮫と湊の間の狐

私も二三度だまされた

◇天女ケ窪　鮫の東十町にある。秋草咲く頃は一山五彩を放ち麗麗比ない、近年迄競馬場であつた。

◇大久喜　鮫から階上驛に至る海岸は、惠比須、白濱、大須賀、深窪、種差、大久喜金濱等何れも巨岩と白砂と巨濤から成る壯嚴そのものゝ連續であるが分けても種差驛と階上驛の間が良く、大久喜の怒濤は近隣第一の壯觀だと云はれてる。

應物寺　八戸の南四里階上岳の中腹寺下村に其の遺跡がある。緣起には聖武天皇の御宇大僧正行基が創建したとあり爾後幾變遷を見たが、享保年中津梁と云ふ沙門之を再興し境内に五重塔と燈明臺を作つた、燈

明は船頭達の八戸入港の目標となり便利が多かつたので南部公黠燈料として扶持を與へたと云ふ。史蹟名勝天然記念物として指定方取運中である。

五戸町附近

木村館　五戸町の中央に殘つてる館跡を木村館と云ふ。築造の年代は詳でないが木村氏は地方の豪族で南部に仕へ玆に居城し南部氏の盛岡に移るに及び附隨して移つたと傳へられてる。

貝岩　野澤村野澤川にある。河面約三町の間水底の岩に種々の貝が含まれてゐる。

三戸町附近

三戸城址　三戸町の東留崎村地内にある始祖南部光行糠部に入つて最初に居つた處とも傳へられるが、それよりも三代の孫實光、平良崎から移り築いたものであると云ふ方が確らしい、慶長四年信直福岡に移つて廢城となり、今は僅に俤を止めるに過ぎない。山上に縣社糠部神社がある。

唐馬の碑　三戸町大字木平にある。天和二年、將軍綱吉は南蠻人の獻じた波斯馬を南部に下附したので之を名久井岳の北麓住谷野に放つたが斃死したので此處に埋葬し一本の松を植ゑたに、枝が南へ〳〵と伸るので故郷を戀ふ爲であらうと厚く弔ひ馬頭觀世音と稱した。寛保三年御野馬奉行石井氏が此の碑を立てた。

住谷野の牧　住谷野の牧は上北郡尾駮の牧と並び稱され古來名馬を出した牧場で、今の三戸地方七八ヶ村に渉つてゐたものらしい。宇治川先陣で名馬い賴朝の愛馬磨墨は此處から出たのである。

長慶天皇行宮址　三戸町の東里餘、名久井岳の中腹長谷にある。北畠守親天皇を陸奥國に迎へた時、擁護を根城の南部氏に求めた。其處で南部信長は長谷に行宮を造營して守護した、根城を關門にし名久井岳を背にした屈境の場所で加ふるに風光に富む勝地である。其後足利に知られたので危險を感じ天皇を密かに浪岡に遷し、表面には崩御あらせられたと見せ佳谷野竝に王ケ崎で大葬を行ひ、塔石を建て有末光塚と稱したと傳へられてゐる。然るに近頃、長谷寺が崩御の地で有末光塚は御陵であると同地方の掛端晉吉氏等に依つて力說されてゐる。

法光寺　名久井村大字法光寺、名久井岳の北側の中腹にある。建長年間肥後の禪僧橘指城、山上に草庵を結んで居た時、最明寺時賴の知遇を得千石の寺錄を得て現在の所に作つたのが法光寺である。爾來數度火災に罹り寶物も過半燒失したが猶ほ珍重すべきものが澤山ある。有名な西有穆山氏も此處に住職をした事がある。界隈第一の名刹として有名である。

馬淵川　馬淵川は岩手縣から流れ來て湊附近に注ぐ本縣第二の大河で、隨所に勝景を見せてるが、分けても名久井岳附近に美景が多い。櫛引附近矢倉の懸崖は前に書いた處である。

來滿道　三戸町から斗川、田子、上郷を經來滿峠を越えて秋田縣鹿角郡に出る山道を來滿道と云ふ。山深いだけに道も險惡であるが沿道には熊原川の溪流が所々に勝景を見せてる。

若宮八幡　上郷村にある。天正十九年九戸政實の亂の時、政實は敗れ其の落城も近づいたので息龜千代(十一歳)を秋田に落さんとし家臣佐藤外記に之を賴んだ、外記は重圍を遁れ此處迄來た時急に變心し、何氣なく石に腰掛けてゐた龜千代を背後から鎗でさし首を刎れた。里人之を憐み龜千代を祀つたのは若宮八幡である。

本縣の古木

口碑に彩られた本縣の古木

百年以上、一千年を超えたもの四百餘本

◇

吾等の生活は木と密接の關係があり、木に倚つて吾等の日常が如何に惠まれてるかが、吾等の體驗が之を證據立てる。

斯樣に吾等の生活が直接木に倚ることの少くないことは、經濟的に樹木の貴重なることを物語るものだが、一面この木はまた吾等の精神的方面にも、極めて大切な刺戟を與ふる、即ち老樹古木の如きは、吾等の精神的敎養の糧として、決して忽がせにすべきでないことは、靑史を繙くものゝ多く經驗する所であらう。

◇

即ち此の意味に於ても、老樹古木の尊貴なることは言を俟たない所であり、名勝舊蹟などゝ共に之を保存し、成るべく永き生命を保たしめたいものである、特に口碑に彩られた老樹、傳說に育ぐまれた古木は、藝術的にも價値あるものと思ふのである。

◇

これらの傳說や口碑が綾を織り錦を裝うて、樹齡も年代も知るを得ぬほどの老樹古木を、いやが上に怪奇的に導かぬでもないが、其所に言ひ知れぬ興趣も湧いて却々に棄てがたい、今こゝに揭げたものゝうちでも、或は壽を完うし鄕土の誇となつてゐるもあらうし、心なき樵夫の斧にかけられて今は此の世にないものもあらう。

◇

大正六年十月の頃、靑森縣廳で縣下の老樹古木を調べたことがあるが、當時の記錄を見るとその一百歲を超えたもの凡そ四百十本、中に一千年以上のもの二十三、年輪を知ることの不可能なもの十八、百年以上百五十九、三百年以上百六十八、五百年以上四十二といふ數になつてる、即ち是等の老樹古木を有する土地の人は、各その木に倚つて經濟的に精神的に惠まれてるに違ひない、即ち當時の記錄に依りて、その由緖沿革の詳かなものを玆に揭記することゝする。

樹齡一千年を超えしもの

樹種	周又は徑	樹高	所在地	所有者
五葉松	徑四尺	二十間	東郡横内	八木橋源四郎
公孫樹	同十尺	七間	西郡深浦	圓覺寺
同	同十尺	七間	同	七戸　覺藏
杉	同七尺	九間	同	圓覺寺

來歷　今を去ること一千年以前坂上田村麿將軍が觀音堂造營の記念として植ゑたるものなりといふ遺難船あるときは其の樹上に一點の燈火あらはれ夜暗中方向を知らしむと言ひ傳へ頗る信仰せらる。

杉	周二丈	二十間	中郡岩木村岩木山	神社
同	徑五尺	十間	南郡浪岡	八幡宮

來歷　貞觀七年勅使平安砂門大僧都慧雲といへるもの來りて社殿を再建し緣起を錄して之を納め當社の面目を改めたる當時記念樹として杉檜の二本を社殿の兩側

に植付けたるものなりといふ其の内一本は枯損じて存せざるも後にて繼木せし小扁柏一本あり現在の杉も老杉なれば樹幹洞となれり。

刺楸徑五尺　十間　南部浪岡　八　幡　宮

來歴　前と同時代の古木ならんと推測せられ樹幹洞にして中に七八人を容るゝに足る。

公孫樹徑四尺餘二十間同五郷村大字北中野

來歴　花山院同地御巡歴の際植付けられしと云ひ又坂上田村麿將軍征夷出陣の際植付けしと傳ふ、今より三百年前即ち天正年間藩祖爲信公津刈郡を一統して堀越城に祝宴を張られし時謠ふものなりとて浪岡の源常林の銀杏の木は『枝は並丘葉は黒石の花は堀越城に咲』と唄ひしと津輕記に見えたる由なり其の頃よりの大木として世間に知られたるものなれば其壽を算ふる時は恐らく一千餘年を經たるものならん。

杉(七本)徑四尺餘二十間南郡山形中野神社

檜　同四尺餘　十間同　同

栗　同五尺餘　五間同　同

欅　一丈　二十間南郡大光寺保食神社

來歴　往昔大光寺城のありし頃よりのものとして傳へらる三十三觀音堂の境内にあり。

杉　周三十三尺三十五間南郡大鰐大字三ツ目内

來歴　口碑の傳ふる所によれば八幡大神の來光せられし神木なりとて今尚ほ樹下に八幡大神の祠あり村民の信仰深し。

杉周二丈餘十六間　下北郡東通九十五番社

杉　同　十九間　同　不　詳

同　同　十八間　同　同

同　同　十七間　同　同

欅周一丈餘二十五間三戸郡上郷岩間六右衞門

同(五本)徑五尺八十尺　同郡戸來三嶽神社

同(三本)同　同　官　有

山毛欅　同　百尺　同　石上牧場

樹齢九百年を超えしもの

公孫樹徑七尺餘二十五間西郡赤石高倉神社

來歴　高倉神社は津輕三十三觀音の一にして善男善女の信仰厚く産婦の乳少なきものは此の銀杏に祈請するとき乳量を增すと傳へらる。

同八百年を超えしもの

欅　徑六尺餘十七間　西郡深浦　圓覺寺

槻　周十六尺百二十尺三戸上郷　大向仁八

杉　同十二尺百五十尺同　村社　有

同七百年を超えしもの

公孫樹徑四尺二十間　東郡横内　蓮仲庵

杉　同十尺八間餘　西郡大戸瀬　不　詳

公孫樹周二丈餘百八尺南郡大鰐大字居士居

杉　同三丈餘百十尺　三戸郡豐崎七崎神社

同　同　百八十尺　同

同　同十八尺百五十尺同　同

來歴　承安年中僧行海といへるもの巡錫して同村に至るや七崎神社にて密法を執行し示視を蒙ること數次行海欣喜措く能はず言ふやう吾諸國を行脚せしも斯かる靈地あるを聞かずと依りて其の蹟を存せんが爲め境内に天の七曜星に象り七本の杉樹を植ゑ其のうち右の三本　成育して亭々空を衝くの慨あり俗に稱して『神の木』と爲す行海又當時一堂宇を建て寶照山普賢院といひ今尚存す。

同五百年を起えしもの

栗徑七尺　十七間　東郡新城　八　幡　宮

杉同五尺　二十間　同郡西平内大字浦　田

やちたも同六尺餘十三間西郡稻垣佐々木之亟

杉　同四尺餘十四間　南郡浪岡　官　有

來歴　文永、建治の頃近衞其通公の女福姫君の此町に來り黄を染めし時此杉の葉を採り楊枝に用ゐたりと傳ふ故に村人今に至るも鐵漿岱の楊子杉と呼べりと口碑に遺れり。

杉　徑四尺餘二十間　南郡浪岡　八　幡　宮

公孫樹同　同　同　對馬豐五郎

同　同　同　同郡藤崎　堰　神　社

欅　同九尺餘十二間　同郡尾上　愛宕神社

來歴　天正十三年津輕爲信公淺瀬石城主千德大和守父子を討伐せし時本陣を此所に置き軍旗を欅上に揭げたりと云ふ今は南に面せる部分は枝枯れ根元は洞となり莚三枚を布くべし俗に神木と稱す。

桂　徑七尺十間　南郡尾崎　八　幡　宮

杉同六尺餘二十二間同郡石川　乳　井神社

同同七尺　同　同　同　同

同同八尺　同　同　同

同同四尺餘同　同　愛宕神社

同同四尺　同　同　鹿島神社

桂周二丈餘百尺　同郡大鰐　大字大鰐

來歴　口碑の傳ふる所によれば肥前の長崎弊城の宮城野陸奥の大鰐に各一本づゝありて恰も萩に似たる花を咲かすに因みて『萩桂』といひ日本三名の一と稱せらる今は石欄を其傍に建て鐵鎖を廻らして保護しつゝあり。

公孫樹周一丈餘九十六尺　同　大字居士居

槭徑四尺餘八間　北郡飯詰　官　有

來歴　口碑に傳ふる所によれば百八十年前同村大洪水の際流失して現今の位置に止まり生育したるものなりと一本木といひ行路者の道しるべ又は休憩する所となり居れり。

公孫樹徑四尺餘十三間　北郡中川高橋多助

同周三十四尺七十二尺上北郡七戸高田耕一

花柏同十一尺十五尺三戸郡八戸大字中居林

公孫樹同三十尺　百尺　同郡大館掛端龜吉

梅同十尺　十五尺　同　堀谷勘次郎

來歴　口碑によれば元弘年間南朝の臣漂浪して玆に來り居を構へ植栽したるものなりと現在の木は元ありし臥龍梅の枝に附根し成育したるものにして同樹は七八年前に幹老朽し其の蹟のみ存せり。

梅周十二尺　二十尺　同　在家市太郎

來歴　口碑によれば元弘年間南朝の臣落莫して來りて玆に居を卜し植付たりと。

公孫樹周十五尺六十尺同郡下長苗代河村潮

欅同二十三尺餘六十尺同郡名久井工藤覺藏

同同三十四尺二十尺(枝下)同郡中澤月山神社

同同十六尺餘九十七尺　同郡猿邊藥師堂

同同十五尺百五十尺　同郡上郷佐藤浪間

欅同二十五尺百十四尺同郡平良崎諏訪神社

同同十三尺百八十尺　同　同　十三神社

同同十七尺餘百二十尺同　同

同同十五尺餘百八尺　同

樹齢三百年を超えしもの

杉徑四尺十六尺餘　東郡平館　村　有

高野槇同五尺十五間　同　新城　金峰神社

公孫樹同六尺六間　同　同

しな　同五尺餘十二間同　同

さいかち同七尺八間　同　同

赤松同四尺餘十七間　同　同

公孫樹同四尺餘五間　同　東岳　大字宮田

來歴　古來乳量少なき婦人にして此の樹を信仰せば量を增すべしと傳へられ今尚信仰するもの多し。

杉徑五尺十八間餘　西郡赤石　國　有

公孫樹同十三尺十間餘同郡北金澤　不　詳

同　同五尺十五間　中郡堀越　村　有　地

剌ひさぎ同五尺十五間同　同

栃(七葉)同四尺餘十三間同郡小栗山工藤逸郎

杉徑六尺餘二十間　中郡岩木大字五代

同(二本)同五尺　同　同　齊藤法善

杉徑五尺二十間　中郡岩木村高照神社
公孫樹(二本)同十五間同　同　玄德寺
柳　同五尺餘十五間　同　船水村社
たも同四尺十四間　同　大川村社
公孫樹同　十五間　同　同
松　同　同　中崎村社
槻　同　同四尺餘　同　同
杉(二本)同五尺十間　同郡碇野岩見山神社
來歷　同神社創建の記念として植栽せりと傳ふ。
公孫樹同四尺七間　同郡相馬中澤清十郎
杉　同四尺餘十五間　同郡駒越大字兼平
同　同　十二間　同　國　有
同　同　十三間　同　同　三上友吉
欅　同四尺　十間　同　稻荷神社
公孫樹同一丈餘十五間南郡黑石
赤松　同　十三間同　黑石小學校
松　徑四尺　十二間同郡浪岡　有馬興慶
來歷　應永正長の頃北畠氏浪岡在城の當時此の處に娛樂園の如きものを設置したる頃の松なりと傳ふ其後津輕家の世となり同村有馬興慶の祖先なる茂右衞門之れを所有し同家飼養の名馬死せる時其の下に葬り堂を建て馬頭觀音と崇め今日に及べり幹は根本より五尺ばかりにして四股に岐れ最も珍奇の狀を呈せり。
槻　徑五尺　二十五間　同　玄德寺
來歷　源三位頼政の後胤此の地に來り天正十三年堂宇を再建し當代まで十五世なりと創立の遠き推して知るべし而して該樹を植ゑし年代は不明なるも天正年間既に此の樹の繁茂せりと傳へられたれば樹齡約七百年以上にもなるべしと老人の口碑に遺れり。
たも徑四尺餘十五間　南郡十二里觀世音
さいかち同四尺不詳　同郡田舍工藤四郎兵衞館
欅　同　同　神明宮
槻　同六尺十間餘　同郡中郷高木仁左衞門
同　同四尺　九間　同　葛西甚五郎
刺ひさき同五尺餘十二間同郡山形稻荷神社
杉　同四尺　十六間　同　同
楓　同四尺　八間餘　同温湯　藥師堂
來歷　天正十九年溫湯溫泉發見當時湯の神として同所藥師尊を安置したるは全く世にも稀なる此珍木あるが爲めなりと傳へられ藥師尊の靈木として三百餘年來村民の信仰する所たり因みに此の樹を同寺開祖榮運禪師には碧巖楓と命名せりと云ふ後ち村民は巖割楓とも稱せり。
杉　徑　五尺　南郡溫湯　藥師寺
來歷　溫湯村草創以前よりありと云ひ傳へらる岩中に自然生じたる老杉にして八十歳の老人が若き時と少しも變化なしと云ふ當時開祖榮運禪師は珍奇木と命名せりと傳ふ後人また岩割杉と呼べり（記者曰く該樹は矮小なれども二百五十年の樹齡を保てりといふ）
同　徑五尺二十三間　南郡山形大字二庄内
同　同五尺餘二十一間同　同
榎　同四尺餘十一間　同　大字板留
杉　同　十間　同　同
欅　同　二十間　同郡猿賀　清藤盛美
杉　同　十間　同郡中佐渡　不詳
公孫樹同五尺餘十七間同郡尾崎　齊藤列樹
杉　徑四尺餘二十三間　南郡尾崎　八幡宮
同(二本)周八尺二十五間　同
同　徑四尺餘九十五尺同郡町居　熊野宮
同　同　百尺　同　同
同　同四尺　同　同

來歷　溫湯村草創以前よりありと云ひ傳へらる岩中に自然生じたる老杉にして八十歳の老人が若き時と少しも變化なしと云ふ當時開祖榮運禪師は珍奇木と命名せりと傳ふ後人また岩割杉と呼べり（記者曰く該樹は矮小なれども二百五十年の樹齡を保てりといふ）
『善い哉汝に一子を授けん汝神社の門前に杉木を植ゑ永く崇敬せよわれ其の杉にとゞまりて世の子なき者をして幸ひせん』と爾來今に至るまで信仰するものが多い。
梨　徑四尺　六十間　南郡　大澤清藏
杉　同五尺餘二十間　同郡石川　乳井神社
同　同　同
同　同四尺餘十九間　同
同　同五尺餘二十間　同
同　同四尺餘十九間　同
同　同　同
同　同五尺餘二十間　同
同　同四尺餘十九間　同
同　同五尺餘二十間　同
同　同四尺餘十九間　同
同　同　同
同　同五尺餘二十間　同
同　同四尺餘十九間　同
同　同五尺餘二十間　同
同　同　十八間　同　八幡館神社
同　同四尺　十七間　同
同　同　同
公孫樹同三尺餘十六間同
杉　徑四尺餘十五間　同　大澤神社
同六尺餘十六間　同　辨天塔
同五尺餘十五間　同
同　同四尺餘同　同　熊澤神社
同　同五尺餘二十間　同
公孫樹徑五尺餘二十間南部　熊澤神社
あらゝき同三尺四間　同　同
杉　同四尺　十五間　同　鹿島神社
同　同　同　同
同周丈四尺九十尺　同郡大鰐大字居士居
桂同二丈餘　十一間　同　同郡藏館　大圓寺
來歷　文龜年中大圓寺先權大僧都隆善上人植栽せりと傳ふ。
根徑四尺餘　十六間北郡板柳　同
やちたも同　十一間　同　海童神社
はる楡同　七間　同　龍測寺
同　十五間　同　八幡宮
同　同　同　工藤文作
縮たも同　十二間　同郡武田　不詳
杉　同　二十三間　同郡六郷　八幡宮
同　同　同郡飯詰新岡永太郎
欅　同六尺餘十三間　同郡中川　熊野宮
同四尺餘十四間　同郡武田　般若寺
同五尺餘　十間　同郡板柳　大善寺
杏　同四尺餘十五間　同　稻荷神社
同五尺餘十二間　同　大澤神社
同四尺餘十五間　同　辨天塔
公孫樹同　十二間　同郡武田　般若寺
同四尺　同　同郡中川高橋五三郎
同　同四尺餘　十間　同郡中里井沼益太郎
來歷　井沼氏祖先が四十二歳に當れる時除厄記念として植栽せりと傳ふ、
杉　周十六尺百六十尺上北郡野邊地　八幡宮
榎　同十四尺九十尺　同郡甲地　久保久松
公孫樹同十二尺同　同　高田龍左衞門
槭　同十三尺六十尺　同　小林市之助
槻(二本)同二十尺百二十尺同郡天間林官有
來歷　舊藩時代行人の目標として植ゑしものゝ如く俚俗一里塚と稱ふ道路兩側に相對せり。
公孫樹周十二尺六十尺上北郡七戸　金見司
杉　同十三尺四十二尺　同　青光寺
同十四尺　百二十尺同　盛田庄兵衞
同十四尺　百二十尺同　藥師堂
同十九尺　百八尺　同　濱中幾治郎
同(三本)同十六尺七十二尺同　瑞龍寺
ひさぎ同二十四尺五十四尺同　同
樅　同十三尺九十尺　同　同
公孫樹同十八尺六十尺　同　同
杉　周十四尺　二十間　七戸町後川原
外に樅、杉、槻各一本づゝ
槻　同二十七尺十間　同町越後濱中幾次郎
杉同二十八尺百尺上　北郡浦野館新館神社
外に杉一本
シボジ同十六尺十三間　法奥澤村澤田高橋

外にシボジ一本
赤松周二十尺十五間　奥瀬村　十和田神社
杉同十五尺七十尺　上北郡四和村　傳法寺
栃　徑七尺六十八尺　下北郡大畑深山神社
外に栃一本又同村大案寺に杉二本
椈　周二間　七間　八戸町　雷　土
槻　同十四尺二十尺　湊町濱通寺戸政之助
栃　同四間五十尺　三戸郡階上　野村とわ
杉　同二間七十尺　同　村　正部家
公孫樹同二十尺七十尺　同　村　上澤運吉
槻　同十六尺　七十八尺　館村里澤下斗米
欅　同十六尺七十尺下長苗代村河原木富次郎
榎　同十四尺六十尺　同村惡虫後村圓次郎
公孫樹同二十三尺二間北川村斗川川村左藤太
扁柏同十四尺九十尺　名久井村　平神社
杉　同十六尺三十尺　同　村　法光寺
欅　同十五尺枝下十五尺中澤上村一山大七
外に同村に刺ひさぎ二、椚、桂、杉各一本
杉　同十七尺二十間　留崎村梅内藤部神社
槻　同十五尺二十間　猿邊村蛇沼　藥師堂
榎　同十四尺　十間　上郷村飯豐中村熊吉
公孫樹同十三尺十五間　向村小向　正壽寺
欅　同　間　二十間　平良崎村　諏訪神社
楢　二間　四間　野澤村　三嶽神社
外に楢一本刺ひさぎ一本
欅　徑四尺　八十尺　戸來村　木村武次郎
同　同四尺　七十尺　同　村　金澤　文八
根　同四尺五寸十五間　公園西の廓弘前市
此外同公園内に根三杉一、松一羅漢柏一
欅一公孫樹

樹齢百年を超えしもの

たも徑五尺　二十間　東郡油川村　熊野宮
しなのき同四尺十五間　同　稲荷神社
赤松同四尺二十間　西郡赤石村迦愚智神社
杉同四尺餘　七間　同郡岩崎村　國　有
此外同地に杉四、欅二
楢　徑四尺十間　同郡中村稲荷神社
此外同村深山神社に楓一、香取神社に杉一
杉同四尺餘　十一間　同郡鳴澤高倉神社
此外同社に同一菩提樹一
同　同四尺餘　十五間　同郡越水高倉神社
胡桃同五尺餘十五間　同郡柴田金山彦神社
此外同社にハルニレ三本同村高橋定吉に
欅一本
たも同四尺　十間　同郡柏村　八幡宮
公孫樹同五尺餘　十五間　木造町中學校
來歴　津輕政信公新田開設の際同所に假
陣屋を構へ開墾に從事せしとき手植せし
ものなりといふ。
やちたも同四尺餘十五間同郡出精村山口又次郎
柳　同四尺餘　八間　同郡下車力八幡宮
杉　同四尺　十五間　中郡清水村廣野神社
同　同四尺　十五間　同　村　久渡寺
根　同五尺半大間同郡千歳村相馬彌次兵衛
やちたも同四尺　十四間　同村　藤田勇次
杉　同五尺二十五間　同郡西目屋鹿島神社
刺ひさぎ同五尺半十三間同郡田代共葬墓地
欅(二本)同六尺十四間同郡高杉村小島春七
來歴　庚申塚の塚にありて昔より此樹を
伐る時は必ず神の祟ありとして伐採する
ものなし。
杉　同四尺　十七間　同　村　社
柳　同四尺　七間半　同郡碇野村中持
此外同村鬼神社に欅一、藤田申松に同一
杉　同四尺　十四間　同郡駒込　小松友吉
たも同四尺十五間　同村一町田　國　有
たも周一丈二尺十間　南郡十二里村八幡宮
此外同境内に公孫樹一、又同村柏木堰に
公孫樹一
赤松同一丈五尺十二間　南郡山形村　溫湯
來歴　寛永年間花山院中納言藤原忠長卿

御手植の松にして今は唯二本のみ殘れり昔三の松に鶴の飛來りて休みしより鶴の松と呼べり又一本は龍の天に昇らんとするが如き形なるを以て騰龍松と呼べり此二本は昔より村民の尊重し來りしものなり。

此外南郡には藤崎村鹿島神社に榎二田舍館村に刺ひさぎ二、尾上村に欅一、赤松一、町居村に公孫樹一、杉一、竹館村に公孫樹一、杉二、刺ひさぎ一あり。

やちたも徑尺半二十間北郡七和村三上與作來歴　七八十年前頃此の木より木像の神體七個一度に顯はれしを名けて愛宕神社とす其後乞食のため六個盗まれ目下一個なれども小社殿を建設安置せしめ毎年陰曆六月二十三日祭事し參拜者も多少あり此外同郡には鶴田村にやちたも一、長橋村にヘルニレ二、猶此外數本あり。

枝垂櫻周十尺　二十尺　野邊地　西光寺
來歴　言傳に依れば同町の舊家野坂勘左衛門初代の母元祿の末年頃其愛翫せる盃栽の櫻を移植したるものなりと云ふ爾來二百餘年三回の火災に逢ふを不思議にも枯死せず古幹今猶盃栽樹の俤を見るべく垂枝二十餘坪を翳り花時の美觀大に賞すべし。

樹齢推定し難きもの

楓徑七尺　十一間　東郡瀧内　奥崎甚吉
たも同四尺餘五間餘同郡蓬田　八幡宮
欅　同五尺十五間　西郡深浦　圓覺寺
同　同四尺餘十四間　同　同
同　同　同　同
同　同　十九間　同　同
同　同　十三間餘同
同　同　十六間　同　同
松　同四尺餘十八間　同　同
やちたも同五尺四間　北郡六鄕大字胡桃館
同　同　同　同　同
同　同　同　同　同
はる徑八尺餘　六間　同　同
杉　同　四尺餘三間　同　大字野中
公孫樹二十尺六十尺　上北郡藤坂　官有
同　同二十六尺五十尺同郡百石　林萬助
來歴　俚俗に弘法大師枝を折り挿したものなりといへり。
杉周二十尺　二十五間　弘前　官有
右の外一千年に近い老大木や由緒の深い名木澤山あるが同を追うて紹介する事にする、而して樹齢の推定し難いものといふも專門家が見たならば直に大概の見當がつくであらう弘前の杉は西茂森町といふから多分長勝寺の附近にあるものらしい。
松　三戸郡三戸町　不詳
來歴　同町黄金橋西方關根にあるので一名關根の松と云ふ、高さは丈餘に過ぎないが東に十間西に五、六間其形容恰も臥龍の樣である、樹齢は推定し難きも南部公庭園より此所に移植したものと傳へらる。

郡市別一覽表

郡市別	千年以上	五百年以上	三百年以上	百年以上	不詳	計
東郡	一	三	七	三	二	一六
西郡	三	四	二	二五	七	四一
中郡	一	—	一九	二三	—	三三
南郡	八	一四	五四	一八	—	九四
北郡	—	二	一七	二六	五	五〇
上北	一	一	二八	二三	三	五五
下北	四	四	四	九	—	一七
三戸	五	一八	二八	三七	—	八八
弘前	—	—	九	六	一	一六
計	二三	四三	一六八	一五九	一八	四一〇

縣外に活躍せる縣人

あの部

氏名	職業	出身地	現住所
阿部魁	旅行案内社員	弘前市	東京府下中野町四ノ一八四
阿部舜山	倍貿易商	弘前市	東京府下六郷村觀乘寺
阿部友一	會社	弘前市	東京市外下目黒九六六
阿部慶一	官員	弘前市	東京日本橋區吳服町　帝國生命保險會社
阿部修四郎	東	北、七和村	東京帝室林野局
阿部規秀	歩兵少佐	北、七和村	熊本陸軍教導學校附
阿部義宗	青山學院中學校長	弘前市	東京市外青山南町七ノ一　青山學院構內
阿部金藏	山口縣通譯囑託	青森市	下關市丸山町一九七五
阿部勇吉	郵便局長	弘前市	北海道渡島國砂原郵便局
阿部清作	農園監督	中、清水村	朝鮮熊岳城下野農園
阿部健太郎	實業	北、七和村	加州ロスアンゼルス日本領事館（氣付）
阿保淺次郎	辯護士	中、和德村	東京市牛込區原町一丁目五〇
阿保銀次郎	請負業	南、	札幌市南十一條西七丁目
阿保寅之助	木商	南、尾上村	北海道帶廣町南二條四丁目一
天城篤治	大使官二等書記官	三、八戸町	白耳義日本大使館
天城泰	中學校教諭	三、八戸町	土浦中學校
天野文祗	無職（元司税官）	三、八戸町	東京市外淀橋町柏木三四二
天內萬助	力士（大ノ里）張出大關	南、藤崎町	東京市本所區緑町港川部屋
安積伊之助	辯護士	三、	東京市麹町區飯田町四ノ二

安東貫一	工場主	（弘中辛）	東京市外田端六八
秋元廉作	農業	西、稲垣村	北米イダオ、レクセンブルグ二六四
秋元元作	檢事	西、中村	秋田區裁判所檢事局
秋元保一	大阪遞信局經理課長事務官		大阪市北區芝田町
秋元卓一	敷香評議員議長	弘前市	樺太敷香郡敷香村本通南二丁目
秋元正規	實業	西、稲垣村	在米國
秋元東馬	醫師		獨逸留學
秋元猛四郎	豫備役海軍少將	弘前市	東京市麻布區霞町一九
秋村潔	內務省社會局勞働部監督課屬	青森市	東京市小石川區大塚坂下町四〇、四號通
秋田德三（雨雀）	藝術家	南、黑石町	東京府下雜司ヶ谷二二
秋谷竹三郎	大成館教科書編纂	東、油川町	東京府下中野町本郷五四五
赤平美要	帝國興信所調査課夜間主任	東、蟹田村	東京市京橋區櫻橋際帝國興信所
赤平武雄	東京帝國大學講師	東、後潟村	東京府下瀧野川町西ヶ原二九一
赤石定藏	臺灣日々新報社取締役顧問	弘前市	東京市牛込區矢來町六七
淺石虎三郎	保險會社支店長	三、三戸町	仙臺市大町一ノ九〇
淺水成吉郎	第四高等學校柔道教師	三、八戸町	金澤市六斗林三丁目三〇
淺岡盛	繩莚商	弘前市	函館市東濱町
淺田良逸	近衛師團司令部附少將　男爵	弘前市	東京市牛込區市ヶ谷富久町一四
淺利考爾	東京高等商船學校教授	青森市	東京市赤坂區青山高樹町一
淺井礼	臺南供託局長		臺灣臺南地方法院官舍
淺山正路	中學校教諭	三、八戸町	札幌第一中學校
荒木渭作	漁業	北、小泊村	北海道余市町
荒田狷介	高等學校教授	青森市	山形高等學校
荒井庸夫	茨城縣水海道中學校長		（大正十五年調査）
新井英次郎	教諭	北、松島村	臺灣臺北工業學校

新井田史　新得驛長
新井田四郎　實業
新井野勇次郎　荒物商
新谷茂樹　東京日々新聞記者
雨森清三郎　會社支配人
青山正義　北海道聽地方農林技師
相田松三郎　實業
東五郎　箱根土地株式會社員
有谷千代壽　東京鐵道局勤務
有馬喜四郎　愛媛縣知事官房秘書係屬
淡谷秀藏　伊藤胡蝶園大阪倉庫會計主任
淡谷貞藏　日露藝術編輯

い、ゐの部

一戸兵衛　陸軍大將明治神宮々司
一戸伊勢子　食物研究所長
一戸恒吉　札幌鐵道局副參事
一戸正侯　東京日々新聞記者
一戸出世　臺北高等學校教諭
一戸庸三　醫師
一戸源五郎　株式仲買業
一町田志朗　札幌鐵道局技手
出町吉三郎　銘茶問屋
庵崎貞俊　新聞記者
泉山幸吉　宮城縣赤十字社支部副院長醫學博士
泉山德藏　海産物問屋
泉山吉兵衛　實業
泉山正太郎　泉山工場主
泉山貞四郎　出版業
市川正一　商
市田勇太郎　金融業
猪股博　岩手縣勸業課長
猪股鐵太郎　請負業
池田富七　東洋汽船會社技師
池田忠作　學務部長視學官
池田善左衞門　鳥版業、會社員
五十嵐豐　横濱第二中學校教諭
五十嵐億太郎　海馬島經營
井上勝義　海産物問屋、貿易商
井上重美　尺八指南
伊藤忠造　畫家
伊藤淳吉　高等法院判事
伊藤憲郎　京城覆審法院判事
伊藤省吾　神戸製鋼所技師
伊藤孝助　商業
伊藤克一　三井物産會社炭鑛課長
伊藤祐一　小樽區裁判所判事
伊藤平三郎　請負業
伊藤順藏　安田銀行鶴岡支店長
伊勢谷吉藏　實業

三、五戸町　北海道上川郡新得
青森市　朝鮮中清北道清州面旭町
弘前市　札幌市南七條西一丁目
（弘中辛）　神奈川縣鶴見町櫻ヶ丘
青森市　關東州大連工業株式會社
東、油川町　（大正十五年調査）
北、七和村　小樽市
三、北川村　東京府下阿佐ヶ谷七六四
西、深浦町　東京市神田區錦町三ノ二
青森市　松山市萱町二丁目
同　大阪市東區南久寶寺町三丁目
東京府下下目黑町
東京市外上澁谷豐澤一三五
東京市四谷區番衆町
（大正十五年調査）
神奈川縣鶴見町豐岡八ノ二
臺北市古亭町一七八
東京市芝區神谷町二八
東京府下西大久保一〇一
札幌市南五條西十二丁一、三〇二
東京市日本橋區濱町三ノ一
東京市報知新聞政治部
宮城縣石卷町住吉町三
弘前市
弘前市
弘前市
東、
弘前市
弘前市
弘前市
弘前市
弘前市
青森市
三、八戸町

三、八戸町　東京市麻布區森元町三ノ三
三、八戸町　東京市小石川區上富坂町四〇
三、西越村　大阪市北區樋口上ノ町
三、八戸町　札幌市山鼻町八
下、　札幌市北三條西二丁目二
南、六鄕村　神奈川縣鶴見町一、〇二二
弘前市　（大正十五年調査）
西鰺ヶ澤町　札幌市南十條西六丁目
西鰺ヶ澤町　東京府荏原郡調布村字嶺一、〇九五ノ一
弘前市　宮城縣學務部
弘前市　東京府下大崎町字桐ヶ谷五四六
下、大畑村　東京市外池上町下池上七九
上、七戸町　樺太海馬島
南、水木村　函館市東濱町四八新谷末吉方
南、黑石町　京都市寺町今出川東入上リ三榮町
弘前市　東京市牛込區新小川町三ノ六
青森市　朝鮮京城府
西、稻垣村　京城竹湊町二丁目六九
青森市　兵庫縣御影町上石屋二六
弘前市　東京市本鄕區駒込千駄木町一九四
青森市　小樽市緑町一丁目
西、　東京府下西巢鴨宮仲二、〇四七
青森市　山形縣鶴岡市三日町一〇五
東、油川町　小樽市花園町

伊勢谷正一　地方農林技師所長　青森市
伊勢谷常三郎　刑務所支所長　西、越水村
伊香善吉　實業　東、横内村
伊香志郎　技師　（弘中卒）
伊原榮三郎　小館木材會社東京出張所主任　青森市
板恒昂　海軍大尉砲術學校教官　弘前市
板垣邦器　著述家　（弘中卒）
今村新吉　福岡工業學校教諭　西鰺ヶ澤町
今村善三郎　自動車業　弘前市
今井熊太郎　女子學習院教授　南、猿賀村
今淵正太郎　實業　三、八戸町
今淵忠助　醫學博士　三、
今淵恒壽　海軍機關中佐　水雷學校教官　三、八戸町
飯田廿一　元帶廣町長　上野邊地町
飯田誠一　著述　弘前市
飯田旗郎　弘前市
石川平司　彰化高等女學校教諭　弘前市
石戸勇一　附屬公學校主事　青森市
石戸勇三　歩兵大尉中隊長　青森市
石戸谷潔　海軍中佐艦長　（弘中卒）
石戸谷勉　歌志内驛長　弘前市
石戸谷倉吉　京城林業試驗場勤務
石戸谷喜代衛　金足驛長
石岡與一　高田驛長
帝室林野局技師

北海道中川郡池田森林事務所
京都府與謝郡宮津町
東京市下谷區櫻木町四九
大阪市西區土佐堀大同ビルデング三階
千葉縣市川町五二三
横須賀市公園町二、四三〇
東京府下馬込村東一、〇二七
福岡市浪人町九
東京府下馬込村東一、〇二二
東京市外笹塚槃ヶ丘
東京四谷區番衆町二八
東京市本郷區弓町一ノ一六
福岡市
横須賀市福岡五六
札幌市
東京市小石川區西江戸川町一九
臺灣臺中州彰化街
旭川歩兵第二十七聯隊
三日月艦
北海道空知郡歌志内村
（大正十五年調査）
秋田縣南秋田郡金足村
新潟縣高田驛構内官舎
東京市外西大久保五一

石岡藏吉　東京鐵道局庶務課保健係長　南、中郷村
石岡和五郎　商業　弘前市
石郷岡武行　貿易商　西、
石郷岡岩男　檢事　弘前市
石田武善　造船所技師　弘前市
石田收藏　帝國大學講師　三、八戸町
石田與惣太郎　實業　弘前市
石井昌胤　別格官幣社日光東照宮主典　三、三戸町
石井二郎　三井物産株式會社員　三、三戸町
石井孝助　稅關吏　弘前市
石橋朗　福島縣安積中學校長　三、八戸町
石橋吉三郎　會社員　弘前市
石塚泰融　淨土宗寺院住職　西、柏村
石塚龍學　名古屋東海中學校長　三、
岩田新治郎　廣眸會　弘前市
岩間緣郎　教授
岩泉淺次郎　郵便局長
岩泉菊藏　郵便局長
岩泉善太郎　中學校教諭　三、八戸町
岩淵繁造　自轉車業　弘前市
岩淵繁太郎　時計商　弘前市
岩井盛太郎　牧畜業　中、七和村
岩見慶七　繩莚商　弘前市
岩川克輝　醫學博士　青森市
岩川友太郎　東京女子高等師範學校名譽教授　弘前市

東京府下野方町字新井六二四
東京市外巢鴨町駒込三六〇
東京地方裁判所檢事局
三菱造船會社長崎造船所
東京帝國大學理學部
東京府下北千住町東電千住發電所社宅
栃木縣日光町
東京府北豐島郡上板橋前二、四〇三
支那漢口日本租界支那政府
（大正十五年調査）
東京府下澁谷町常磐松七〇
東京市深川區靈巖町九八弘蓮寺
東京市牛込區早稻田町一五
東京府下瀧野川西ヶ原六八四
東京女子高等師範學校
北海道利矢古丹郵便局
北海道宗谷郵便局
埼玉縣川越中學校
札幌市南四條西二丁目九
樺太豐原
札幌市白石町更科心踏
函館市船場町
新潟醫科大學
東京府下野方町新井藥師前

う の 部

宇野末吉　會社員　南、六鄕村
宇野要三郎　大審院判事　南、黑石町
內山猛　醫師　三、
內山圭吾　醫學博士　三、八戸町
內山助三郎　新聞記者　弘前市
內海元彌　平塚海軍火藥廠勤務　弘前市
上野魁春　宮城控訴院判事　青森市
上杉直三郎　京城府社會課勤務　三、八戸町
浦山一郎　日本勸業銀行高松支店長　三、八戸町
浦山助太郎　實業、元代議士　三、八戸町
瓜田友衞　女學校教諭　（弘中卒）
梅田潔　實業、元代議士　三、留崎村
薄田貞敬（斬雲）　著述家、畫家　青森市
鵜川俊三郎　著述家　弘前市
植田賢太郎　文部屬　青森市
植田內藏吉　會社員　青森市

え、お の 部

江渡健二　志佐炭礦會社專務取締役　上、藤坂村
江渡榮三　文學者　（弘中卒）
江渡狄嶺　文房具商　上、五戸町
江渡健作　神戸商業學校長　青森市
江利山義顯　僧　上、五戸町
　　南、浪岡村

加州ロスアンゼルス南サレペドロ一二一パシフイツクホテル
東京府下中澁谷町六八七
東京市本鄕區蓬萊町一八駒込病院
東京市本鄕區蓬萊町一八駒込病院
橫濱市境町やまと支局
神奈川縣中郡大野村中原、下宿海軍官舍西二三
仙臺市米ケ袋中町九五
（大正十五年調査）
高松市兵庫町
東京小石川區上富坂町四〇
山東省青島高等女學校
東京市四谷區愛住町七六
東京市牛込區神方町四
東京市牛込區若松町一五
東京市小石川區高田老松町四三
橫濱市辨天町

兵庫縣武庫郡精造村山芦屋山坂
加　奈　陀
東京府下高井戸
函館市末廣町
（大正十五年調査）
甲州身延山久遠寺

蝦名熊三　帶廣區裁判所判事　弘前市
蝦名富壽太郎　神社主典　弘前市
海老名昌一　教授　弘前市
遠藤實　請負業
榎本芝水　琵琶指南　三、

お、を の 部

小野重義　驛長
小野聖導　僧侶　青森市
小野忠治　曉星中學校教諭　弘前市
小野藤左衞門　鐵道官吏　北、三好村
小野喜代吉　商業　北、三好村
小野登氏　音樂師　北、三好村
小野謙一　民政黨本部幹事　弘前市
小野光衞　郵便局長　青森市
小野寺雄之助　木炭商　三、
小野寺富久藏　理髮店、牛込區會議員　三、
小田切榮次郎　帝室林野局技師　南、黑石町
小田桐治三郎　滿鐵經營課勸務　南、田中村
小田桐一雄　官吏技手
小田島米太郎　海產物商　青森市
小田川喜三郎　京城電氣會社員　青森市
小川隆文　萬年社々員　上、七戸町
小原禮治　步兵少佐大隊長　上三本木町
小山田仁太郎　北海道廳種畜場北見分場技手　弘前市
小山內叶　北海中學校教諭

北海道河西郡帶廣町
國幣中社函館八幡宮
千葉縣千葉中學校
樺太豐原町東二條南三ノ三二
東京市日本橋區川瀨石町九

秋田縣山本郡八森村中濱
東京市深川區靈岸町双樹町
東京市外池上町市野倉六〇三
米　國
札幌市南一條西五丁目
東京市下谷區西町三五川浪方
東京市外戸塚町諏訪五四
北海道濱益郡濱益村字幌
東京市牛込區喜久井町四五
東京市牛込區喜久井町二
東京市下谷區徒士町一ノ六七
朝鮮京城府元町一ノ二七
朝鮮總督府內務局
東京市下谷區上車坂町一〇
朝鮮京城府漢江通一一京電合宿所
紐育市トリニテー廣場
步兵第二聯隊
北海道常呂郡訓子府村
札幌市南一條西九丁目一三

小山内信	三菱銀行員	青森市	上海九江路二號三菱銀行
小山内薫	著述家	南、黒石町	東京市四谷區南寺町七
小山内重治	中野無線電信調査委員	弘前市	東京市外中野
小山内八百吉	飯詰驛長		秋田縣仙北郡飯詰村
小山内德榮	朝日新聞社員	東、油川町	東京市京橋區南佐柄木町六
小山内淳進	農林技師	中、豐田村	熊本營林局
小山内大六	元滿洲日々新聞社長	弘前市	東京市外目黒六四八
長内清	北海タイムス記者	南、黒石町	札幌市南三條西十三丁
長内長	文房具店		横濱市西戸部町五五六
長内泰昭	東京米穀取引所員	西、稲垣村	東京市日本橋區蛎殼町一ノ一
長内多七郎	電氣會社員	西、館岡村	東京府下澁谷宇田川六一
長内庄之助	甲府刑務所看守長	東、荒川村	山梨縣甲府市深町
岡田元太郎	繪葉書商	弘前市	東京市京橋區南大工町五
岡田重次	南部子爵家々職	三、三戸町	東京府下青山穩田四三五南部子爵家内
岡田重壽	鹿兒島驛長	三、八戸町	福島縣相馬郡鹿兒島町
岡部多吉	葉子商	青森市	函館市本川町
岡野勇	辯護士	青森市	大連市紀伊町
岡本家太郎	郵便局長	北、相内村	北海道積圓丹入船村
岡崎ふみ子		南、黒石町	東京府下松並町高圓寺六二〇
落合圓次郎	劍道師範	青森市	東京府下目白高田町雜司ヶ谷四
太田清吉	三菱銀行員	青森市	東京府下中野町宇谷戸二、四七五
太田義男	ワイオー商會主		東京市芝區烏森
太田誠一郎	仙臺高等工業學校教授	青森市	仙臺市外記町九
大村嘉七	米穀荒物商	青森市	北海道根室市本町三ノ一〇
大高克善	倍侶布教師	弘前市	朝鮮羅南十九師團生駒町智伯宗布教所

大高健治	佐賀測候所長	弘前市	佐賀市赤松町舊城内二七
大谷誠一郎	驛		室蘭市輪西町鐵道官舍
大谷津友藏	津輕伯爵家々扶	弘前市	東京市麻布區三河臺町
大川忠吉	會社員電氣技術者	南、藏館村	東京市外蒲田町一三七
大川亮三	商業學校教諭	三、八戸町	福島縣若松市
大川末吉	道參事會員	弘前市	札幌市鼻町六長田
大湯長吉	商	南、	札幌市豐平町一七〇
大瀨其一	日本建築社主	中、船水村	東京小石川區雜司ヶ谷三七林方
大井俊嶺	中橋德五郎祕書	東、油川町	東京市麴町區中六番町三八
大和田四郎	日本銀行員	青森市	函館日本銀行支店
大森三郎	龍山警察署員	青森市	朝鮮京城府蓮建洞三一四
大橋貞一	女學校教諭	(弘中卒)	旅順高等女學校
大溝啓三郎		南、黒石町	北米シヤトル西通四一四天坂方
大下常吉	漁業	三、八戸町	北海道帶廣町
大阪力太郎	コーラドユタイムス主幹	上、	米國コーラド州デーバー
奥崎唯一		(弘中卒)	在米國
奥寺龍溪	東京府立第三高等女學校教諭	三、八戸町	東京市麻布區市兵衛町
奥野覺彌	吳服商	弘前市	東京市牛込區下宮比町一五
奥田貞衛	元帝室林野管理局名古屋支廳技師	弘前市	東京市外中澁谷八三〇
奥田九作	中學校教諭	南、野澤村	福島縣相馬郡中村町字西山
尾坂昇	東京府立第二商業學校教諭	南、黒石町	東京府八王子市上野町五四
尾張銀彌	小學校長	中、高杉村	樺太本斗郡海馬島第一尋常高等小學校
織田三郎	步兵中佐	西鯵ヶ澤町	步兵第十九聯隊
折田隆	步兵少佐	青森市	岩手師範學校配屬
折登健三郎			米國シヤトル市

鬼柳豐丸　稅務屬直稅課長　三、八戸町　宮城縣築館町

かの部

葛西耕芳	倉庫業	北五所川原町	北海道函館市谷地頭
葛西又次郎	文學士、著述家	青森市	東京市赤坂區一ッ木町九
葛西貫一	山林部技師	弘前市	朝鮮京城府大平通總督府
葛西徹男	洗濯業	西、鰺ヶ澤	札幌市南八、西四
葛西德一郎	技師	青森市	福岡縣幸袋工作所
葛西慶太郎	元時事新報記者	南、畑岡村	東京府下蒲田女塚二二一
笠井甚一郎	陸軍航空中尉	北、中川村	東京府下杉並町阿佐ケ谷小山一五
鎌田千代三郎	山砲兵第九聯隊大隊長少佐	弘前市	金澤市榎木二ノ小路七
鎌田德美	助教	青森市	仙臺高等工業學校
鎌田彥一	日本大學幹事	弘前市	東京市牛込區北町三〇
鎌田健藏	相撲年寄（振分）	南、本郷村	東京市本所區綠町二ノ一〇
鎌田惣太郎	鑛業家	青森市	東京市淺草區馬道町五ノ一〇
鎌田武造	水產講習所技師	青森市	東京府豐多摩郡澁谷町大字下澁谷六三七
鎌田豐作	運送業	青森市	北海道釧路西幣舞町
鎌田勇藏	金物商	青森市	北海道函館大町
鎌田嘉兵衛	繩莚商	青森市	北海道函館市船場町
鎌田秀雄	無職	南、黑石町	愛媛縣西宇和郡八幡濱町新川
釜田齊	元代議士	弘前市	東京市小石川區大塚仲町四一
釜松成器	砲兵少佐	中、和德村（弘中卒）	陸軍野戰砲兵學校教導聯隊大隊長
加藤謙一	記者	南、大杉村	東京雄辯社編輯長
加藤榮五郎	兵庫衞生試驗所技師		神戸市下山手町四丁目
加藤藤太郎	實業		北海道室蘭市祝津町

加藤貫一	辯護士	北、沿川村	函館市相生町五三
加藤賢藏	海軍主計大尉	青森市	米國コロンビヤ大學
加藤勳	社會教育事業		東京府下高田町雜司ヶ谷御堂杉七五三
加瀨藏太郎	商		北海道廳學務部
片谷宗與	蒙古巴里林王顧問重役	南、黑石町	東京市本郷區根津宮永町
片谷傳造	東京計理士會幹事	弘前市	東京市麴町區五番町五
片谷清造	大倉土木株式會社大阪出張所主任	三、大館村	橫濱市神奈川區青木町三一四
籠田定憲	判事	三、倉石村	兵庫縣武庫郡芦屋折ノ上五
柿本知己	日本畫家	青森市	札幌地方裁判所
柿崎光亭	木材業	弘前市	東京府下高田町字稻荷一三六一
梶川梅太郎	會社員	弘前市	札幌市北一四五
梶井盛	運送業	北、小泊村	東京市牛込區破損町一
川村壽郎	東洋貿易會議所代理店		東京神田區表猿樂町二三
川村操	大阪鐵工所技師	上、野邊地町	米國紐育市西街ノ百四三アルデー街四五三
川村貞吉	辯護士	北、五所川原町	大阪府豐能郡豐津村大字垂水七〇番屋敷
川村彌永吉	印刷業	弘前市	東京市麴町區四番町九
川村勇次郎	農林省屬	東、新城村（弘中卒）	札幌市南一、西一、清水方
川村武三郎	三菱會社技師		東京市
川元良一	漁業町會議員		東京市本郷區西片町一〇はノ一七
川內藤次郎	郵便局長		北海道余市町濱中町
川端喜四郎	農業		北海道斜里郵便局
川原政慮	辯護士		加州桑港領事館氣付
川越利兵衞	漁業		岐阜縣米子町
桂久藏	青森市		北海道函館富岡町
桂井節郎	畫家		東京市下谷區眞崎町太平洋研究所內

神谷寛	郵便局長	青森市	北海道吉岡郵便局
神長倉眞民	ダイヤモンド社員	三、五戸町	東京市小石川區音羽七ノ三
霞清四郎	商業	三、	東京市本所區柳島横川町八八
霞景水	琵琶教師	南、田舍館村	東京市神田區三河町四ノ四
蒲田靜三	豫備役海軍大佐	三、名久井村	神奈川縣鎌倉郡大船田園都市九五
掛端平吉	商業	(弘中卒)	北海道小樽市色内町四九
金澤良藏	實業	三、八戸町	秋田縣大館町西大館五九
金子吉兵衛	藥劑師	三、三戸町	東京市小石川區水道端町一ノ六〇
釜澤益太郎	元朝鮮總督府事務官	弘前市	東京市外杉並町大字高圓寺六一八
釜澤兵一	裁縫家	三、猿邊町	米國ロスアンゼルス
貝守奥治	東京商科大學教授	三、三戸町	東京府北豐島郡西巢鴨大字堀内三七
糟谷謙三	文部省建築課技師	弘前市	文部省建築課新湯出張所
鏡岩善四郎	力士	弘前市	東京市本所區綠町桑川部屋
鹿俣德四郎	朝鮮銀行東京支店支配人代理	弘前市	東京市本郷區駒込東片町二一
角田啓司	北海道廳拓殖部技師	弘前市	札幌市南七條西十丁目
桂閑村	俳人		樺太眞岡榮町三ノ一七

きの部

木村靜幽	攝津製油株式會社重役	弘前市	大阪市東區舟越町一丁目一四三
木村源六	漁業、地主	東、大泊村	北海道小樽
木村富丞	貸家業	南、野澤村	室蘭
木村鼎一	郵便局長	弘前市	北海道石狩國和浦郵便局
木村翠	聯隊副官工兵少佐	弘前市	電信第二聯隊
木村忠雄	造林署長	三、五戸町	山形公有林野官行造林署長官舍
木村良德	兵庫縣都市研究會常任幹事	東、一本木村	兵庫縣住吉村字梅ノ木八六三
木村源三郎	貸金、漁業		北海道小樽市富町

木村孝行	安田銀行員	青森市	安田銀行新宿支店
木村民藏	歩兵少佐教官	東、大野村	千葉陸軍歩兵學校
木村石五郎(石斧)	彫刻家	三、下長苗代村	東京府下日暮里町一、一〇五
木村政勇	豫備軍醫中佐	上、四和村	東京府荏原郡矢口村小林方
木村繁四郎	神奈川縣立第一横濱中學校長	弘前市	神奈川縣鶴見
木村慶七	北海水力電氣會社狩太出張所主任	下、田名部町	北海道蛇田郡狩太村
木村圓吉	富豪	東、一本木村	北海道小樽市綠町
木村左馬輔	果實商	青森市	ハルピン協和商會
木村米次郎	三井鑛山會社員	西、大戸瀬村	北海道空知郡砂川町上砂川三井鑛山株式會社砂川鑛業所
木村繁太郎	眞岡中學校長	西、柏村	樺太眞岡町字高濱町官舍乙一ノ一
木村源三郎	機關庫技手	三、階上村	北海道中川郡池田町鐵道官舍
木村雄二郎	近衛歩兵二聯隊中隊長	弘前市	東京府下杉並町字馬橋四九四偕行社住宅
木村重勝	浪花節	南、黑石町	東京市淺草區馬道町五ノ一〇
木村主	近江銀行	南、五郷村	兵庫縣西宮市西宮市三三
木田茂晴	辯護士	南、藏館	札幌市大通西九丁目三
木立末四郎	醫師		臺灣花蓮港醫院
木坂三五六	慶大醫科講師	東、	東京市四谷區信濃町二
北山啓太郎	石炭業	南、	札幌市北二條東三丁目
北山種作	運送業	南、	札幌市北二條東三丁目
北山啓助	小林病院長	南、淺瀨石村	東京市牛込區早稲田南町三七
北山晃文	新聞記者	三、八戸町	北海道小樽新聞社
北村小松	松竹キネマ脚本部員	三、	東京府下荏原郡矢口村小林二二九
北村喜三	實業家	上、三澤村	東京府下中澁谷五六六
北村正雄	函館運輸事務所長	北、沿川村	函館市鐵道官舍
北畠良一	學務部長		鹿兒島縣廳

北畠義造	靈國産業會社囑託醫	北、館ノ越村	北米加州サンデコ市五ノ五〇六
北畠顯太郎	一等獸醫	弘前市	野砲八附
北畠義造			加州サンヂエーゴ市アジヤ藥店
北岡武五郎	三等軍醫正(大正十五年調査)	南、黑石町	會寧歩兵七五附
北川直治	材木商	南、碇ヶ關村	横濱市三吉町四丁目三九
北島牧夫	米澤工業試驗所技師	三、八戸町	山形縣米澤市膳仲町
菊池武德	元代議士、著述家	弘前市	東京府大森驛新井宿美奈見一一〇九
菊池武次郎	宇都宮工業學校教員	南、大光寺村	ニューヨーク市大使館氣付
菊池武英	教授	(弘中卒)	宇都宮蓬萊町三〇
菊池秋雄	元代議士	弘前市	京都帝國大學農學部
菊池良一	營林署長技師	弘前市	相州片瀨西片
菊池繁雄	檢事	南、大光田村	秋田縣北秋田郡早口村
菊池佳作	盛銀頭取	三、三戸町	靜岡縣沼津區裁判所
金田一國士	朝鮮銀行員	西、鰺ヶ澤町	盛岡市東中野第一地割字上衆小路百四十六
岸巖	郵便局長		朝鮮京城府南大門通り三丁目會亭
君田機久吉	雜貨商	弘前市	北海道石狩國登川郵便局
貴田大紀	陸軍科學研究所金屬材料實驗	西、木造町	大阪市東區船越町一丁目四八
龜海元作	早稲田大學教授	弘前市	東京市外板橋町下板橋二三三
紀淑雄			東京府下戸塚荒井山四三七

くの部

工藤圓太郎	驛長		秋田縣仙北郡和野町
工藤要太郎	商業		支那廣東三井物産
工藤外三郎	醫學博士	西、	京都市上京區押小路
工藤一衞	家具製作業		東京市四谷區片町四五高橋方

工藤策三	文房具	弘前市	東京市牛込區山吹町山吹小學校向側
工藤貞雄	軍醫中佐陸奥軍醫長	北、五所川原町	東京府下駒澤町新町四三〇
工藤藏密吉	廣濟丸船長	東、後潟村	大阪市廣海商事會社
工藤十三雄	代議士	弘前市	東京市本郷區駒込西片町一〇はノ一
工藤鷹之助	運送業	北、	東京市麴町區上六番町八
工藤鐵三郎	會社重役	北、板柳町	千葉縣印幡郡八生村押畑
工藤鐵男	代議士	北、五所川原町	東京市京橋區南金六町一三
工藤義公	全羅北道技師	南、猿賀村	朝鮮全羅北道金州大和町六三
工藤奚疑	町會議長、醫師	弘前市	北海道室蘭市祝津町
久保善吉	醫師	弘前市	北海道室蘭市幕西町三一八
工藤要	會社員	南、中郷村	北米ニューヨーク
工藤博	札幌稅務署庶務課長	弘前市	札幌市大通西七丁目一稅務署官舍
工藤靖夫	果實店	青森市	加州スタックトン
工藤盛勝	柔道家五段	南、猿賀村	伯林チヤルロテンデンブルグ
工藤一三	中學校教諭	中、船澤村	栃木縣芳賀郡眞岡町
久保金三郎	飛行家	東、中平內村	東京府下戸塚町上戸塚四八三
久保田太	辯護士會長	西、森田村	朝鮮釜山府大廳町一ノ四七
窪田梧樓	船舶御用達業	北、	北海道函館市東濱町
久米利吉	豫備海軍少將	北、武田村	靜岡縣靜岡市横內村
栗田富太郎	理事官	北、小阿彌村	長崎縣廳
栗林豐作			東京市小石川區東青柳町一九
桑村常之助	鐵道省技師		横濱市鶴見町二一一
櫛引淳太郎	船長		東京市本郷區駒込淺嘉町
櫛引繁之助			北米シカゴ市シシユンランド
楠美冬次郎	洋食店		

黑瀧喜三郎　木材業
黑瀧精一　僧侶
黑石彌吉　後備步兵少佐
黑石武城　步四附少佐
黑井大圓　宮內省圖書寮編輯官
黑土四郎　高等女學校長
熊谷義人　實業家

この部

古村義久　實業
古村光一　東鐵銑子驛助役
郡場寬　教授理學博士
兒島未治　畫工
兒島武夫　東北帝大理科教室助手
今井健二　漁業、農業
駒谷富太郎　家
小林誠　牧師
小林喜代吉　畫家
小林七郎　郵便局長
小形秀七　三等藥劑生
小形修三郎　村商
小路保之亟　萬宇炭山驛長
小西鐵三郎　橫城普通學校長
小濱嘉七　樺太廳、泊居支廳殖產係長
小平二男　製鐵所技師
小宮山治三郎　東洋貿易會社員

南、碇ヶ關村　北海道釧路茂尻矢
弘前市　朝鮮忠淸南道供城郡色雲興寺主任
東京府下中野町橋場町三八八五
東北學院中學部服務
東京府下荏原郡松澤赤堤
佐賀縣立鹿島高等女學校
東京府下王子町大門一三一六

（弘中卒）東京市麻布區竹谷町二
南、大杉村　千葉縣海上郡銑子町銑子驛官舍
青森市　京都市上京區吉田町京都帝國大學
（弘中卒）山口縣佐波郡華城村字仁井命
仙臺市　兵庫縣寶塚音樂歌劇學校
青森市　北海道余市
下、田名部町　東京市日本橋區矢倉町一
西、森田村　東京府下野方町新井一八八
山形縣新庄郵便局
弘前市　遼陽衞戍病院
東、中平內村　東京市外池袋宮ノ下一、九九七
北海道空知郡栗澤村字萬字
三、鮫村　朝鮮江原道橫城邑
西、舞戸村　樺太泊居町
青森市　福岡縣八幡市荒生田東鐵町四丁目
南洋マーシヤル群島ヤルート島　同社內

小島忠鄕　農業
今東寬　文藝
今東光　家
今和次郎　早大教授
今裕　教授理學博士
今初男　岩手縣技手
今邦器　北陸公論經營
今周而　士
今日出海　文
今規弘　津輕男爵家職
今五郎衞　陸軍少佐
今圭一　判事
今武平　元郵船會社船長
今田實　合同運送會社員

さの部

佐藤愛麿　伏見宮家別當
佐藤淸明　著述、元農商務省技師
佐藤完造　京城鐘路警察署柔道教師
佐藤金之助　警視廳柔道教師
佐藤正秀　福島縣地方技師
佐藤正實　印刷業
佐藤守之助　商
佐藤儁　長門副長海軍中佐
佐藤爲七郎　郵便局長
佐藤賢作　稅務署長

三、湊町　北米加州スースン市一九五
弘前市　大連市滿鐵埠頭事務所
弘前市　東京市本鄕西片町一〇、ロノ六號
（弘中卒）東京府下吉祥寺山谷二六五八
青森市　北海道帝國大學內
盛岡市　富山市外淸水七番地
弘前市　大連能登町一ノ一八
東京市本鄕區西片町一〇ロノ六號
弘前市　東京市小石川區茗荷谷町津輕邸內
北、東京市外杉並町天沼三一五
弘前市　埼玉縣北足立郡浦和地方裁判所
弘前市　東京市本鄕區西片町一〇ロノ六
青森市　青島文登路七號

弘前市　東京市麻布區鳥居坂四
弘前市　東京市外荏原町戶越七九五市營住宅
朝鮮京城古市町三五
東京府下世田ヶ谷町太子堂二六三
（青中卒）福島縣福島市上町十一
弘前市　札幌市大通西六
東京市芝區神明町三
三、八戶町　上海駐在
北海道神威郵便局
弘前市　靜岡縣磐田郡見付稅務署

佐藤源藏　能代驛長
佐藤武市　臺灣銀行臺南支店
佐藤懋洋　畫家
佐藤紅綠　小說家
佐藤八郎　詩人
佐藤禪忠　僧侶
佐藤兵逸　滿鐵埠頭事務所
佐藤一郎　飛行第三聯隊附少尉
佐藤清　大阪商船社員
佐藤豐三郎　貿易商
佐藤源四郎　特命全權公使國際聯盟事務局長
佐々木敏郎　郵便局
佐々木甚三郎　燈臺看守長
佐々木武治　地方農林技師
佐々木多門　日本銀行庶務課長
佐々木尙三　旭川運事技師
佐々木格三　都新聞經濟部記者
佐々木和策　帝室林野局囑託
佐々木軌三　辯護士
佐々木秀一　教授
佐々木千之　著述家
佐々木孫一郎　內務省仙臺土木出張所
佐々木德一　レストラント
佐々木章之助

南、中鄕村　秋田縣山本郡能代港町鐵道官舍
弘　前市　臺灣臺南綠町二〇社宅
青　森市　東京府下田端二二三工藤方
弘　前市　大阪市外住吉鹿田停車場前
（弘　中　卒）　東京市外瀧野川西ヶ原九九吉邨方
南、金田村　鎌倉東慶寺內
東、新城村　大連聖德衞一ノ七六
下、大畑村　滋賀縣八日市町
大阪市東淀川區十三西ノ町一六六ノ五
米國
三、三戶町　米國シャトル
弘　前市　在瑞典國際聯盟帝國事務局內
西、稻垣村　北海道厚岸郡濱中局
下、田名部町　北海道室蘭市母懋南町チキウ岬燈台官舍
弘　前市　沖繩縣那覇市天妃町一丁目十六
東、中平內村　東京日本銀行庶務課
南、碇ヶ關村　旭川市宮下町七丁目鐵道官舍
青　森市　東京府下上目黑一九三九澁谷方
弘　前市　東京市外世田ヶ谷町三宿三八五
弘　前市　宇都宮市傳馬町九番地
西、車力村　東京高等師範學校主事
弘　前市　東京市外駒澤町新町一三六
西、車力村　仙臺市支庫通四
弘　前市　米國ワシントン州ミルトン
シカゴ市プロードウイ

齋藤貞作　滿鐵社員
齋藤伊佐美　警察署長
齋藤吉太郎　元山郵使局會計次席尺八指南
齋藤靜　米澤郵便局
齋藤典治　火燒島公立學校
齋藤史雄　北澤漁業
齋藤公則　法院書記
齋藤和夫　教諭
齋藤克雄　大阪商船會社所屬船長
齋藤準行　東京海上火災保險社員
齋藤才次郎　工場員會計主任
齋藤政太郎　驛長
齋藤與太郎　郵便局長
齋藤勝太郎　洋服店
齋藤亨　商業
齋藤勇助　實業家
齋藤冽泉　宗教家
齋藤庫次郎　記者
齋藤金吾　金物軍需品商
齋藤清之　ホテル業
佐野良造　築
佐野翠坡　建業
佐瀨茂　鐵道省官吏、歌人
佐野所役　經理學校教官主計中佐
佐山都貞　市屬
櫻庭龍吉　歌舞伎女優組合理事
脚本創作興行者

青　森市　大連市滿鐵埠頭事務所
中、西目屋村　茨城縣多賀郡助川警察署
北、七和村　元山府成泊六
弘　前市　米澤市立町郵便局官舍
弘　前市　臺灣臺東廳火燒島區南寮
北、脇元村　北海道積丹
西、鰺ヶ澤町　朝鮮平安北道新義州府榮町
朝鮮全羅南道木津高等女學校
（弘　中　卒）　神戶市下山手通八丁目一八三三
北、沿川村　東京府下澁谷伊達一〇
三、　東京市吉原鐵工場
秋田縣由利郡平澤町
北海道錢函郵便局
弘　前市　札幌市南二西一、一六
東京市麻布區市兵衞町一ノ八平田方
（五　農　卒）　英領加奈陀アーバランド
弘　前市　門司市本川町六丁目
南、光田寺村　北米合衆國羅府市北コモンシウアナルス街一二二七
弘　前市　東京本所龜澤町二ノ六
青　森市　米國シャトル市メンストレート四〇八
弘　前市　札幌市北八西、二、一
弘　前市　千葉縣船場町橫宿
上、　水交社
中、和德村　臺北市役所
南、黑石町　東京市本鄕區駒込神明町七五

櫻庭秀一　技師　弘前市　長崎市役所
櫻庭俊三　米穀石炭商　弘前市　室蘭
櫻庭子郎　歩兵少尉千葉縣茂原農學校服務　弘前市　千葉縣長生郡茂原町
櫻庭啓次郎　砲兵中佐　弘前市　旭川市五條通十丁目左九號
榊田圭三　警視警務課長　弘前市　東京府下大久保町陸軍科學研究所
榊田順藏　實業　上、藤坂村　東京市芝區愛宕町一丁目
澤田春雄　秋田縣土木主事　南、黑石町　東京市本所所區中ノ郷瓦町一一
澤口士郎　女優　弘前市　秋田市長野下新町未南町
澤村春子　砲兵少佐　日活京都撮影所
境岩三郎　實業　東京府下大久保町陸軍技術部本部
境八百四郎　米國
堺彌太郎　教員　布哇　ホノルル
笹森操　輕家々職　東京市麻布區市兵衛町二ノ一三
笹森英能　津會社技師重役　東京市外戸塚町上戸塚一〇二九
笹田衛巽　醫官　仙臺醫科大學病院
笹森清一郎　洋家　東京新宿鐵道保線區
笹森慶一　車掌　東京市下谷區御徒町四ノ三三大湯方
笹繁　畫監督　室蘭市周運町鐵道官舍
笹森熊一郎　技師　朝鮮總督府內務局建築課
笹森晋　更戸長　北海道河東郡音更村
坂本晃　十勝日日新聞社長　北海道帶廣町西三條三丁目
坂本壽太郎　材木商　北海道函館松風町
坂谷由太郎　辯護士　札幌市北三西二

しの部

柴田源六　賣炭業　札幌市苗穗停車場通

柴田德次郎　料理店　東、後潟村
鹽崎勝郎　商業　弘前市
鹽崎與五郎　彫刻家　弘前市
白戸光久　豫備海軍中佐　弘前市　北米ニューヨーク市コロンバス五一六
白戸半次郎　福島縣地方課長　西、木造町　札幌市南三西二ノ一四
白取保五郎　元百銀行京橋支店長　東、蟹田村　東京市本郷區駒込富士見前通鈴木方
白尾宏　實業家　上、七戸町　東京府下西大久保二二
清水武夫　辯護士　南、野澤村　福島市大字福島字新妻一六
清水良臣　渡島支廳長（大正十五年調査）　弘前市　東　京　市
鹿內德三郎　教師　弘前市　函館市外湯ノ川
鹿內芳洲（清美）　彫刻家　弘前市　東京府下西巢鴨一一九
鹿內健一　軍醫少佐（大正十五年調査）　弘前市　函館市元町一官舍
神倉可　福島每日新聞記者　西、舞戸村　秋田市聖靈學院
神八三郎　實業家　弘前市　東京府下野方町江古田二、〇六一
神實一　馬具商　中、清水村　橫須賀海軍病院
神忠藏　山砲第十六聯隊少佐　弘前市　福　島　市
神造酒彌　海尺師　弘前市　北海道釧路市大字釧路
神久雄　範　弘前市　札幌明南二西一
神逸郎　教授　弘前市　東京市牛込區早稻田南町五三
下山木鉢郎　畫家　弘前市　東京市外荏原郡池上村久ヶ原五三〇
下山傳藏　實業家　弘前市　東京市外杉並町天沼
下條雄三　通信記者（電通）　青　山　學　院
下平英太郎　豫備海軍少將　（弘前中卒）　東京市外西巢鴨堀之內二〇五
島谷禮二　京城電氣會社支店員　青森市　北海道小樽市富田町
島谷憲造　富士製氷會社常務取締役　上、野邊地町　電通上海支局內
上、野邊地町　東京市牛込區天來町三
上、野邊地町　朝鮮京城府漢江通八ノ三四　高宮方
京都市大佛商門前

島守三崎	海軍主計中佐	東京府西巢鴨町堀之内一三一
島田重穗	帝國冷藏會社主事	東京市外穩田一
島田有秋	八洲商會員	東京府下豐多摩郡大久保町西大久保三〇六
七戸贊三	留學生	ニューヨーク市コロンビヤ大學
進藤良英	近海郵船函館店員	函館市船見町七三
澁谷甚七		英國ロンドン大使館內

すの部

鈴木嘉助	古鷹副長海軍中佐	東京府荏原郡荏原町中延一一〇二
鈴木陸奥夫	石炭業	米國シヤトル市
鈴木有爲	元一等主計	仙臺市角五郎新町一〇
鈴木重武	千葉醫大助教授	在外研究中
鈴木田幸造	海軍少佐	旗風艦長
須藤聖馬	畫家	京都市外嵯峨野　野澤如洋方
須藤繁基	奈良縣道路技師	奈良市十輪院畑町
須藤旭章	日本畫家	東京芝區白金三光町二七六
須藤全治	輜重兵少佐	輜重兵第七大隊
須藤正彥	滿鐵社員	大連市聖德街四丁目九五
須藤武俗	警視廳巡査	東京府北豐島郡瀧野川町大字瀧野川五二八
須郷文八郎	會社員	大阪市住吉區天王寺町三二三〇
須郷邦行	三井物產會社	東京市本郷區駒込林町二〇八
杉山一男	滿鐵埠頭	大連市薩摩町一ノ七六
杉山榮一	遞信局技師	仙臺遞信局
杉野喜精	山一證券株式會社長	東京府荏原郡目黑町三田十二
諏訪猛夫	象牙彫刻	神奈川縣鎌倉町小町　江澤方

三、八戸町	弘前市	東京府荏原郡荏原町中延一一〇二
西、柏村	弘前市	米國シヤトル市
青森市	東、大野村	仙臺市角五郎新町一〇
青森市	東、大野村	在外研究中
南、尾崎村	南、野澤村	旗風艦長
西、水元村	弘前市	京都市外嵯峨野　野澤如洋方
	弘前市	奈良市十輪院畑町
	東、岩木村	東京芝區白金三光町二七六
	弘前市	輜重兵第七大隊
	弘前市	大連市聖德街四丁目九五
	弘前市	東京府北豐島郡瀧野川町大字瀧野川五二八
	上、横濱村	大阪市住吉區天王寺町三二三〇
	弘前市	東京市本郷區駒込林町二〇八
		大連市薩摩町一ノ七六
		仙臺遞信局
		東京府荏原郡目黑町三田十二
		神奈川縣鎌倉町小町　江澤方

關場不二彥	醫學博士	札幌市北辰病院
關東五郎	大連市役所收入役	大連市薩摩町
關榮太郎		米國ニューヨーク
關口勝久	實業	東京市外澁谷九七四
關澤徹	日本興業公債株式會社々長	東京市本郷駒込區曙町一九
關野陸郎	郵便局長遞信事務官	北海道旭川郵便局
清藤德彌	雜誌社經營、在仙縣人會幹事	宮城縣桃生郡矢本
堰八義一	橫須賀、鑑船部長大佐	橫須賀鎭守府
瀨川一	郵便局長	北海道十勝國足寄郵便局
接待庸夫	保險業	米國シカゴ
	高等普通學校教諭	朝鮮新義州

せの部

相馬勇三	會員	大連市滿鐵埠頭事務所
相馬勝美	砲兵少佐	姬路市野砲第十聯隊
相馬榮作	郵便局長	北海道置戸郵便局
相馬宗雄	國富鑛山工作課長	北海道岩內郡小澤村

その部

立石佐次郎	貿易商	東京市芝區高輪南町三〇
武田直功	東京日日新聞社員	東京市小戸川區大塚町六一ノ一〇
武田實郎	美唄農場監督	北海道石狩國空知郡美唄町
武田定七	商業	札幌市南三條西六丁目
武田眞一	中外商業新報社員	東京市赤坂區田町七ノ二
武田義七	東京女子服裝美術學院幹事	東京市日本橋區中外商業新報社內
		東京市四谷區番衆町一二七

たの部

青森市	中、千年村	東京市芝區高輪南町三〇
弘前市	弘前市	東京市小戸川區大塚町六一ノ一〇
三、八戸町	南、大杉村	北海道石狩國空知郡美唄町
		札幌市南三條西六丁目
三、三戸町	上、三澤村	東京市芝區高輪南町三〇
弘前市	弘前市	東京市小戸川區大塚町六一ノ一〇
弘前市	青森市	北海道石狩國空知郡美唄町
	弘前市	札幌市南三條西六丁目
	南、藤崎町	東京市赤坂區田町七ノ二
	弘前市	東京市日本橋區中外商業新報社內
		東京市四谷區番衆町一二七

竹内運平　北海道史編纂主任　札幌南十二條西八丁目山鼻町一八
竹内省三　郵便局長　弘前市　北海道天皇國譽平郵便局
竹内德亥　關東廳事務官土木課長　東、野内村　旅順市高崎町（目下外遊）
竹内謙六　早稲田大學講師　東京市外大久保百人町一二一
竹内勘治　郵便局長　北海道初山別郵便局
竹内綱吉　敎　西、出精村　北海道室蘭中學校
竹内惠吉　會社役員　弘前市　東京市日本橋區濱町三ノ一
竹内德司　藥劑師　弘前市　横濱市神奈川區青木町幸ケ谷三一四
竹内半左衞門　實業家　弘前市　東京市日本橋區濱町一二ノ一
竹内喜三郎　實業家　弘前市　東京市日本橋區濱町一二ノ一
竹川貞銳　服商　青森市　北海道倶和安町
竹ヶ原豐三郎　名古屋市東區新出來町一丁目一五
竹森節堂　米國遊學中
竹森哲三　日本畫家　上、藤坂村　東京府下十條同潤會住宅
玉井忠一郎　醫師　弘前市　關東州金州病院内
玉田惣二郎　東京控訴院判事　弘前市　東京市麴町區東京控訴院（大正十五年調査）
高橋堅　新聞記者　西、鰺ヶ澤町　樺太民友新聞社
高橋潔　第一高等學校教授　西、稲垣村　東京市外中澁谷七五五
高橋由藏　辯護士　青森市　東京市麴町區飯田町六ノ七
高橋精造　小學校教員　上、天間林村　樺太長濱郡長濱村大字荒寨
高橋竹年　柔道家　北、脇元村　英領カナダバンクバー
高橋長八　日本畫家　弘前市　大阪住吉區濱口町三四九
高橋尙作　農事試驗場長　北、金木町　水戸市大字上市棚三番地（大正十五年調査）
高橋邦太郎　新潟縣農會内新潟蔬菜種組合會主事　南、黑石町　靜岡市
電氣技師

高橋省三郎　醫師　南、黑石町　横濱結核療養所長
高橋大五郎　郵便局長　三、三戸町　北海道函館市外桔梗村
高杉尙勝　山口銀行支配人代理　弘前市　京都市上京區上總町三二
高杉瀧藏　早大敎授　弘前市　東京市外杉並町天沼四六九
高杉榮次郎　北大敎授　弘前市　札幌市北六條三丁目
高瀨豐吉　東北大學講師　弘前市　仙臺市元常磐町八番地
高山清助　驛長　弘前市　山形縣西置賜郡長井町鐵道官舍
高田不二夫　遞信技師　臨時水力調査課長　弘前市　札幌市北十三條西三丁目一番地
高谷武助　洋服店　青森市　朝鮮總督府遞信局
高井重五郎　公債株式賣買業　西、　東京市京橋區鈴木町六
高島貴一　辯護士　（弘中卒）　東京府下西大久保
高後芳雄　東北帝大理學部物理教室助手　上、三本木　千葉縣千葉町長州
高松正彥　木商　仙臺市向山越路四十九番地
田澤康民　村　東京府下杉並町阿佐ケ谷日向二四五
田澤次郎　社會課長　山形縣學務部
田澤昌周　農業　（弘中卒）　北米シヤトル市
田澤甚助　弘前市　北米シヤトル市
田中鐵藏　津輕男爵家々職　下、田名部町　東京市小石川區茗荷谷町六九
田中稔　信夫農民學校長　福島縣信夫郡清水村
田中潔　帝室林野局木曾支局湯舟澤出張所長　長野縣西筑摩郡神坂村
田中德太郎　通譯官　南、野澤村　朝鮮總督官房文書課
田中順　官吏　三、五戸町　東京市外西巢鴨町池袋三四七
田村俊太郎　大正運輸會社輸入掛長　南、猿賀町　神戸市
田村定吉　陸軍中尉　青森市　臺灣臺中市干城町分屯大隊附
田村榮一　辯護士會社員　東京府下戸塚町字戸塚九四五電牛込四五二九

田邊喜一	辯護士	東、荒川村	東京市外青山北町七ノ二
谷山成章	書家	弘前市	兵庫縣姫路市北條四四八
谷口俊夫（雲線）	書家	青森市	東京市本郷區府立工藝學校内
館山廣	那加高等國民學校教授囑託	中、堀越村	岐阜縣稻葉郡那加村
館山武義	步兵少佐	弘前市	神戸第一神港商業學校配屬
旦代次雄	飛行學校職員	弘前市	千葉縣津田沼町鷺沼東亞飛行專門學校

ちの部

珍田捨巳	侍從長	弘前市	東京市麹町區上二番町二二
珍田秀穗		弘前市	東京市本郷區西片町一〇ろの六號
千葉稻城	新聞記者（主筆）	南、黑石町	函館每日新聞社内
千葉喜之助	土木請負業	南、黑石町	北海道帶廣町東一條六丁目一一
千葉忠吉		南、二庄内村	札幌市南一條西十三丁目
千葉如幻	商	西、深浦町	米國
近森義明	檢疫醫		神戸市中山手通稅關官舍

つの部

津幡文八郎	農林技師	東、油川町	三重縣廳
津輕アグリ（竹本園州）	藝人	南、黑石町	東京市赤坂區田町六ノ十二
津村正美	南部家々職	三、中澤村	東京市牛込區市ヶ谷本村町二　南部邸内
津島圭治	彫刻家上野美術學校在學	北、金木	東京府下戸塚九五二
津島新吉	稅務署屬	北、金木	岩手縣膽澤郡水澤町上町
蔦谷龍岬	日本畫家	弘前市	東京市下谷區上野櫻木町三九
對馬郁之進	辯護士	弘前市	東京市外駒澤町上馬一七一
對馬彌作	農林省技師	南、石川町	東京府下巢鴨町宮仲二ノ三七一

對馬助三	清州高女校長	南、富木館村	朝鮮忠清北道清州本町六丁目
對馬桑太郎	辯護士	南、石川町	東京市外代々木山谷三三四
對馬高麗夫	地方農林技師	弘前市	北海道廳產業部
對馬園江	蘆別炭鑛專務	弘前市	東京麹町區大番町一七
對馬一義	郵便局長	中、駒越村	東京府下豐多摩郡杉並村大字高圓寺
對馬二郎	村井銀行營業部長	南、	東京府下青山原宿二九〇
對馬忠次郎	商業	弘前市	札幌市北三條西二丁目一
對馬百之	憲兵大尉分隊長	弘前市	關東憲兵分隊旅順分隊
對馬健吉	會社員	青森市	南米ブラジルサンパウロ市
東原政義	師範學校教諭	上、天間林村	函館市湯川通二十二番地
附田政信	會社員		加州ポストストレートコンフロシイス會社

ての部

寺田秀雄	驛長	弘前市	北海道中川郡十弗
寺島勇助	牛肉商	弘前市	横濱市野毛町二ノ四二
寺井冽泉	稅務署長	青森市	旭川市五條通十一丁目
田水清志	吳海軍廠造船部技師	西、水元村	吳市西三津田町四〇
照井正吉	運送業、町會議員		北海道余市町黑川
天坂清一	野菜仲買		北米シャトル市

との部

外崎修治	道廳技師	弘前市	北海道帶廣町石狩通河西支廳官舍
外崎清次	滿鐵貨物課	弘前市	南滿洲奉天府奉天驛貨物事務所
外崎覺	宮内省御用掛	三、八戸町	東京市牛込區東榎町二十番地
戸田重之	商業	中、駒越村	浦鹽北市街木村商店
戸澤儀一郎	熊岳城農事試驗場		南滿洲熊岳城北十區

友田嘉助　藥種商
豐川弘毅　都新聞記者
豐川靜通　帝大助教授
土岐やす子　賀陽宮由紀女王殿下御教育掛
土岐義英　江副株式會社會計主任
鳥谷幡山　畫家
鳥谷部陽太郎　雜誌編輯著述
苫米地造酒彌　實業家
苫米地四樓　步兵中佐
苫米地義三　大日本人造肥料株式會社取締役
東海勇藏　豫備役海軍造船少將
東海進藏　日立製作所
飛島定城　東京日日新聞記者
遠山景輔　銀行員

なの部

南部信鑑　飛行家
南部榮男　秋田市商業學校教諭
成田正雄　小樽商業會議所議員
成田軍平　地方技師
成田竹次郎　沖縄縣師範學校奏任教諭
成田和郎　〃學校長
成田大古（昌躬）　日本畫家
成田昌俊　醫師
成田彦一　實業家
成田昌德　滿洲醫科大學在勤

東、

弘　前市
北、長橋村
上、七戸町
三、五戸町
上、藤坂村
上、藤坂村
上、藤坂村
弘　前市
弘　前市
北、五所川原町
三、八戸町
三、八戸町
三、八戸町
弘　前市
西、川除村
弘　前市
（弘中卒）
北、沿川村

札幌市山鼻控訴院官舍（加藤方）
東京府下中澁谷町八四六
福岡縣紫郡千代町
京都府立第一高等女學校
東京府下澁谷町宮下四三
東京市下谷區根岸町一二一
東京市外澁谷アパート一號館
朝鮮京城岡崎町五
山口縣山口町步兵第四十二聯隊
兵庫縣武庫郡精道村東芦屋大樹八二二
神奈川縣鎌倉町極樂寺五六一
茨城縣助川町堀米
東京市本郷區森川町總州館
紐育市ブロードウイ一二〇正金銀行支店氣付
水戸市上市仲町五三二
秋田市築地上本町
小樽市入船町五丁目八
大阪學務部
沖縄縣首里市當藏町一ノ九
岩手縣一ノ關中學校
北海道紋別郡興部市街川向鈴丘
南滿洲安東縣濱橋筋二番通り
北海道網田郡湯川村字下湯川村柏野五
奉天、藤波町九ノ四九

成田藏巳　上海普樂學校教員
成田儀六　川崎銀行重役
成田定之　砲兵少佐
成田皆吉　巡査講習所長
成田弘毅　簡易保險局技師統計課長代理
成田喜代治　水雷學校教官海軍少佐
成田倞（松聲）　琵琶館指南
成田定一　旅館經營
成田彦次郎　旅順病院醫長
中村良三　海軍中將海軍大學校長
中村秀一　區裁判所監督書記
中村眉山　日本書道作振會常任幹事
中村康　通譯
中村松太郎　農園管理人
中村佐一郎　請負業
中村武次郎　洋服業
中村勝太郎　教育計器製作所主
中里左右太　中學校教諭
中野桂樹　彫刻家
中野保雄　東京地方裁判所判事
中野兵一　商工省製鐵所東京出張所副參事
中田平治　一等機關士
中田庸七郎　醫業
中田龍三郎　中田タイヤ商會主
中田藤太郎　稅務署屬直稅課長

弘　前市
北、小阿彌村
弘　前市
弘　前市
弘　前市
青　森市
西、事力村
北、沿川村
弘　前市
三、八戸町
南、十二里村
北、
青　森市
三、五戸町
三、八戸町
西、出精村
弘　前市
（弘中卒）
中、清水村
弘　前市
弘　前市

支那上海北四川路千愛里一九號
東京市小石川區丸山町三九
陸軍造兵廠火工廠員
岐阜市末廣町二
東京府下豐多摩郡井荻村下荻窪七〇
東京府下下澁谷三九二
東京市淺草區淺草廣小路松田屋方
加州シャトル市ジクツクソニ街二〇號
旅順市旅順病院內
東京市麴町區上二番町四〇
北海道浦河郡浦河區裁判所官舍
大阪市北區堂島濱通り三丁目一八
米國加州羅府
朝鮮熊岳城西區
札幌市南十五條西八丁目
札幌市北四條西五丁目
東京市下谷區谷中淸水町三
千葉縣立中學校
東京市外瀧野川字瀧野川四五〇
東京市外新井町不入斗五一一
東京市京橋區木挽町
東京市日本郵船會社
洋行中（米國）
東京市神田區佐久間町三ノ三七
山形縣西置賜郡長井町宮字横長井稅務署內

中道等	著述家	三、八戸町	東京市外日暮里七一〇
中渡長之助	驛長	上、法奥澤村	北海道中川郡茂岩井豐頃驛官舍
中谷金吉	毛織物仲買	弘　前　市	東京市本所區南二葉町二
中西應作	印刷業	青　森　市	札幌市大通西五丁目
中川京吉	漁業	西、十三村	北　海　道　積　丹
中川要人	京畿道土木課	弘　前　市	朝鮮京城府丹橋町一二三
中川光夫	銀行員	東、油川町	朝鮮咸鏡南道咸鏡郡咸興面
中島萬次郎	中央大學教授	(弘中出身)	東京府下中野西町三七六〇
中島武太郎	東洋モスリン會社技師長	三、三戸町	靜岡市東洋モスリン會社
中澤晋吉	醫師	(青中卒)	北海道岩見澤町一條通
中根壽	博多取引所理事	弘　前　市	福岡市住吉町二六九
中畑四郎	歌人	南、黑石町	加州ロスアンゼルス
鳴海要吉	著述家	西、森田村	東京府巢鴨十三番地
鳴海茂八	休職二等獸醫正	弘　前　市	姫路市下寺町十四番地
鳴海巖	はばな丸機關長	西、鰺ヶ澤町	神戸市須磨町大手一九大阪商船株式會社
鳴海角三郎	金貸業	南、黑石町	北海道函館天神町
鳴海完造	大學講師	弘　前　市	ロシヤ、レニングラード
鳴海政衛	官吏	三、八戸町	札幌市南一條西九丁目
中里左右太	中學校教諭	三、八戸町	千葉縣立中學校
中里義美	臺灣總督祕書官	弘　前　市	臺灣、臺北市
中田重治	ホリネス教會監督牧師	下、東通村	東京府下柏木聖書學院
名倉懇治	海産業	弘　前　市	東京市牛込區東五軒町一九
永井浩	內務省復興局事務省		
永井俊雄	米國加州サクラメント島中農園在勤		加州サクラメント島
永田則一	實業	三、八戸町	東京府下上大崎四四四番地

永島暢子	(雜誌記者)	三、北川村	東京市小石川區大塚仲町三六ノ一三
長峯英藏(舊三次郎)	新聞記者	西、水元村	千葉縣千葉市本町三ノ五八四
長崎春松	衞生技師	南、	札幌市南十二條西七丁目
長澤純二郎	驛土木業		秋田縣仙北郡大曲町
長尾民三郎	農業長	北、三好村	米　國
長尾形助	農業	北、三好村	米　國
長尾貞作	官吏	弘　前　市	那覇市久米町官舍
長尾惣助	海軍佐	中、豐田村	島　風　艦　長
梨田源治	東京日日記者	弘　前　市	横濱市住吉町四丁目東京日日支局
奈良正幸	郵便局長		北海道佐瑞太郵便局
奈良儀助	陸軍航空兵大尉	弘　前　市	宇治山田市本町七十九番地
夏堀壽三郎	商業	三、五戸町	シ　カ　ゴ
夏堀悌次郎	辯護士	三、五戸町	シ　カ　ゴ
南部文堂	道會議員	三、八戸町	小　樽　市
	菓子商	青　森　市	札幌市北二條西三丁目三

にの部

西谷一郎	材木及木箱製造業	弘　前　市	東京府下下澁谷一五四八
西谷壽郎	日本住宅工藝會社理事	南、黑石町	東京市本郷區弓町一ノ八　朝陽館本店方
西谷健太郎	實業家	青　森　市	函館市西谷運送會社
西谷重助	電氣商	南、	札幌市大通東四丁目ノ一
西谷丑之助	電氣商	南、	札幌市豐牛五條通三ノ八
西村崇德	中澤銀行員		東京市小石川區小日向水道町六一
西岡得太郎	郵便局長		北海道苫小牧郵便局
西川文夫	醫師	中、西目屋村	東京市深川區伊勢崎町三一

二瓶源吾　煙草元賣捌業　下、田名部町　臺灣臺中市老松町三丁目一〇
乳井龍雄　銀行員文書課長　弘　前　市　東京市三井銀行
新井野勇次郎　荒物商　青　森　市　札幌市南八條西一丁目
新岡喜代吉　實業家　北、武田村　北米合衆國オレゴン縣

ぬの部

沼畑忠治　會社重役　三、平良崎村　東京市外巣鴨町上駒込八四三
沼館愛三　輜重兵少佐　三、八戸町　仙臺市北八番丁九〇

のの部

野村兵次郎　商業　弘　前　市　東京市京橋區銀座尾張町新橋際文祥堂内
野村七錄　東北帝大助教授　青　森　市　東北帝國大學理學部
野呂美雄　郵船會社　中、和　德　東京市赤坂區青山南町三ノ二四
野呂洋　帝國生命保險會社大阪支店長　南、藤　崎　兵庫縣武庫郡住吉村唐松八ノ七一
野呂得美　小田切農場管理人　南、中　郷　朝鮮熊岳城北家塋
野崎幽海　布教師　布哇ホノルル
野崎武五郎　滿鐵社員　中、大　浦　大連市外甘井子滿鐵建設事務所内
野崎市郎　郵便局長　北海道天寶郵便局
野崎源四郎　安田生命臺北支店長　臺北市表町一丁目一九番地
野澤如洋　畫家　京都市佐賀町
野坂十二樓　文藝家　上、野邊地　東京市小石川區戸崎町一二
野坂良吉　漁業　北海道網走
野坂竹太郎　商工省保險部技師　東京府下豐多摩郡落合村字落合六二三
野藤常太郎　肥料會社取締役　北海道小樽市梅ヶ枝町四
野邊地津美　梅田商會營業主任　東京市四谷區愛住町

乘田巳佐穂　郵便局長　西、水　元　朝鮮咸鏡北道新阿山
能登谷百太郎　薪炭商　南、　札幌市豐手町一一六

はの部

芳賀喬一　辯護士辨理士　南、大光寺村　東京市京橋區新富町四丁目五
羽仁もと子　婦人の友主幹　三、八戸町　東京府下雜司ヶ谷上リ屋敷一一四八
羽賀蓬洋　畫家　青　森　市　東京府下荏原郡中延八八
長谷川喜右衛門　警察官　中、高杉村　東京市牛込區鶴巻町二二七
長谷川信　司法官試補　青　森　市　東京府下代々幡字富ヶ谷一五三一
長谷川進　辯護士　中、東目屋村　東京市神田區銀座通四丁目四
長谷川一郎　東京高工助教授　青　森　市　東京府下巣鴨町上駒込四三〇
長谷川末吉　酒造業　西、鳴澤村　北海道厚岸奔渡町
長谷川百助　林業執事　青　森　市　東京市外巣鴨町駒込四三〇
畠山政吉　商　弘　前　市　札幌市苗穂町
畑中與惣吉　義山丸機關長　西、舞戸村　小樽藤山汽船會社
畑井新喜司　東北帝大教授　東、中平内村　東北帝國大學理學部
畑福英雄　郵便局長　秋田縣横手郵便局
橋爪陽　廣島縣釀造試驗場長商工技師　下、田名部町　廣島市水主町一八
橋本東三　北海道内務部調査課長　上、七戸町　札幌市北一條西六丁目
橋本富六　辯護士　京都市上京區烏丸通御池下ル
原治三郎　地方農林技師穀物檢査所長　北、中川村　新潟穀物檢査所
原田勇造　ミユキ商會主　弘　前　市　東京市日本橋區傳馬町一四
原子晋　歩兵大尉　青　森　市　歩兵第七聯隊第六中隊長
原子花子　畫家　千葉縣大多喜高等女學校
服部直治　東京ホワイト自動車會社監査役　下風間浦村　横濱市神奈川通渉間長五五三

張間源四郎　會計課長　青森市
張間利春　外交官　青森市
早坂三吉郎（五朔）　彫刻家　弘前市
花田朝吉　通信社記者
花田陽之助　會員
濱中正一　大阪時事新聞記者經濟部長
濱名剛（石戸谷剛改）　刻刻　上、七戸町
袴田勝太郎　教員　弘前市
上、下田村

ひの部

廣田傳藏　教員講習所講師兼東京市視學　西、深浦町
廣野良一　船長　弘前市
平川鐵太郎　驛長
平田泰吉　東京每日新聞記者　弘前市
平田平三　牧師　弘前市
平田五郎　滿鐵社員　弘前市
平田恒五郎　砲兵少佐　三、八戸町
東山鐵三　土木建築請負業　弘前市
平野信助　將棋師匠五段　青森市
平野勇造　建築技師　下、大畑村
樋口英行　會社々長　弘前市
日野重三郎　メリヤス製造、勳八等　三、三戸町
久水英夫　中學校教諭　三、八戸町
福士進　岩手縣農林技師　上、七戸町

朝鮮總督府官房
ルーマニヤ公使館內
神奈川縣橘樹郡高津村諏訪川原
東京府下瀧野川七〇
大阪市住吉區天王寺町一〇四九
兵庫縣武庫郡御影町
東京府下澁谷町圓山九八
函館中學校

東京市役所
横濱市伊勢町四ノ八五
秋田縣仙北郡長野村
東京每日新聞社編輯部內
横濱市本牧町和田山下二八七
大連市滿鐵調査課
東京野砲一聯隊（大正十五年調）
札幌市南丁目西六丁山鼻新道四一五
東京府下澁谷町下道四ノ三一〇
東京市本郷區上富士前町一三三
北海道苫小牧
東京市本所區柳島町一一〇
盛岡中學校
岩手縣衛生舍

福士民藏　東京肥料日報社主　弘前市
福士貞吉　教授　弘前市
福士繁吉　福井縣社會教育主事　北、梅澤村
福士直次郎　教員　南、黑石町
福士幸次郎　詩人　弘前市
福士德太郎　海運業　北、金木町
福士寶次郎　遞信省經理課書記　弘前市
福士米次郎　山一證券福岡支店長　青森市
福士末之助　東京高等師範學校教授兼文部省事務官　弘前市

ふの部

福田祐英　新聞記者　三、八戸町
福田一郎　海軍機關大尉　三、八戸町
福田寬一郎　札幌保線事務所技術掛主任　弘前市
福田貞三郎　海軍少佐　南、女鹿澤村
福井克雄　郵便局長
福島貞次郎　農業　中、豐田村
藤田謙一　實業家　弘前市
藤田尙德　海軍省人事局長少將
藤田卯二六　醫學博士　三、五戸町
藤田清之助　洋食店　三、小中野町
藤田元三郎　農業　三、小中野町
藤田末類二　郵船會社社員　弘前市
藤田潔　牧師　弘前市

東京市深川區松村町五
鳥取高等農業學校
福井市城町官舍
東京府豐多摩郡杉並町阿佐ケ谷七九八
東京市外世田ケ谷太子堂西山四八五
廣島市宇品町廣島郵船組
朝鮮京城府南米倉町一三〇
九州福岡市山一證券支店
文部省普通學務局
盛岡市岩手每日新聞社
軍艦嵯峨
札幌市北九條東四鐵道官舍
横須賀鎭守府
北海道宮ノ下郵便局
ブラジルサンパウロ州イガラッパ驛フンドウ耕地
東京市外平塚蛇窪
東京府下中澁谷
福岡市極樂寺町
北米加州ナパ市セントオーク二四
北米加州フイアクイールド
横濱市青木町一七八〇
名古屋教會

藤田忠仁	内務省技師	弘前市	東京市衞生試驗場（神田區和泉町）
藤村與六	中學校長	弘前市	横濱第三中學校
藤井智鎧	教誨師	八戸町	函館刑務所官舍
藤井達也	代議士		東京市芝區高輪北町四八
藤林良男	函館新聞營業部長	弘前市	函館市地藏町一一
藤野德太郎	會社員		天津日本租界隆和公司内
藤岡彦衞	步兵大尉	弘前市	朝鮮咸興步兵第三十七旅團司令部
藤岡榮朗	新聞記者	中、和德村	仙臺遞信局監督課長兼海事課長
船水喜幸	遞信書記官	弘前市	北海道帶廣町西四條五丁目四
船水季信	請負業		東京大井坂下二六九七（東京イリス商會内）
船水武五郎	會社員	弘前市	シャトル市正金銀行支店内
船木芳男	銀行員		東京市赤坂區青山南町四ノ二三（メソヂスト派婦人傳
古田とみ子	宗教家	三、八戸町	道團長）
古館徹郎	中學校教諭		新潟縣中學校

ほの部

堀内文城	歐洲航路運轉士	西、岩崎村	日本郵船會社
堀内喜代勝	郵便局長		北海道鹽谷郵便局
堀野瑩藏	鐵道業員	三、八戸町	朝鮮京城府鷺梁津停車場官舍
本多龍藏	商業	弘前市	大連聖德街口區一九
本多齊	元牧師	弘前市	東京市西大久保一七九
本間德雄	會社員		加州ロスアンゼルス市ロスアンデルス街一〇三
細川正	前衆議院守衞長	（弘中卒）	イノグルホテル
			東京市外下荻窪三九一

松岡金次郎	實業	三、八戸町	東京市牛込區神樂坂
松岡正男	マスターオブアーチ新聞社長	三、八戸町	朝鮮京城府京城日報社
松岡八郎	雜誌婦人の友記者	上、三本木町	東京府下雜司ヶ谷上リ屋敷一一四八
松倉儀助	步兵少佐		神奈川縣湘南中學校服務
松橋達生	會社支配人	青森市	臺灣新竹電燈會社
松島友次	早大講師	三、三戸町	東京市外池袋一一五九
松尾久太郎	元大阪輜重兵四大隊大佐	上、野邊地町	（大正十五年調査）
松本福次郎	吏員	北、	南滿洲公主領產業試驗場畜產課
松本與三郎	憲兵少佐隊長		久留米憲兵隊
松本作太郎	漁業	上、野邊地町	北海道余市
松本彦次郎	高等學校教授	下、川内町	岡山市國富町第六高等學校
松村辰之助	漁業	青森市	北海道小樽市
松村金助	時事新報記者	弘前市	東京市外馬込町一〇九三
松田令司	辯護士農林業	中、堀越村	北海道函館汐見町
松田武之丞	辯護士	南、六鄕村	東京市麻布區富士見町九
松田岩次郎	帝國海軍協會社員		東京市外大井町十九
松井禮七	東齒教授	南、黑石町	東京市外豐多摩郡杉並町阿佐ヶ谷五五二
松井武任	技手署長	弘前市	新潟縣村松營林署
松井善四郎	新聞社員	弘前市	秋田魁新聞社
松山莊兵衞	鐵道員	北、板柳町	朝鮮京城府漢江通一六鐵道官舍
松山翠	荒物商	弘前市	東京市小石川區西青柳町一
松山祐三	步兵少佐	弘前市	陸軍士官學校生徒隊付
松山友則	村長	弘前市	北海道中川郡豐頃村茂岩
松山三郎	金貸業	（八中卒）	北海道旭川
松下正壽	留學		米國バルチユモア州

松下芳	食料品賣込業	八戸町	北米加州サンペードルベーコン
松尾光次郎	北海道拓殖銀行員	上、三本木町	北海道札幌市北四、西五ノ一
前田光世（舊名英世）	柔道家	弘前市	南米ブラジル
前田利貞	新聞記者	三、八戸町	北海タイムス社小樽支局
前田清	新聞社	弘前市	埼玉縣浦和町八一八
前田禮治	東京國際通信社長	青森市	東京府下日暮里渡邊町一〇四〇
前田家利	會社重役	弘前市	京都市下京區六角通堺町西入堀上町
前田龜千代	辯護士	北、	東京市神田區仲猿樂町十七番地
前田尙武	桑道氣合術教授	中、大浦村	東京市神田區仲猿樂町
前田美保子	琴指南	弘前市	東京府下豐多摩郡下落合三七〇
前田慶藏	畫家	弘前市	東京市京橋區山城町三鳩山方
前田元四郎	辯護士	弘前市	樺太豐原町
前田松太郎	駄屋	弘前市	仙臺聯隊區司令部
間下誠意	中佐	弘前市	築城部津輕支部
間山清	歩兵少尉	弘前市	横濱市西戸部町六五六
間山鶴勝	工兵少尉	弘前市	東京市京橋區北島町
間山淺一	船長	弘前市	米澤市清水町官舍
柾木逸郎	檢事	上、七戸町	大連市越後町四六
槇克己	辯護士	三、八戸町	盛岡市商工館金工部
蒔田三千藏	三井物產會社員	弘前市	仙臺供託局
蒔田龍	工藝美術	弘前市	山形市香澄町鐵道官舍
蒔苗完三	裁判所書記	南、黑石町	東京市牛込區若宮町三二
丸瀨寅雄	山形驛長	弘前市	津市三重町
益子愛太郎	東洋葉莫會社社長		新潟縣新津町山谷鐵道官舍（目下外遊）
益子梓	東洋紡績津工場長		
	新津運輸事務所長		

みの部

三上義雄	果樹園藝業	中、駒越村	南滿洲熊岳城東部六號
三上彥衛	神奈川驛賣店	弘前市	横濱市神奈川區青木下臺町三六五
三上貫一	郵便局長	弘前市	北海道戊尻郵便局
三上豐	傳導師	青森市	福島市美以教會
三上幸作	驛長	北、喜良市村	東北本線二本松驛
三上俊三	九州石炭鑛業會社志佐鑛業所長	南、	長崎縣北松浦郡志佐町
三上正考	新聞記者	西、	東京市日本橋區新和泉町二日本織物新報社內
三上德行	高等學校講師	（青中卒）	東京市本鄉區駒込神明町三九三
三上英夫	東神火災保險株式會社支配人	青森市	東京市千駄ヶ谷大字隱田一五〇
三上英果	神戸製鋼所播磨造船工場長	三、五戸町	兵庫縣赤穗郡波村造船所社宅五五
三上健夫	辯護士	青森市	メキシコ
三上晃一郎	辯護士	青森市	東京市本鄉區眞砂町
三浦光雄	都市計畫東北委員會技師	三、五戸町	京都市下京區東洞院通錦小路上ル
三浦義太郎	陸軍少將前二十一旅團長	弘前市	仙臺北二番町
三浦眞	報知新聞記者	東、中平內村	東京府下雜司ヶ谷鶴卷
三浦勝太郎	東京金物通信社長	青森市	東京府下瀧野川西ヶ原五四〇
三浦哲郎	滿鐵販賣課勤務社員	青森市	大連關東館三二六
三浦一雄	京城電氣會社社員	弘前市	朝鮮京城府大和町一丁目三〇
三浦修藏	外務省亞細亞局第二課長	南、大光寺村	神奈川縣鶴見東寺尾一五一二
三浦武美	滿鐵販賣所勤務社員	三、五戸町	朝鮮京城南米倉神二〇五
三浦泰雄	木材業		樺太敷香郡內路村
三浦藏吉	法學士、辯護士、農業經營		米國
三浦常太郎			

三浦辰次郎	美術雜貨店	三、五戸町	加州モンタレー市アルバラド街二三〇
三國谷三四郎	兵庫縣視學官	北、内潟村	神戸市野崎通三ノ四一
三國慶一	彫刻家	弘前市	東京市外王子町上十條一〇五五
三國勝利	銅工商	青森市	札幌市北一條東四丁目七
三和英一	滿洲日報記者	北、相内村	大連市東公園町
三和兵司	キリスト傳導師	弘前市	金澤市池田町一番町七
三好武二	官吏		北海道空知郡上赤平鐵道官舍（歐米視察中）
三關漸治	鐵道局書記、驛長	上、法奥澤村	北海道帶廣町西四條七丁目
三島桂五郎	帶廣中學校長	西、鰺ヶ澤	獨立山砲第三大隊長
三宅長成	砲兵少佐	弘前市	東京市芝區白金臺町一ノ六六
水木常太郎	實業家	南、藏館村	紐育日本大使館氣付
水木音彌	音樂家	（弘中卒）	米國コロラト州
宮館勇藏		南、田舍館村	奉天淀町七番地の四
宮館未佐雄	朝鮮銀行員	弘前市	朝鮮總督府機關英字新聞ソールプレス社
宮館貞一	新聞社長		大連市沙河口白金町一四ノ二
宮本元槌	滿鐵社員	青森市	大阪府豐能郡豐中北三丁目
宮本長治	都市計畫大阪地方委員會技師	下、大畑村	東京府北豐島郡坂橋町九二八
宮浦禮三	石川病院副院長		秋田縣能代郵便局
宮内兵太郎	郵便局長	三、八戸町	朝鮮京城吉野町一ノ九一
宮原賢治	京城稅關吏	（弘中卒）	東京府下豐多摩郡杉並高圓寺二五八
湊馨	農業	三、八戸町	米國コロラド洲
湊雄勝			長崎市大浦南山手町
源稻勝	三菱長崎造船所員		

むの部

棟方志功	畫家	青森市	東京市外阿佐ヶ谷九七
棟方八郎	三井物産三池支店勤務	南、藏館村	大牟田市原山
武藤章造	大垣區裁判所判事	弘前市	岐阜縣大垣市西船町
武藤昌知	名古屋鐵道病院内科副院長 醫學博士	三、八戸町	名古屋市東區千代町一丁目三
村松榮	滿鐵社員	上、藤坂村	南滿洲公主嶺農事試驗場
村松茂	帝國製絲會社員	青森市	大阪西淀川傳法町同社大阪製品場工社宅、洋行中
村上其一	醫師	南、黑石	東京府下高田町學習院前
村上要作（元綾川）	相撲年寄（千賀の浦）	三、八戸町	東京市本所區藤代町
村井德三郎	商業	上、百石村	札幌市大通西十八町目
村井倉松	外務省通商局第一課長兼第三課長	青森市	東京府下入新井町不入斗
村井定一	飛行三等操縱士	西、川除村	東京府下代々幡町幡ヶ谷一〇四八
村田秋水	出版業	弘前市	浦鹽斯德マルチロウスカヤ一〇ノ六
村田清三郎	安田商店浦鹽斯德支店結		

めの部

女鹿學郎	梅田商會起毛工場主任	三、	東京四谷區愛住町七六梅田商會内
女鹿哲男	北海道廳拓殖部地方農林技師	三、八戸町	札幌市北一、西一八官舍

もの部

毛内靖胤	明野飛行學校長、陸軍少將	青森市	東京市牛込區余丁町三〇
毛内効	海軍大佐	青森市	那珂艦長
盛田保三	中央化學研究所代表社員	上、七戸町	東京府荏原郡大崎町大字下大崎二番地
盛長吉	大湊興業會社監査役 主計少佐	西、森田村	横須賀市稻岡町白濱官舍二二
	横須賀海軍建築部第一課部員		

盛長次郎	旅順炭坑技手	西、森田村	海軍省主計局
森田重次郎	辯護士	上、浦野館	東京市神田區北神保町八
森元吉造	醫師	青森市	南滿洲本溪湖醫院
森旭	漫畫家	南、黑石町	東京市本郷區駒込神明町
森菊兒	東洋捕鯨株式會社主事		大阪市住吉區天王寺町二三一九

やの部

山田幸五郎	海軍造兵大佐理學博士	青森市	東京市牛込區市ケ谷田町一丁目一八
山田實	神戸製鋼所技師	西、岩崎村	神戸市脇濱神戸製鋼所
山田兼吉	驛長	南、碇ケ關村	總武本線小山驛
山田伊代吉	朝鮮總督府遞信局郵便爲替貯金管理所勤務	弘前市	朝鮮京城府黃金町四ノ一七一
山田豐吉	看板業	東、	札幌市南一、西七一二
山田金作	東京時事新報營業部員	三、五戸町	東京府下巢鴨町
山田金藏	牧師	青森市	山形縣米澤メソヂスト教會
山田敏正	醫師	(弘中卒)	東京市小石川區林町一六齋藤方
山田敏行	第一火災海上保險會社取締役	弘前市	東京市芝區白金今里町八九
山口道尹	經理學生選科學生主計少佐		經理學校選科
山口清助	滿鐵奉天地方事務所會計課次席	南、金田村	奉天八幡町六
山崎堅司	滿鐵	(弘中卒)	大連市播磨區二ノ三大連滿鐵本社
山崎啓次郎	服商	八戸町	北海道倶知安町
山鹿旗之進	吳服	弘前市	神奈川縣青木町桐ケ畑一七四二
山鹿讓	牧師	(弘中卒)	加州シヤトル市
山鹿八郎	牧師	南、藏館村	南洋セレベス大谷農園
山形稻城	滿鐵鐵道部員		大連惠比壽町宿所

山本誠一	醫學博士	弘前市	東京市牛込區南町三一
山中千之	前總領事	弘前市	東京市麹町區上二番町三二珍田方
山井三七	教授	(弘中卒)	滿洲醫科大學
山井浩	檢事	三、八戸町	東京區裁判所
山下增五郎	請負業	弘前市	東京市日本橋區濱町二ノ二
山村三郎	郵便局長		北海道天鹽郵便局
築瀨剛	濠洲メルボルン支店詰		濠洲メルボルン
築田岩雄	辯護士		麹町區平河町五ノ四
柳澤政吉	新聞記者	三、五戸町	東京中外商業新報社
柳田泉	著述家	三、三戸町	東京市小石川區西丸町二五
矢幅三郎	大倉組鑛山部課長辯護士	三、三戸町	東京市本郷區駒込林町二一六
矢幅三次郎	盛岡銀行支配人	北、梅澤村	
安田喜代治	銀行重役		南　米
安田千代吉	教諭	弘前市	朝鮮黃海道海州高等普通學校
安田新助	金銀杯木杯製作販賣業	(弘中卒)	若松市紺屋町一八
八木澤貞銳	工兵中佐	三、八戸町	千葉縣千葉郡都賀村鐵道第一部隊
八木橋力	夕張炭礦	弘前市	北海道夕張郡中仁町
八木澤元三郎	漁業		北海道濱益郡濱益村大字川下字毘砂別

ゆの部

幸田勇貴智	元西郡長	南、藤崎町	東京市小石川區茗荷谷
幸田俊之助	辯護士	弘前市	東京市小石川區大塚窪町二九
油布勝雄	東京日日新聞記者		東京市外青山原宿

よの部

横山柾太郎	横濱商工會議所外國部主任	弘前市	横濱市中區本牧町天德寺下七二〇
横山武正	歩兵中佐	東、筒井村	
横山彌太郎	海軍少佐	北、	淀運用長
横山時彦	辯護士	青森市	東京市麻布區櫻田町五九
横内石松	商工品臨時窒素研究所技師	青森市	東京市外目黑七五二八
横内忠三	漁業主	東、野内村	小樽市
横内忠吉	尺八指南	青森市	金澤市高岡町上藪の内四〇
横島直彌	製菓屋	弘前市	北海道旭川
米澤喜作	實業家	上、七戸町	大阪市天王寺區筆ケ崎町一七
米澤嚴治	驛長	上、七戸町	秋田縣北秋田郡鷹の巢町
米澤治太郎	判事	上、七戸町	札幌市北大通西十二丁目裁判所官舍
米澤末治	二等軍醫正	弘前市	岡山衞戍病院長
吉澤清藏	教會社授	上、七戸町	秋田鑛山專門學校
米内山庸夫	副領事	上、七戸町	横濱市神奈川區二本榎町二八三〇
米内山震作	關東廳旅順民政署理事官	上、七戸町	在支那濟南總領事館
米内山昌三	會社員	東、	旅順市鯖江町三五
米田惣太郎	漁業	青森市	ニューヨーク
吉田義隆	著述家	上、野邊地町	札幌市北一條東十一町目
吉田小南	南宗畫家	南、	神奈川縣鎌倉町大倉九六〇
吉田保任	漁業		東京市外中野町字中野三三一
吉谷吉藏	銀行員		札幌市南八條西六丁目
吉田稔己	英文貿易年鑑編纂中		神奈川縣逗子町字新宿二一三四
吉町榮次郎	工學博士北海道帝國大學工學部長教授	弘前市	大阪府箕面村牧落百樂莊二一
吉町太郎一		弘前市	加州桑港ブッシュ街四四四
			札幌市北十一條西三丁目

余地久七	辯護士	東、鑓田村	東京市本郷區菊坂町

わの部

渡邊菊圃	醫師	三、八戸町	札幌市在住
渡邊敏	郵便局長	東、	横濱市青木町東輕井澤
若松福三	中外商業記者	上、野邊地町	千葉縣東葛飾郡葛飾村小栗原
若松伊三郎	洋服裁縫	青森市	札幌市北二東一、三
著山邦男	日本橋病院內科部長	北、松島村	東京府下上大崎五五三
和田山蘭	小學校長、歌人	弘前市	東京府下北多摩郡昭和村大神
和田德三	日本農園主	青森市	東京府下澁谷町中澁谷道玄坂二九九
和田喜藏	三菱鑛業會社九州寶炭所勤務	弘前市	福岡縣若松市堺町五丁目三菱社宅
和島久三郎	製麵工場主	北海道旭川	
和歌山玉治	貸地業	青森市	神奈川縣逗子町東小坪二、〇〇二、二九
渡邊大江	官吏	三、五戸町	神奈川縣小和停車場內
和田友次郎	臺灣銀行員	弘前市	東京府下巢鴨町一、二二四
岩林之助	鐵道技手	弘前市	山形縣新庄町鐵道官舍
和田良三	教諭		東京立教大學附屬中學校
渡邊節	技師		福島縣中村町字砂子田五八三
渡邊信吾	朝鮮銀行員		京城府南大通り三ノ一、一一〇
渡邊豐四郎	教諭		福岡縣八女郡八女工業學校
和田喜四郎	安田銀行支店員	青森市	函館市矢地頭町五二
和田馬助	憲兵隊司令部	上、七戸町	朝鮮京城府黃金町二憲兵隊官舍
和田秀雄	農林技手		岐阜縣郡山郡上保村岐阜縣種畜場

博士一覽

學士院賞授賞

畑井新喜司　（理學博士正五位）明治九年東郡小湊村舊黑石藩士畑井泉氏二男に生る。弘前中學を半途にして東北學院に入學、同校を卒業後第一高等學校理科助手となり「蚯蚓」に關する論文を米國シカゴ大學へ提出してフエローシップを授與され、同三十七年渡米シカゴ大學へ入學、卒業後ペンシルバニヤ大學教授となりウインスターインスチユートを主宰し動物生理及神經系統の研究に沒頭し、幾多の研鑽を積み米國では植物學なら埃太利のウヰンナ大學教授ハンスモーリツシユナ博士動物學なる米國ペンシルヴアニア大學教授畑井氏を以て學界の双璧であると云つてゐる。大正四年東北帝大理學部新設せられるや招かれて同大學教授となり爾來一年の内八ヶ月を東北帝大に、四ヶ月間を渡米してペンシルバニヤ大學に教鞭を取る事になつた。東北大學着任後本縣東郡淺蟲海岸に大學の臨海實驗所並に水族館建築のために努力し更にその主張に依り八甲田山に高山植物研究所が設置せられた、尙農學部を設置すべき計畫に參加し盡力する所あつた、大正十四年白鼠の研究に對し學士院賞を授與され尙文部省から學術研究會議員に推薦されるに至つた。同氏は又ドクトル・オブ・フヰロソフーをペンシルバニヤ大學より贈られた。

縣出身の博士

（五十音順）

阿部竹之助　（醫學博士）明治二十四年北郡七和村に生る。同四十三年弘前中學を卒業し第二高等學校を經て大正七年九州帝大を卒業後本縣々立病院内科に奉職し同十三年再び九大に留學同十五年歸院して論文「肺の病的生理學に關する臨床的並に實驗的研究」を昭和二年六月九大教授會へ提出し審査を受け醫學博士の學位を授與された。目下同院内科醫長兼理療科部長

泉山　幸吉　（醫學博士）明治二十七年八月八戸町に生る。大正二年八戸中學を卒業第二高等學校から東北帝大醫學部に進み同十年四月卒業後直ちに同學部醫學部助手となり關口外科で研究、同十五年三月同外科講師を囑託され、同四月日本外科學會評議員に選ばれた、昭和二年七月學位請求の論文を東北帝大教授會へ提出審査を受けて學位を授與された。其後赤十字宮城支部石ノ卷病院副院長となり今日に至つた。

岩川　克輝　（醫學博士正五位勳四等）明治十三年青森市に生る。本縣立弘前中學から第二高等學校を經て同三十八年十二月東京帝大醫學部を卒業後更に大學院へ入り醫學部助手として藥物學專攻、同三十九年四月醫術開業試驗委員被仰付、同四十三年大學院を卒業し學位請求の論文を提出し同四十五年四月より小兒科學專攻の爲め三井慈善病院、大學病院へ臨床的研究に從事、同年七月醫學博士を授與された。大正元年八月新潟醫學專門學校教授となり、同二年同校附屬病院小兒科醫長、同八年小兒科學研究の爲めに滿二ヶ年獨逸、米國、英國、瑞西、各國へ留學し同十一年四月歸朝して新潟醫科大學教授、普通試驗委員長同大學附屬病院長を拜命今日に至つてゐる。論文は「ロベリン」中毒に於ける呼吸靜止の原因外四編で、著書としては小兒科寶函（太田孝之共撰）がある。現住所新潟市南濱通二ノ五二一

今淵　恒壽　（醫學博士）明治七年十月八戸町今淵家に生る。同二十六年第一高等學校から東京帝大醫學部へ入學同三十三年卒業し同三十五年千葉醫學專門學校教授、産科婦人科學講座擔任、同四十一年二月京都帝大及福岡醫大助教授に任ぜられ文部省から産科婦人科學研究のため獨逸へ留學を命ぜられた。同四十三年歸朝同年五月九大總長の推薦に依り博士の學位を受けた大正八年四月九大醫學部教授及同學部附屬醫院長となり同十四年辭職、醫院開業著書『産科學』上下二卷『産科手術學』等あり。

内山　圭吾　（醫學博士）明治二十四年八戸町に生る。同四十三年八戸中學を經て大正四年第一高等學校に進み同九年七月東京帝大醫學部を卒業大學院に入り内科學を引續き研究し、同十四年學位請求の論文を母校教授會に提出審査の結果博士の學位を授與された。其後東京市本郷區駒込病院副院長に就任今日に至つた。

工藤外三郎　（醫學博士）明治五年三月京都市に生る。舊弘前藩士工藤則勝氏の養子となる。同二十六年第一高等學校から東京帝大醫科大學に入り三十年十二月卒業同校副手に任ぜられ同三十一年六月助手となつた、三十二年七月岐阜縣立病院内科醫長として赴任し同年十一月に副院長となつたが三十二年二月辭して京都市立日詰病院長に選任せられ同年九月京都府立醫學校教諭、府立療病院内科部長を兼務した。同三十九年五月京都府より小兒科學及内科學研究の爲め二ヶ年獨逸へ留學を命ぜられ、四十二年歸朝京都醫學校長代理を務め大正三年校長となつた、四十三年四月論文獨文「攝護腺病理補遺」外五編京大教授會を通過して醫學博士を授與された。大正六年七月依願免官となり京都市上京區押小路通富小路東入へ醫院開業し今日に至つた。

郡場　寛　（理學博士正五位）明治十五年青森市榮町に生る。同三十三年弘前中學を卒へ第二高等學校を經て東京帝大理學部を卒業後大學院へ進み大正元年卒業、論文「綬草の拗捩に關する器械生理學的研究」を提出東大の審査を受け同三年理學博士の稱號を授與されたが之より先二年北海道帝大農學部講師として赴任し同四年同學部教授に進み同六年歐米へ留學を命ぜられ九年歸朝し帝都帝大理學部教授となり、文部省から學術研究會議員に推薦され又た御大典記念京都植物園長を兼ねて今日に至る現住所京都市上京區小山堀池町一一

兒島　武夫　（醫學博士）明治二十二年三戸郡八戸町に生る。大正五年東京帝大醫學部を卒業し大學院に入り醫化學教室隈川教授指導下に研究し、轉じて稻田内科醫局勤務、九年三月弘前病院長に招聘されて就任したが同十三年辭職し東北帝大醫學部生理學教室で佐井教授の下に生理學專攻、昭和三年一月東北帝大へ論文提出醫學博士を授與され、爾來同學部山川内科講師となつたが後辭して本年六月弘前市新鍛治町に醫院開業。

今　裕　（醫學博士正五位）明治二十九年二月弘前市舊弘前藩今敬一氏の八男に生る。同二十九年弘前中學を卒へ三十三年十一月第二高等學校醫學部を卒業、同年十二月京都帝國大學醫科大學助手となり同三十七年九月臺灣總督府醫學校助教授となり三十九年十月渡歐し獨逸ミユンヘン大學で病理學を專攻し、四十一年には轉じて伯林大學及國立傳染病研究所で細菌學及病理學を專攻四十二年歸朝して再び臺灣總

督府醫學校に勤務、後辭して東京慈惠會醫學專門學校教授と爲り病理學及病理解剖學その外細菌學を擔當し同年七月獨文「臺灣に於ける地方病性赤痢の病理學的研究」外四編の論文を京大教授會に提出博士の學位を受けた、大正九年八月再び歐米留學の途に上り十年十二月歸朝北海道帝大醫科大學教授を命ぜられ、病理學講座を擔任し十一年二月には大學評議員となり今日に至つた著書『近世病理解剖學』、『近世病理學總論』『病理組織寫眞圖譜』等がある。現住所札幌市北十條西三丁目。

齋藤 周藏 (醫學博士)明治十七年南郡光田寺村に生る。同三十六年弘前中學を卒業し第二高等學校より東京帝大醫學部に進み、大學院を大正四年卒業醫化學及內科學を專攻、同十三年一月から再び東京帝大醫學部血清學教室で研究を續け同十五年五月一年間歐米を視察した。昭和二年七月論文「沈降原素の共存問題に就て」を母校に提出教授會の審査を經て博士を授與された。目下弘前伊東病院長、同市元長町に居住。

神 竹之助 (醫學博士)明治十一年十二月北郡五所川原町に生る。同三十五年千葉醫學專門學校を卒業し同四十二年八月獨逸へ留學ケーニヒスベルヒ大學外科レキセル教授の下に外科學を專攻、後墺國ウインナー市アヒゼルスベルヒ研究所に入り同四十四年九月歸朝した。同年十一月青森市濱町へ病院を開業今日に及んでゐるが大正十三年獨文「關節病理學筆純性筋萎縮學說に關する實驗的追加、生活組織の運命並に宿地の蒙むる影響を叙して生活タンポン止血機轉の解說に及ぶ」論文を北海道帝大へ提出し醫學博士を授與された。目下は自ら院長として外科を擔任しその外內外理療科を設けた。

關場不二彥 (醫學博士)慶應元年十一月福島縣若松市舊會津藩士の家に生れ後本縣下北郡大湊村に移る。明治十五年十一月東京外國語學校から東京帝大醫學部獨逸科に入り十七年十一日卒業本科に進み二十二年十二月卒業同學部助手を拜命して第一醫院外科醫局勤務、同二十五年北海道へ出向を命ぜられて公立札幌病院副院長となり二十五年九月には病院長となり二十六年十一月依願解職となつた。三十一年四月獨逸伯林大學へ入學したが退學して英吉利、蘇格蘭、亞米利加を經て三十二年歸朝札幌市に北辰病院を開設以て今日に及んでゐる。公職としては大正五年以來北海道醫師會長に就任現在に至つたがその外札幌醫師會長檢疫委員、市會議員、市會副議長に就任同九年には東京帝大教授會へ論文を提出し博士號を受領した。著書多數あるが『あいぬ醫事談』、『腹膜結核及剖腹術』等がある。同氏の令姉は林權助男の夫人である。札幌市北一條西一丁目五番地に居住。

館山林太郎 (醫學博士)明治二十四年青森市蜆貝町館山宇一氏の長男に生る同四十二年青森中學を卒業し第二高等學校から九州帝大醫學部へ入學し大正六年七月卒業後同學部副手となり產科婦人科を專攻同九年醫局長となり同十一年沖繩縣立病院產科婦人科部長を拜命した。同十二年三月獨逸へ留學しライプチヒ大學で研究をなして十四年九月歸朝引き續き九州帝大醫學部で研究を續け十五年三月學位請求の論文を母校へ提出審査を受け博士號を授與された同十五年佐賀縣立病院副院長に就任、昭和二年辭して同年七月青森市浦町に開業した

藤田卯二六 (醫學博士)明治二十三年三戶郡市川村に生れ後五戶町に轉住。同四十二年八戶中學を經て第二高等學校へ進み大正五年九州帝大醫學部卒業此の間三戶町故大村定吉博士の後援を受けた。卒業後副手から講師となり第一內科教室で內科學專攻同十三年二月論文を九大へ提出し博士號を受けた。引き續き附屬病院に勤務してゐる。現住所福岡市極樂町

武藤 昌知 (醫學博士)明治十九年山梨縣に生る。明治四十一年四月東京私立郁文館中學から愛知醫學專門學校に進み大正二年卒業副手となり病理學を專攻、四十一年「吸蟲」に關する論文を母校に提出して授賞された。同五年九月京都帝大醫科大學に留學し同七年七月「肝臟ヂストマ」に關して文部省から奬學資金一千圓を授賞越えて十年三月再び文部省から奬學資金一千圓を受け更に京大教授會の詮衡に依り學位を受領、同年四月北里研究所に於て「肝臟ヂストマ第一中間宿主に關する研究」で故淺井醫學博士奬學資金記念牌及記念賞金を贈與された。大正十二年七月鐵道醫に任ぜられ名古屋鐵道病院內科副醫長を拜命今日に及んでゐる。同氏の嚴父は八戶町番町に眼科醫を營み、又令兄健氏は青山學院神學部教授である。

山田幸五郎 (理學博士海軍造兵少佐從六位勳五等)明治二十二年九月青森市新町に生る。青森中學から第一高等學校を經て大正二年東京帝大理學部を卒へ大學院へ入り長岡博士の下に輻射學專攻、同三年九月より大學院在學のまゝ母校一高の講師として數學及物理學を講義同五年七月海軍中技士に任ぜられ同八年八月造兵監督官として英佛二ケ國へ出向を命ぜられた。同十年九月歸朝同十一年七月理學博士となり同十三年十二月には造兵少佐に任官した。同下海軍省艦政本部出仕、著書は『幾何學論文集』、『第一、第二、光學の智識』等あり、倫敦フエルロー、オブ、インスチユート、オブ、フイズイックス及フエルロー、オブゼ、オプチカル、ソサイテーと關係してゐる。現住所東京市牛込區市ケ谷田町。

山田 誠一 (醫學博士)弘前市出身、大正三年東京帝國大學醫學部卒業、後同學部附屬病院稻田內科で內科學專攻、大正十三年醫學博士を授與され引き續き稻田內科に勤務、東京市牛込區南町三十一番地に居住。

吉町太郎一 (工學博士正四位勳四等)明治六年十月弘前市新寺町弘前藩士吉町官輔氏長男に生る。同三十一年東京帝大卒業後母校工學部助教授となり同三十四年英吉利獨逸へ三ケ年留學し三十七年歸朝名古屋高工教授となり後轉して九州帝大工學部へ移り九大總長に推薦されて工學博士となつた。大正四年同工學部長に進み同十三年北海道帝大に工學部が新設されるや工學部長として轉任、教授を兼任し今日に至つてゐる。現住所札幌市北十一條西三丁目。

外國學位

高杉榮次郎 (神學博士從五位)慶應三年六月弘前市に生る。明治十八年六月東奧義塾を卒業後渡米インデイアナ州デポー大學に學びポーデンビーバウン教授の下に神學及哲學を專攻之に關した論文を提出して神學博士の學位を得て二十四年九月歸朝、鎭西學館、東奧義塾及青山學院に轉々教鞭を執り三十二年十月再び渡米スイスイラキユー大學及ハーバート大學兩大學院に留學し三十九年英國に渡り同年八月歸朝、東北帝大農學部豫科へ移り同學部教授として今日に至る札幌市北六條三丁目に居住。

高杉 瀧藏 (哲學博士、明治二年弘前市小人町に生る。東奧義塾より東京青

山學院へ入學同校を卒業し渡米、オハイオ州マウントユニオン大學、インデイアナデポー大學に學び哲學博士を授與され後十數年にして歸朝し日本大學教授から早稲田大學教授となり今日に至つてゐるが同氏は北大教授高杉榮次郎氏の實弟である。同氏は又早大野球、庭球兩部長として重きを爲す。東京市外杉並町天沼四六九に居住。

佐藤　忠雄　（醫學博士）明治六年弘前市和德町に生る。同二十二年八月東奥義塾を卒業、同二十七年七月東京慈惠醫學校を卒へて東京市順天堂病院に勤務、同二十九年四月弘前市に病院を開業したが同三十四年單獨で獨逸へ留學しミュヘン大學に學び三十六年六月論文「肝臟損傷」に就てを提出しドクトル・オブ・メヂチーネーの學位を受け歐洲の醫界を視察して三十七年二月歸朝再び東京順天堂病院に入り同年十月辭して弘前市に醫院開業し今日に至つた。

笹森　順造　（哲學博士）明治十九年五月弘前市に生る。同三十八年四月弘前中學を出でゝ早稲田大學政治經濟科に學び同四十三年卒業し大正二年渡米。コロラド州デンバー大學院へ入學、同四年マスダー・オブ・アーツの學位を得た。在學中デンバー新報の主筆となりその他コロラド州日本人美以教會主幹兼牧師、日本人會民勢調査部主任、カルフォルニア州南加中央日本人會書記長などに就任、大正十年東奥義塾より招かれて歸朝し塾長となつた。昭和二年四月歐米各國漫遊の途に付き同年六月米國デンバー大學でドルトル・オブ・フキロソフキーを授與され同三年一月歸朝。倘氏は劍道五段、武德會精練證を授與され武德會本縣支部名譽教師である。

藤井　達也　（法學博士）明治二十一年七月八戸町に生る。同四十年八戸中學を出て第七高等學校に進み東京帝大獨法在學中故横田千之助氏の知遇を得て米國へ留學しノースウエスターン大學へ入學、法學博士の學位を得て同十三年歸朝同年五月代議士選擧に本縣下北、上北兩郡より立候補して落選した。後政友會院外團幹事及政友會遊説部理事となり、昭和二年二月の總選擧に再び本縣第一區より出馬して當選した。目下東京市芝區高輪に居住。

故人

故一戸　直藏　（理學博士）明治十七年西郡越水村に生る。東奥義塾、第二高等學校東京帝大理學部を卒業後東京天文臺に入り同三十八年渡米してシカゴ大學附屬エルチフ天文臺で天文學を修め約二ケ年にして歸朝。後東京帝大理學部の講師となり同四十四年理學博士を授與され再び東京天文臺に入所したが後辭して雜誌「現代の科學」を發行その他著書が少くない。大正九年十月恩師寺尾壽博士の「何故に其の非を改めざるや」の一文を速記して發行科學界の輿論に訴へたが是が絶筆となり同年十一月歿した。

故大村　定吉　（醫學博士）慶應三年一月三戸町に生る。小學校卒業後町立病院へ藥局生として雇はれその後千葉醫專を卒業して東京帝大病院、赤十字病院に奉職、同二十七年日清戰役及三十七八年の日露戰役に從軍し凱旋後東京傳染病研究所へ入所北里博士の指導を受け明治の末年神戸市山の手に醫院を開業、大正五年再び北里研究所に入り三十年論文「黄色血滿鹽化色法に依る有機物中微量鋼の定量法」外一編を慶應大學教授會に提出し博士號を授與された。後再び神戸に開業したが昭和二年死去した。

故大湯　正雄　（理學博士正六位）明治十五年弘前市馬屋町に生る。弘前中學を三十三年四月卒業仙臺二高へ入學、同三十七年七月東北帝大豫科に進み轉じて東京帝大理學部へ入り地質學を專攻同三十九年大學院へ入り同四十三年一月同學部助手となつた。大正元年十二月東北帝大理學部助教授に任ぜられ同六年十一月鑛床學研究の爲め二ケ年英米に留學したが異國に病み九年一月歸朝、東北帝大理學部教授となり同年四月總長推薦で理學博士を授與されたが病重く十年八月歿した。

故坂岡末太郎　（工學博士從四位勳三等）明治二年十月南郡常磐村に生る同二十七年札幌農學校を卒業同年九月北海道廳事業手となり、同二十八年三月技手及臨時鐵道敷設技手に轉じ、同三十年五月鐵道部技師に進む、同年十一月北海道廳技師となり永山監督區監督長兼旭川監督區監督長、同三十三年札幌農學校土木工科講師、同三十五年同校教授及土木工學科主任となつた。同四十一年九月には土木工學研究の爲二ケ年間英、米、獨、佛各國へ留學を命ぜられ同四十三年七月歸朝、北海道帝大教授となり大正二年本縣人よりなる交友會長幹事長に就任し同七年には同大學附屬土木專門部主事及教授となり同年工學博士を授與された。同九年には札幌區より選出されて區會議員となり同十二年病歿した。

故笹森宇一郎　（神學博士）慶應三年弘前市に生る。東奥義塾卒業後渡米しインデアナ州デポー大學に學び神學博士の學位を授與された。明治二十六年歸朝し長崎市鎭西學院長に就任したが大正十一年長崎市で歿した。

故島　柳二　（理學博士）明治七年七月東京に於て舊津輕藩士島一之氏次男として生る。獨逸協會學校より第一高等學校へ進み明治三十二年七月東京帝國大學醫科大學を卒業し同三十四年仙臺醫學專門學校教授内科學擔任、同四十二年内科學研究の爲め獨逸へ留學を命ぜられ四十二年九月歸朝、同四十三年四月「兎の腦に於ける一類畸形腫」外三編の論文を東大へ提出醫學博士の學位を授與されたが同年六月若くして病歿した。

故吉崎　彦一　（神學博士）明治三年四月弘前市に生る。同二十一年東奥義塾卒業後渡米しカルフオルニア州パシフイツク大學卒業、轉じてイリノイ州エバストン神學校に學び更にシカゴ大學神學科を卒へ三十四年歸朝した。渡米中に二つの學位を得た、三十四年歸朝後二ケ年間長崎鎭西學院に教鞭を執り同三十七年から二ケ年京都キリスト教青年會主事を努めたが三十九年關西學院に去り神戸市記念傳導女學校、大阪府下パプテスト女子神學校の講師となり傍ら「神學評論」の編輯長をしてゐたが大正十二年母校シカゴ大學から神學博士の學位を贈られた。同十四年歿す。

縣内奉職の博士

（五十音順）

天木　順吉　（醫學博士正七位）明治二十三年十月愛知縣知多郡小鈴谷村に生る。同四十三年愛知縣立第一中學校卒業、大正四年第四高等學校を經て同八年東北帝大醫學部を卒業、同學部助手を拜命し同十三年東北帝大醫學部講師を囑託された。同十四年同學部助教授となり同十五年醫學博士を授與された。昭和二年四月招聘されて弘前病院長となつた。

久保木保壽　（醫學博士正六位）明治十六年三月千葉縣香取郡津宮村に生る。明治三十八年第一高等學校を卒業、同四十

二年九州帝大を卒業し後副手となり助手に進み、同六年十一月九州帝大醫學部講師となり同十一年三月には醫學博士の學位を授與された。論文は「フリユクテン」の原因及成因に關する實驗的研究である、同十一年十一月招かれて本縣々立病院副院長となり兼眼科部長に就任青森縣衞生技師を命ぜられた。同十三年一月眼科學一般及眼疾患に關する衞生狀態研究の爲め歐米各國に出張したが此際內務省から歐米の虎眼豫防施設に關する調査を囑託された同十四年四月歸朝引き續き縣立病院に奉職してゐる。

齋藤　靜　（醫學博士）明治二十六年十二月福井縣今立郡舟津村鯖江に生まる、東北帝大卒業後昭和二年二月二十八日弘前病院副院長に招聘（外科）昭和三年六月五日醫學博士を授與せられたが七月二十三日辭職し十月五日から同市小道町假醫院に於て開業した。

鈴木　三伯　（醫學博士正六位）明治十三年六月宮城縣登米郡佐沼町に生る。第一高等學校から九州帝大醫學部に入り四十一年卒業し同年十二月海軍中軍醫に任官大正元年病氣の爲め豫備役に編入され後九州帝大稻田內科教室で內科學一般を研究、同二年一月茨城縣土浦町新治病院及山口縣下關市小林病院內科部長となつたが同六年一月再び九州帝大醫學部稻田內科教室で研究を續け七年十月に歐米へ留學、瑞西チユリツヒ州立醫科大學內科學教室でオツト、ネゲリー教授の下で血液學を研究し同九年十月歸朝翌十年一月本縣々立病院副院長に就任、同年「臨床的血液有形成分容量測定法に關する實驗的研究」の論文を母校に提出し博士を授與された。同十一年八月同病院々長となり今日に至つてゐる。

菅原　正　（醫學博士）明治二十七年一月宮城縣栗原郡文字村下中山に生る同四十五年仙臺一中を卒へ東北帝大醫學部專門部を大正五年五月卒業し直ちに同學部附屬醫院醫員介補を命ぜられ加藤內科に勤務、同年十一月副手となり同八年五月醫員補に進み八年五月辭して宮城縣栗原郡岩ケ崎町に開業した同十二年五月再び東北帝大醫學部の副手を囑託され生理學教室に生理學を專攻後に內科學教室へ移り昭和二年四月八戶病院長に招聘された。同年六月「副腎アドレナリン分泌に關する研究」、「脚氣に關する研究」の二論文を母校に提出し醫學博士の學位を授與された。

副島　廉治　（醫學博士）明治二十八年佐賀縣沖崎町に生る。佐賀中學、熊本五高を經て九州帝大醫學部を卒業し同學部三宅外科で刀圭を研究、昭和二年五月本縣々立病院外科部長に就任し同年七月學位論文を母校九大に提出し醫學博士を授與された。

田代　重　（醫學博士）明治二十六年二月宮城縣に生る。大正六年五月東北帝大醫學部專門部卒業後、同學部副手囑託同七年五月同助手に任命、藥物學教室に勤務同八年一月同內科學教室に轉じ內科學專攻、同十四年十二月同學部講師を囑託されたが同十五年二月醫學博士の學位を授與され同十五年四月青森市濱町神病院內科醫長に就任今日に至つた。

中條　資俊　（醫學博士）從五位勳五等）明治五年十一月山形縣南置賜郡鹽井村に生る。尋常小學卒業後農に從事、同卅年商工中學に入學轉じて三十三年千葉醫專へ入學三十五年卒業後母校內科に奉職、同三十六年內務省血精藥院技手を經て傳染病研究所助手に轉じ同四十二年本縣東郡新城村北部保養院醫長として來任同年十二月所長兼醫長となり十一年官命で歐米に留學獨逸

ライプチヒ大學病理學研究所で研鑽を積み同十三年七月歸朝引き續き保養院に勤務、昭和二年十二月慶應大學へ學位請求の論文を提出し三年六月醫學博士を授與された。

蜂谷　太郎　（醫學博士）明治二十八年東京市に生る。東京府立一中、第一高等學校を經て大正十一年九州帝大醫學部へ進み、卒業後引き續き大學院にて小兒科學を研究同十三年秋田市原病院に勤務同十五年辭して再び九州帝大醫學部醫化學教室に入り研究し、昭和三年三月本縣々立病院小兒科部長に就任、同七月論文九大教授會を通過し醫學博士を授けられ引き續き縣立病院にある。

三宅　亮一　（醫學博士）明治二十六年七月長崎縣南高來郡有馬村に生る。大正九年大阪醫大を卒業し同九年七月同大學產科婦人科副手となり十年九月慶應大學醫學部助手に轉じ川添教授の下に產科婦人科學、生理學教室で加藤教授の下に生理學を專。十五年五月歐洲へ留學、昭和元年十二月歸朝、二年一月醫學博士を授與され同年八月慶應大學講師に就任したがその年九月青森市濱町神病院產科婦人科部長に招聘せられ今日に至つた。

昭和三年十月十一日印刷
昭和三年十月十五日發行

（東奧年鑑）奧付
定價金壹圓五拾錢

不許複製

著作兼發行者　青森縣青森市大字大野字長嶋三番ノ貳號　杉森文雄
印刷者　東京市芝區愛宕町三ノ二　印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　青森縣青森市大字大野字長嶋三番ノ貳號　株式會社　東奧日報社

年齢早見表

（左方の數字は昭和四年を基準とせる年齢を表はす）

己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	丙	丁	戊
天保一〇〇元寅	天保九九二卯	天保九八三辰	天保九七四巳	天保九六五午	天保九五六未	天保九四七申	天保九三八酉	天保九二九戌	天保九一〇亥
天保九一〇一子	天保八一九二丑	天保八一八三寅	天保八一七四卯	弘化八六元辰	弘化八五二巳	弘化八四三午	弘化八三四未	嘉永八二元申	嘉永八一二酉
嘉永八〇三戌	嘉永七九四亥	嘉永七八五子	嘉永七七六丑	安政七六元寅	安政七五二卯	安政七四三辰	安政七三四巳	安政七二五午	安政七一六未
萬延七〇元申	文久六九元酉	文久六八二戌	文久六七三亥	元治六六元子	慶應六五元丑	慶應六四二寅	慶應六三三卯	明治六二元辰	明治六一二巳
明治六〇三午	明治五九四未	明治五八五申	明治五七六酉	明治五六七戌	明治五五八亥	明治五四九子	明治五三〇丑	明治五二一寅	明治五一二卯
明治五一〇三辰	明治四一九四巳	明治四一八五午	明治四一七六未	明治四一六七申	明治四一五八酉	明治四一四九戌	明治四二三〇亥	明治四二二一子	明治四二一二丑
明治四二〇三寅	明治三二九四卯	明治三二八五辰	明治三二七六巳	明治三二六七午	明治三二五八未	明治三二四九申	明治三三三〇酉	明治三三二一戌	明治三三一二亥
明治三三〇三子	明治二三九四丑	明治二三八五寅	明治二三七六卯	明治二三六七辰	明治二三五八巳	明治二三四九午	明治二四三〇未	明治二四二一申	明治二四一二酉
明治四〇三戌	明治一四九四亥	大正一八元子	大正一七二丑	大正一六三寅	大正一五四卯	大正一四五辰	大正一三六巳	大正一二七午	大正一一八未
大正一〇九申	大正一九〇酉	大正一八一戌	大正一七二亥	大正一六三子	大正一五四丑	昭和四元寅	昭和三二卯	昭和二三辰	昭和一四巳

豫告

東奥年鑑の姉妹篇

青森縣總覽

（四六倍判一千三百頁内外
總クロース金文字箱入れ美本）

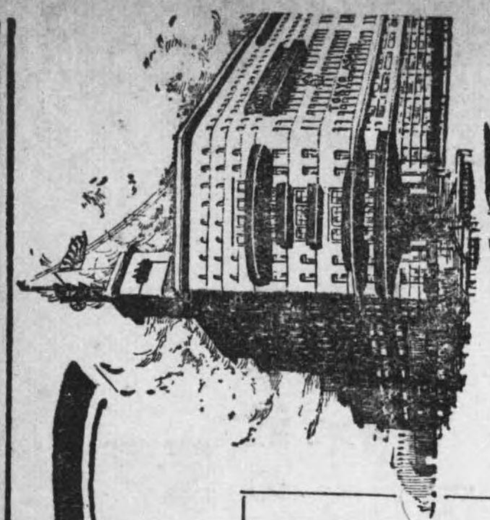
一名　青森縣四十年畧史

右十一月十日御大典當日を期して發行

青森市長島

東奥日報社

定價十八圓豫約十三圓（十月末日迄に金五圓添へ申込まれたし）



東京日日新聞社
朝日新聞社出版物

週刊アサヒグラフ（週刊）
週刊朝日（週刊）
アサヒスポーツ（月二回）
映畫と演藝（月刊）
アサヒカメラ（月刊）
コドモアサヒ（月刊）
朝日東京縮刷版（月刊）
日本年鑑（年刊）
日本映畫年鑑（年刊）
運動年鑑（年刊）
日本電氣年鑑（年刊）
日本美術年鑑（年刊）
國際聯盟年鑑（年刊）

營業品目

揮發油、燈油、輕油、重油、機械油一般、植物油一般、パラピン蠟、洋蠟燭、魚油
砂糖、小麥粉、牛馬糧麩、水飴、各種石鹼、燐寸
洗濯曹達、ミルク、鑵詰

ライジングサン石油株式會社代理店
青森市濱町九十四番地
株式會社 **東北タンク商會**
社長 横内忠作
電話三〇七、三四〇、一、三三八番
出張所（秋田縣大館町（電話八番）
（三戸郡小中野町（電話一二九番）

日本ゼネラルモータース株式會社
青森、秋田兩縣下特約店
青森市濱町五十一番地
オークランド號 シボレー號 純正部分品
横内モーター商會
（電話一、二五〇番）

青森市鍛冶町二十九番地
和洋菓子問屋 **横内商店**
（電話五五八番）

大同生命保險株式會社代理店
日本火災保險株式會社代理店
青森市濱町九十四番地
横内忠作
（電話三〇七、三四〇、一、三三八番）

大藏大臣免許

貯へありて力あり

勤儉身の爲國のため

有價証券割賦販賣所

市田公債部

青森市濱町

電話 九六二・一三八七

14.4
814

終